

---

# 野口君観察日記

inisie

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

野口君観察日記

### 【Zコード】

N3918Y

### 【作者名】

inisi

### 【あらすじ】

一人の女の子と一人の男の子。  
とても仲の良い幼馴染。  
二人で一緒に過ごしていました。  
一人では駄目だったのでしょうか。  
二人だから・・・。

このお話は異世界ファンタジー幼馴染物となります。

## 第1話・学校編。

・・・・・・・・・・・・

手の中にある剣が血に染まつていく。

「わりいな。手間かけたわ。」

「・・・君ならいいよ。」

「泣くな。」

「・・・君こそ泣いているじゃないか。」

「俺は泣かねーよ。」

「そうだね。」

・・・・・・・・・・・

なんだつたのだ今夢は。

どうかしたのだろう。

現代社会に剣などもつている人など居ない。

不思議な夢だつたのだろう。

「ん。いい朝だね。」

天気は快晴。雲ひとつ無い。

一つ不快なのが携帯電話がなり続けていることだけか。

携帯電話を取り電話に出る。

「どうしたんだい？野口君？」

「やつと出たか・・・時間見る。」

時間?何を言つていいのかな?今日は春休みのはずで。

「言つておくが今日は始業式だ。」

そうだったね。

今日は高校生最後の1年の初日だつたね。

「もう一度言つからよーく聞け南。」

「時計だね?分かっているよ野口君。」

「9時15分?どうしたことだらう。私の熊さん時計が壊れてしまつているね。」

「野口君。時計が壊れていたよ。今9時15分と表示されている。」

この時計も小学校から使つてあるからね。さすがに寿命なのだろう。「壊れてねーよ!どこをどうみたらそうなるんだよ!良いから早く学校にこい!」

「壊れていないのかい・・・。」

天気は快晴、目覚ましを使わず起きた気分の良さが全て飛んでいつてしまつたね。

3

「失礼致しました。」

まったく一度や2度の遅刻で先生方も口ひつるかい事だ。

「おはよーさん?南。」

「やあ、野口君。」

何故疑問系?と思つたらもう10時。

これは”おはよう”なのか”こんにちわ”なのか迷う時間だね。

「南・・・お前去年一昨年で懲りてねーのか・・・?」

「なんのことだい?」

「・・・お前2年間で50回以上遅刻してんだぞ・・・。」

なんで徒步15分の学校でこんなに遅刻してるんだよー。」

「なぜだろうね。不思議だね。世界のななふし・・・。」

「七不思議にはなんねーよ!只の遅刻だらうが!」

「前2年間で50回以上遅刻してんだぞ・・・。」

さすがにヒロやネッシーと同格なのは駄目だつたようだ。

「野口君の突つ込みが気持ちよくなつてきたのではないだろうか・・・。」

「これは困つたな。」

そう言つて野口君の手を握る。

「それは駄目だろ・・・つておい！なんで手握つてるんだよー。」

「良いじやないか減るものじやあるまいし。」

暖かい。春先とはいえたまでも寒い。これはやみつきになりそうだね。

「離せ！減るわ！俺の彼女が出来る確率が確実に減るわ！

それに、このまま教室に行つたらお前を迎えにいつた変人みてーじやねーか！」

そんな出来ない物の確率減つた内に入らないのではないかな・・・。  
「野口君。0・0000000000000001%といつのは〇と見なされる場合もあるのだよ？」

「そんな少くねーよ！せめて10%はあるわ！」

・・・微妙な数字だね・・・自信があるのか無いのか・・・。

「はあ・・・もう良い少し滝川先生に話があるから行つて来るわ。手を離されてしまったね・・・残念だ。」

滝川先生といつのは陸上部の顧問だつたかな。

体育会系の部活といつのは大変だね。

教室のドアを開ける。

ふむ・・・新しいクラスだね。

知らない人も1／3程いるようだが去年同じクラスだつた面々も健在と。

ああ絢子さんもいるね。今日も綺麗だね。さすが学年2位。

「おはよー。南さん。」

「おはよう。絢子さん。」

「また遅刻したの？遅刻減らさないと駄目だよ？」

「今日は時計が故障してね。アラームが鳴らなかつたのだよ。」

嘘ではない。はずだ。

「嘘をつけ！ 嘘を！」

おや？ 野口君？ もう戻ってきたのかい。

「滝川先生への用事は終わつたのかい？」

「あーあの人人が今日から担任だからな。」

・・・つかいっぱしりも大変だね・・・。

「部活の顧問が担任というのも大変だね。」

「まあいいんじゃね？ どうせ誰が担任でもかわんねーよ。生徒会長なんて使われてなんぼだろ。」

「そうだろうね。」

「お前らー仲良いのはいいが席に座れー。」

滝川先生が来たようだね。

周りは皆座つているようだ。

「げ、はい。失礼しました。」

本音が漏れているよ野口君。

2時間目はHRのようだね。といふか始業式が終わつて皆集まつた  
ところ感じか。

「俺は担任の滝川だ。これから1年間よろしく。

じやあーまあ、全員自己紹介してもうりつ。

とりあえず野口、お前からしろ。その後進行も頼む。

「はい。」

野口 克也君。  
のくち かつや

私の幼馴染だ。

この北真学校の生徒会長を務める。

学力テストにおいては学年1位。

陸上部においては400mをインターハイ出場。

高校2年生の時に出た論文コンクールでは優秀賞。

団碁部においては団体戦で県2位。

いやはや完璧だね。

とても私には真似出来ないよ。

顔は良いほうだろう。少々子供っぽい所があるのだが。

髪はツンツン伸びる真っ黒な短髪。

身長は185cmぐらいだったかな。

小林 紗子さん《こばやし あや》さん。

学業優秀 眉目秀麗 品行方正

学校のアイドル的存在だね。

髪はショートの薄い茶色。

目が大きく。

誰からも好かれそうな顔をしている。

身長は私より高く160cmぐらい。

胸が大きい。

大きいね・・・。

そして、私の一人目の幼馴染だ。

「久坂・・・久坂！」

「なんでしょうか滝川先生。」

せつかく紗子さんことを考えていたのに邪魔をされてしまったね。

「・・・はあ・・・お前の番だ。問題児っていうのは本当だったみたいだな・・・」

失礼な。私のどこが問題児だと・・・ひとおつと血口紹介だったね。

「私の名前は、久坂くさか 南みなみ

部活は団碁部の部長。部員は3名。

文化祭での女子ランキングは何故か3票だけ入つていて30位タイだつたかな？」

「南！それは言わないって……あ……」  
髪は長く、腰まである。

一度も髪の毛は染めた時がないので真っ黒だ。

身長は150cm 体重42kg

スリーサイズは秘密だ。

絹子さん程ではないが整っていないほどでは無いだろう。  
少し釣り目がちなのが……気になるがね。

それにも野口君。

君は本当に墓穴を掘るね。

それを言つてしまつては自分がばらしたと言つているようなものだよ。

フフフ。

席替えも済んだ。

野口君は教壇の前か、隣が良かつたのだがね。  
絹子さんは前の入り口の近くと。

私は窓際の一番後ろと……

これは作為的なものを感じるよ……。

滝川先生……やつかいなのを後ろにしましたね……？

休み時間になつたね。

野口君は寝た振りか。

それはそうだろうね……この状況を見ると寝たくなるのは分かるよ……。

「ねえねえ！久坂さん！野口君とはどんな仲なの？」

「恋人だよ。今日も朝電話で起こしてもらつたのだよ。」  
大きな声で言つた。

クラス中の視線が集まる。

「嘘をつけ嘘を！ただの幼馴染だろうが！」

起きたね。野口君。一人だけ寝た振りなのは卑怯だよ。

「そうだね。幼馴染だね。小学校中学校は違つが。」

「あー小学、中学が違うのは家同士が道路を挟んでて学区が違うんだよ。」

何故道路を一つ挟んだだけで学校が違うのだろうね。  
選べたら良かつたのだけども。

「え？ そうなの？ けど二人は高校で……一緒と……。

もしかして高校は一緒の高校になりたかったとか！？ キャーー！」

「 そうなのだよ。野口君が高校は一緒になりたいと言つてね。  
ずっと寂しかつたと泣いて……」

「だから真顔で嘘をつくな！」

真顔ではなく、これが素の顔なんだがね。

「 ただ近くの高校を選んだら、南もまったく同じ理由だったじゃね  
ーか！」

「 そうだね。そういう事にしておいてあげよひじやないか。」

「 だあーーーーー！」

叫び出したよ。

「 ・・・もう良い。」

拗ねてしまつたよ。

「 野口君・・・頑張つてね・・・色々と。」

色々の意味が気になるね・・・。

絢子さんを見てみる。

ため息ついているね。

ふふ。ため息をついている顔も綺麗だね。

さて3時間目が始まつたね。

先生のお話か・・・眠くなるね。

先程の夢の事を考えよつ。

私には予知能力がある。いや予知と言つ程大した事は無いかな。  
精々、明日雨が降る。ぐじで当たりが出る事が分かつた。程度だ。  
それも自分が関係している事でなければ駄目だ。  
自分がまつたく関係無い事やあまりに突拍子も無い事は当たつた試  
しがない。

それに加えて、自分の意識で見る事が出来ない。  
夢で見る。現象が起きる直前に眩暈が起きる。  
そしてフラッシュバックが起きて、 が起きる。 という事が分か  
る。

今回は前者のようだね。

何故、野口君を私が剣で刺さなければならないのか。  
・・・これはあまりに突拍子も無い事だね。  
この夢は外れるのだろう。

今までの夢でさえ外れる可能性はたくさん有つた。  
くじなど引かなければ当たらなかつただろうしな。  
もし私が、野口君のことが好きではなくて刺した・・・有り得  
ないな。

私が嫌いならば刺すだけでは済まないだらう。

もし正夢だったというのなら逆夢にしてしまえば良い。  
キスでもすれば大丈夫だらう。

おや？ 雨？

先程はすごい快晴だったのに、残念だな。

せっかく今日は散歩にでも行こうと思つたのだがな。  
色々と買いたい物があつたのだけども。

そういえば、野口君の部活も今日は無いはずだ。

食料とか服とか見たかったのだけども、どうしようか。  
また下着売り場に連れていくのも楽しいかもしれない。

ん？ 野口君の頭が揺れている？

野口君も昨日は寝不足だったのかな。

先生の目の前で寝るわけにはいかないだらうから頑張っているのだ  
ろう。フフフ。

野口君は見ていて飽きない・・・ね。

椅子が倒れる音がした。

気にしていられない。

先生が何か叫んでいる。

気にしていられない。

クラスメイトの悲鳴があがつた。

机が邪魔だ。

野口君に届かない。

すまない。

机の上に飛び上がる。

スカートが翻る。

野口君。

なんで、消えようとしているんだい！

また、私を一人にする氣かい！？

届いてくれ。

届いて！

もう体が見えない。

動いて。

壊れても良い。

もっと早く動いて！

指が光に消える一瞬。

私の指先が、その光に・・・野口君の指に触れた。

「良かつた・・・」

私の意識はそこで途絶えた。

第1話・学校編。（後書き）

第1話読んでいただきありがとうございました。

## 第2話・異世界へ。

目が覚める。

枕はどこだらう。

硬い・・・。

床で寝てしまつたのだらうか・・・

草の匂いがする・・・

私は外で寝てしまつたのだらうか・・・

「いや。それはない。」

目が覚めた。

さすがに外で寝る趣味は無い。

ここはどこだらう?

庭?公園?

「ハツ・・・野口君?」

野口君はどこへ行つたのだらうか?  
確か・・・・・立ちくらみがする。  
ずっと寝ていたような感覚だな。

・・・近くにいるのだらうか。

ガサツ

音がした。

何かいるのか?

警戒心が高まるのが分かる。

「君?なんでここに?」

人だつた。それも日本語のようだね。

野口君が・・・消えて・・・消える?

・・・ここは本当に日本なのか?

「君?言葉は通じる?」

「はい。大丈夫です。私は久坂 南。こここの近くに短髪で黒髪の大柄の男の人人が倒れていませんでしたか？」

つとまじまじと相手の顔を見る。

20歳前後。私より年上といつた所かな。

髪は・・・白？銀？

顔立ちは端整だな。

学校に居たらファンクラブができそうだね。

「私より大柄で、短髪の黒髪の男？」

「はい。知つていたら教えて欲しいのですが。」

考へてる仕草が様になつてゐる人だね。

「ああ失礼した。淑女に名前も教えていなかつたとは、私はエル・シユタイン。エルとでも呼んでくれ。」

「・・・日本語で喋る外人。何故でしじう違和感がたつぱりですね。こんな所で、話すのもなんだろう。館のほうへは連れていけないが警備用の建物で話しよう。少しは役に立てるかもしれない。」

ありがたい・・・喉が渇いてしようがなかつたのだ。

私は頷いてエルさんの後について行つた。

「黒髪の男性・・・そういうえば私は黒髪の女性を見るのは生まれて初めてだ。こんなに綺麗なのだな。」

・・・日本では無い事が早速確定してしまつた・・・いや、もしかしたらこの家から出た事が無い人なのかもしれない。・・・なさそうだね・・・。

「ここだよ。」

大きいですね・・・私の家より大きいでしょ。

どれだけ大きい邸宅なのでしょうね・・・。

これだけの警備の人が必要ということはよっぽど大きな家なのでし

よつ。

応接室らしき部屋へ通された。

「この明かりは一体なんだろう?」

天井に吊るされている明かりは全く無く、壁にかかつた明かりのみ。

「ミナミ・・・で良いかい?」

「ええ、大丈夫です。出来れば何か飲み物を頂けませんか?」

「ああ・・・失礼した。何が飲みたい?」

「出来れば「ティー」が良いのですが。」

「「ティー」とはなんだ?」

「・・・「ティー」を知らない地といつのは世界にあるのか・・・ある  
だろうあると思おう。」

「紅茶はありますか?」

「ああグリュッデルとブルーゲンがあるがどちらが良い?」

「なんでしうその名称は・・・。」

「適当に言つて私を騙そうとしていませんか?  
紅茶には詳しくないので・・・というか午後ティーとかティースティ  
ーぐらいしか飲みません・・・。」

「ここでグリュッデルを「下さい」とか言つたら”そんな銘柄ねーよ!騙  
されたー!ばーかばーか!”とか言われませんよね?」

「どちらでも良いですよ。エルさんのお勧めのほうを。」

「では、ブルーゲンで。」

びっくりしました。

真っ黒です。

「「ティー」じゃないんですか?これは?

「どうだい?美味しいだろ?」

「ええ。とっても。」

味は紅茶だ。なんだかこれは、違和感ばかりで頭がおかしくなり

そうだ。

「それで、黒髪の男性の事だつたね。あそこには君しか居なかつたよ?」

「そうですか・・・。」

野口君はどこに行つたのだろうね。

「その男性を捜すというのなら近くの大きな街まで送るよ?」

「いいのですか?」

なんという良い人なのだろう。

「ここから一日程馬を走らせれば到着する。」

・・・馬?馬と言いましたか?

「その街の名前は?」

「イクエルという街だが?」

・・・おかしい気がします。いや最初から全ておかしいのでしょうか?」

「・・・ナミー・ミナミー。」

「失礼しました?なんでしょうか。」

話をまつたく聞いていなかつたね。困つた。

「私は主の所へミナミの事を伝えにいく。少ししたら戻るよ。休みの許可も貰わないといけないからね。」

「はい。分かりました。・・・ああ最後に一つ良いですか?」

「なんだい?」

「アメリカ・イギリス・ドイツ・フランス・ロシア・中国・日本この単語に知っているものはありますか?」

「・・・分からないな。ドイツとかいうのはドゥーラーと云う村が

近くにあつたがそれの事かい?」

確定しましたね。

・・・野口君・・・君は一体なんなんだい?」

「いいえ。有難うございました。」

さて・・・人も居なくなつた事だし纏めよう。  
ここは違う世界。99%確定していいだろう。  
もしかしたら絶海のとてつもなく大きな孤島で地図にも乗つていな  
い場所の可能性もある。

・・・ないね。今の地球の技術でそんな島があるとは思えない。  
・・・ならば、なぜ野口君がここに呼ばれたのか。  
まったく分からぬ。

情報が足りない。

足り無すぎる。

いや・・・まずは私の状態だ。野口君の事も大事だけども。  
制服。ブレザー。黒いセーター。スカート。靴下。ローファー。  
持ち物。ブレザーに入れっぱなしのボールペン。  
そして携帯のみ。

携帯は・・・圈外と。

時間は9時と表示されているね。

外は明るかつたから間違つてはいないだろう。

・・・きた。

眩暈が来るのが分かつた。

頭痛が酷い。

倒れそうだ。

・・・私が縛られている?何故?

・・・いやおかしいだろう?

エル・シュタインという人はこの館の警備をしていると言つた。

何故、私を捕まえない?

こんなに怪しい私を捕まえない?

何故、こんなに優しい？

ここが日本ではなく地球上に無い場所ならば唐突に捕まえられて奴隸にでもされてもおかしくない。

・・・この眩暈はそういう事？

いや・・・エル・シュタインという人がただ単にお人よしで優しいという可能性もある。

・・・野口君・・・君ならどうする？

## 第2話・異世界へ。（後書き）

第2話読んで頂ありがとうございました。

### 第3話・村へ。

野口君・・・君ならびにするかな・・・?  
ああ・・・いや野口君は単純な所があるからね・・・。  
多分普通に優しい人だな。で済ませてしまう可能性が高い。  
それをずっと私が諫めて来たんじやないか。

そりと決まつたらする事は一つだね。  
どうやって逃げるか。

- ・・・窓。開いた。けど人が通れる程じゃないね。
- ・・・ドア。もしさつきの予知があつてているのなら警備がいるだろうね。保留。
- ・・・他の出口。ないね。そういうえば野口君が持つてきた漫画にコヌキとかいうのがあつたね。けれども私に念能力はないから、壁は壊せないね。
- ・・・消去法でドアか・・・。

「すいません。・・・お手洗いに行きたいのですが?誰かいりますか?」

「あつ失礼しました。今、開けますね。」

鍵がやはりかかっていたか。

ガチャガチャと動かしていたら怪しまれたかもしねないな。

「どうぞ、こちらです。」

「ありがとうございます。」

・・・びっくりした。

なんだあの髪は緑色？

これは99%が100%に変わった……かな。

「こちらです。」

振り向いた瞬間に腕を振り上げる。  
綺麗に顎に入つたね。

「うつ・・・・・。」

ふう・・・男の人といえど執事みたいな人で助かった・・・。  
エルさんのような人だつたら危なかつたね・・・。  
何か持つている・・・・?

園芸用みたいなナイフがあるね。

貰つていこう。

ここがどれだけ危険な所か分からぬ  
明かりが欲しい所だね・・・。

この照明みたいのは・・・外せるんだね・・・。

一体この照明はどこから電気や電池をとつて  
いるのだろう・・・?  
ただの球体だね。

電池をいれる穴もないと・・・。

異世界だとしたら電気以外で動くものがあるのかもしれないね。

「行こう・・・・・。」

もう盗れそうな物は無いね。

ばれないよう歩く。

誰も・・・居ない？

トイレが入り口の傍で助かつたよ・・・。

脱出出来たね。

野口君。今行くよ。

今頃泣いていないといいけどね。

泣くわけねーだろ！とか言ひそつだね。フフフ。

早く会いたいよ。

入り口へと向かう。

車輪の痕。

馬と言つていたから馬車はあるのかもね。

この車輪に沿つて歩いていけばどこか村には着くのは久しぶりだ  
一応道もあるようだしね。

・・・アスファルトで舗装されていない道路を歩くのは久しぶりだ  
ね。

ガサツ。

音がした。

・・・風か。

犯罪行為をしているのは理解している。

捕まる訳にはいかない。

早く村か街に着くといいのだけども。

「はあ・・・はあ・・・」

4・5時間は歩いただろ？

こんなに歩いたのは久々だね・・・

整備されていない道というのはこんなにも疲れるものなのかな？

「お腹が空いたな・・・喉が渴く。」

そういえばお昼を食べないでこちらへ來ていたね・・・。

1日何も食べていないのか。

夜になってしまったね・・・外で寝た事は一度もなかつたね・・・

せめて火があれば良いのだが・・・

異世界だと言うのなら魔法などがあれば楽なのがな。  
空を飛んだりするのは気持ち良さそうだ。

FFやDQよろしく手から火でも出ればいいのにな。

「ファイヤー・・・」

出るわけがないか。

ボツという音がした。

なんだ？今の音は？

手を見る。火が手の数cm手前にある？直径10cmぐらいの炎の塊のようだね・・・。

これはどうした事か。

この世界には本当に魔法があるのだろうか？  
いやいや有り得ないだろう？

・・・消えるのかこれは？

・・・消えて下さい。」

消えた。

「ファイヤー。」

手元が光る。

フフフ。野口君。私は手から火が出るようになつたよ。  
多分君は、羨ましがるだろうね。

火とか主人公の特権だろうに。

私よりも野口君に魔法を使えるようにしてあげてくれると良かつたのだけどね。

すごい良い笑顔が見れそうだ。

うん。想像の中とはいえ良い笑顔だね野口君。

私も笑顔になつてしまつよ。

明るくなってきたね。

うたた寝ぐらゐしか出来なかつたね。

さすがに寝れないか・・・。

歩こう・・・歩かないと野口君に会えないぞ・・・

陽射しが強いね。

日焼けか・・・ずつとしてなかつたね。

小さい時はずっと外で走り回っていたから黒かつたしね。今は外で遊ぶという事も無くなつた。

白くなつてしまつたね・・・。

人が騒いでる声が聞こえた・・・。

お祭り?

助かつたというべきか。

せめて水が欲しい所だね・・・。

「うわあー！」

「モンスターがきたぞー！」

・・・この村は避けるべきか・・・。

なんだあの猪は・・・大きいな・・・人の2倍はありますね・・・  
どこの恐竜ですか。

何を喋つているか聞こえないね・・・。

頭が働かない。

・・・大きい人が3人出てきたね。

大丈夫なのでしょうか？

私に魔法が使えるというのなら、この世界の人にも使えるだろ？

・・・剣か・・・嫌な事を思い出すね。

・・・人が飛んだね・・・。

はあ・・・。

まあいい。なんでもいい。あれを倒せればご飯を食べれるだろ？

「ファイア。」

これはどうすればいいのだろ？ 投げればいいのかな？

上に放り投げてみる。ボールのようだね。

あたつてください。出来れば1発で倒れてほしいね。

オーバースローで投げる。

綺麗に飛んでいく。

人のほうに・・・。

私にコントロールは無いようだね・・・

モンスターのほうを見る。

火の弾が曲る。

・・・意識すれば曲ると。

当たったね。

300mは離れていたのだが良く当たるものだ。  
的が大きいのもあるね。

声が聞こえる。

燃えている・・・。

倒れたね。

申し訳ない猪さん。私のご飯の為に死んでください。

「お嬢ちゃん！！助かっただよ！」

「いえ、お礼よりも・・・ご飯とお水を下さい。」

ぽかーんとした顔をしていますね。

それはそうでしょう・・・見た事も無い格好をした女があの大きな  
猪を倒し。ご飯をくれと催促しているのでですから。

「あつはつは！お嬢ちゃん！腹が空いてるのか！いいぞいいぞ！俺  
の宿にこい。」

「お腹が空きました・・・」

ぱくぱくと食べていく。

塩味が基本なのだろうか。

「お嬢ちゃん・・・その体のどいにそれだけ入るんだよ・・・」  
しまった食べ過ぎましたか・・・。

べたべたとお腹を触る。

「すいません・・・2日程何も食べていませんでしたので。」

「そうなのかい? 見た所良い所のお嬢ちゃんのようだからも。」

「道に迷つてしまつて。」

嘘は言つていないだらつ。道は道でも世界の道を間違えてしまつて  
いるわけだが。

「ハツハツハ! いいぞ。どんどん食べろ。」

・・・食べれるつりに食べましよう・・・次はいつ食べれるか分か  
りません。

「ふう・・・」

お腹いっぱいですね。

「お嬢ちゃん強いな。俺も村の中じゅ強いほうだったんだが。」

「いえ、それ程でも。」

「あの猪は畠を荒らしまわつていてな。助かつたよ。今日の夜はあ  
れを料理するから楽しみにしてな。」  
ぼたん鍋でしょうか・・・ちょっと楽しみですね。

「ああ・・・俺の名前はアルフっていうんだ。」

アルフさんですか。私は偽名とか使つたほうがいいのでしょうか・・・

・いやどこから名前が野口君に届くか分かりません。

「南です。久坂 南です。」

「家名が南? 珍しいな。」

・・・家名？苗字のことでしょうがね。

「いえ、違います。ミナミ・クサカです。久坂が家名ですね。」

「ミナミ嬢ちゃんか。で・・・あの火はどிで覚えたんだ？」

「珍しいのだろうか？」

「私の国の国民的英雄の勇者さんから教えて頂いたのですよ。」

嘘ではないだろう。存在はしていないが。

「ハツハツハ！ 勇者か！ うちの国の勇者とどちらが強いのだろうな！ 今回の勇者は強いらしいからな。」

・・・冗談でしょう？

悪の大魔王でもいるのですか？ この世界には？

・・・冗談であつてください。

すごい嫌な予感がします。

「母ちゃん！ あれどこやつたつけか！ あの紙！」

・・・冗談・・・ではなさそうですね・・・証拠品を見せられそうです。

「ああ・・・これだこれだ。国から配られた紙でな。」

我が國イスター・ナ皇國に新たな勇者が誕生した。  
名はカツヤ・ノグチ。

聰明であり力は強く、モンスターが太刀打ち出来ない程の俊敏さをもつ。

それに加えて若く、猛々しいほどだ。  
長い文章を纏めるところな感じだね。

・・・野口君、私が苦労している間に君は王宮にいたのかい・・・。  
・・・なんで君は「面倒」との中心にいるのかな・・・。

・・・絶対に君は姫様やメイドさん達にフラグを立てているのだろうね。

優しいからね。

フフフフフ。今から余つのが楽しみだよ。  
君が鼻の下を伸ばしているのだったたら、殴って蹴って・・・・・  
そして抱きしめて。  
日本に帰ろう。

ここは私達の居る世界では無いのだからね。

知っているかい？野口君。

勇者というものは脅威が終わった後は厄介者でしか無いのだよ。

### 第3話・村へ。（後書き）

第3話読んで頂きありがとうございました。

## 第4話・思ひ出と共に。

「ふう・・・」

ここに来て・・・何度ため息をついたかな・・・。

たつた2日。

まだ2日なのか。

1年分は何かあつた気がするな。

「ミナミちゃん？貴女・・・昨日？寝てないでしょ？田の下に隠  
ができるよ。それにご飯を食べた後ずっと欠伸してるじゃない。  
ああ・・・アルフさんの奥さん・・・。」

「上の部屋にお湯もつていくから、体を拭いたら一度寝たほうがいいわ。女の子がそんな顔をしていては駄目よ？ああ、着替えは部屋に持つていくわ。」

「ありがとうございます。」

せつかくの好意だ・・・休ませて貰おう。

・・・眠いね・・・。

それに体が拭けるのは有り難い。

昨日は何も出来なかつたからね・・・髪がべたつとして気持ち悪い・・・。

「夜になつたら起こすわ。夜ご飯は美味しいものがたべれるわよ？」

「楽しみです。」

猪を食べるのは初めてだ。美味しいのだろうか？

制服を脱いでベッドの上に。

硬いベッドだね・・・いや贅沢だねそれは。

横になれるだけでもありがたい事だ。

お風呂は無いのだろうか？シャワーぐらいありそなうだが……？いや、ありそなうだが一般には出回ってないのだろうか？体を拭く。

髪を濡らし汚れを落とす。

「ふふ。こんなに髪が伸びると大変だな。」

昔は短かつた。男の子とほとんど変わらなかつたな。  
野口君。君は髪の長い子が好きだと思つたのだが、どうなのだらうね。

女性らしくなれりとしているのだけどもね。

? · · · · · · · · ?

小学2年生になつた。友達も出来た。そして · · ·

「おい久坂！勝負だ！」

「なんだい？野口君、またかい？昨日負けたばかりだらうっ！」

「つるせえー！昨日の事なんかしらねえー！」

「つるさい。」

「 · · · ともかく勝負だ！」

「良いよ。では、あの木までどちらが早いか。どうだい？」

「今日はまけねえ！絶対に泣かせてやる！」

「泣くのは君のまづだと思つただね。」

「ふん！いくぞ。よーい！」

「どん。」

二人で走り出す。あの木まで100mと言つた所かな？「ランドセル

は重いけども調子は悪くない。 · · · 勝つたね。

「くそつーなんでお前そんなに足が速いんだよー！」

「フフフ。野口君には負けられないからね。では、私は宿題があるから家に帰るね。」

「いやいや…じゃあどっちが宿題を早く終わらせるか勝負だ!」

「いいよ。じゃあ私の家に行こつか。」

「おう! 今度は負けねえ! じゃあランドセル置いてから久坂の家にいくな!」

「期待しているよ。」

「お母さん、野口君が後で来るから、来たら私の部屋に通して欲しい。」

「仲が良いのね。分かつたわ。後でジュースもつていくわね。ふふつ。」

”優しい優しいお母さん。

今考えるとすごく野口君の事を気に入っていたのだろうね。”

「ただいま!」

大きな声だね…。2階の私の部屋まで声が聞こえてきたよ。後、ここは君の家じゃないよ。野口君。

「久坂ー! きたぞー!」

「よく来たね。どうぞ。」

学習机ではなく足が短いタイプのガラステーブルに一人で座る。

「はい。」クッシュョンを手渡す。

「さんきゅー。つてなんでパンダなんだよー。」

「君はパンダみたいだからね。」

「どういう意味だよ!」

「つるひー。」

「俺は算数のドリルだ! 久坂は?」

「漢字の書き取りだね。」

「じゃあ勝負だ！よーい！」

「どん。」

一人で黙々と宿題を進めていく。

今日は静かだね。

野口君もやれば静かになるんじゃないかな。

「・・・うーん。えーっと。あーー！・・・」じーが。

「うるさい。」

静かだと思つたらうるさかつた。

「野口君、君は喋らないと勉強が出来ないのかい？」

「うるせー。良いのか？喋つてて？俺が勝つちまう・・・

「終わつたよ。」

「・・・また負けかよー！」

「算数はどこをやつっているんだい？」

「算数なら得意だよ。見て上げられるかもしれない。隣に座るね。」

「・・・お、おう。」

「なんで顔が赤いんだね？野口君。」

「うるせー！赤くなんてねーよー！」

真っ赤だよ野口君。

コンコン。

ノックだ。お母さんが飲み物を持ってきたのだろう。

「二人共、勉強ばかりしてると頭痛くなっちゃうわよー。少し休憩したらどう？」

「そうだね。野口君休憩にしよう。」

「はー・・・つつかれたー半分は超えたな。」

カフェオレが私の所に。野口君の所にオレンジジュース。

美味しい。喉が渇いてたのだろうね。

いつもより美味しく感じる。

「おーい久坂ー！」

「南でいいよ。」

「み、・・・それは名前だらう？ちちちち！」

なんだらうその仕草は。また漫画の影響かな。

「久坂！ライバルはな！名前で呼ばないんだ！まあ俺が勝つたら呼んでやつてもいいかな？」

「残念だね・・・野口君にこれから先、一生名前を呼ばれないんだね・・・。」

「一生俺が負け続けかよ！！」

「うるさい。あ・・・黙つてしまつては駄目だよ。さつきは何で呼んだんだい？」

「あ、あー・・・なんだつけ？」と首を傾げている。

「私に聞かれても困るな。」

「そりだそりだ。久坂つてなんでかふえおれなんて飲んでんだ？それすげー苦いだろ？」

「美味しいよ？飲んでみるかい？」

カップを差し出す。

「う・・・・・飲んでみる。」

「なんで顔が赤いんだい？」

「うるせー！」

一口舐めるように飲んでいるね。野口君。犬のようだよ。

「にづえー！超にづえー！なんだこれウルトラにづーんだけどー！」

「うるせー。」

「・・・・」

「・・・美味しいのだけどね。野口君には早かつたようだね。」

「なーおばさん！俺も明日からかふえおれにするーその勝負買つた！」

勝負では無いのだけどね。

勝負だとしたら私はもう飲めるのだから、私の勝ちが決まつてしまつていてる。

けども私は笑顔で答えた。

「ああ、良いよ勝負だよ野口君。」

「本当に一人は仲が良いのね。」

お母さんが笑っている。

すくなく嬉しそうだ。お母さんが嬉しいのは私も嬉しい。

? . . . . . . . . . . . ?

小学5年生になった。

雨の日だった。

お母さんが死んでしまった。

今日はお母さんのお葬式だ。

「酷かつたらしいね。トラックとトラックに挟まれ……。」

「しつ。子供がいるんですよ?」

そんな声が聞こえる。

「庭に行つてきます。」親戚の叔父さんに伝える。

庭へ向かう。

なんでだろうね。

唐突すぎて寒感が湧かない。

ぱつ  
ぱつ

雨の音が聞こえる。

庭についた。

誰かいるよつだね。

「うつ・・・・・叔母さん・・・・。」

野口君のようだね。

「あ、久坂・・・・。叔母さん・・・死んじやつたん・・・だな。」

「そうだね。」

「なんでだろ？ な。」

「なんでだろ？ うね。」

「久坂……落ち着いてるんだな。」

「そうだね。落ち着いているといつかは……。」

ぱつ

雨が少し強くなつたようだ。

「野口君、そこにいると風邪を引いてしまつよ。家に入らひ。」

庭から家へ視線を移す。

「ああ……そうだな。」

・・・抱きしめられた。

「どうしたんだい？」

「・・・」

「ふふ。私を抱きしめたくなつたのかい？ 野口君も男の子だね・・・。」

「南・・・。」

「おや？ 名前では呼ばないのではないのかい？ 確かライバルは名前で呼ばないのでは？」

「そんな昔の事・・・良く覚えてるな。」

覚えてるよ。

ずっと野口君、君の事を考えていたのだから。

「南、俺お前が頼れるよひなやつになる。」

「うかい。」

「お前がいつでも泣けるよひじてやるよ。」

「う・・・かい。」

「もう5年も一緒にいるんだからな。南の考えてる事ぐらこは分かる。」

「ふふ。すごい自信だね。」

「ああ俺達はライバルだからな。」

「そして幼馴染と。」

「そうだ。」

「そうだね。」

雨の音が強くなる。

「野口君。そろそろ抱きしめられていると窮屈なのだが?」

「・・・!」

「顔が真っ赤だよ。」

「うるせー!」

「うるせーよ。」

笑えているだらうか。

大丈夫だらうか。

いつもの私になれただらうか。

「野口君勝手に女の子を抱きしめた罰だよ。」

「うつ・・・なんだよ・・・。・・・分かつたわかあた!なんでも

こい!」

「そこに正座で座つてくれ。」

座つた。

「足を崩してくれてもいいよ。痺れてしまいそうだからね。」

「・・・正座かよ・・・ぶつぶつ。」

私は野口君の足に頭を置く。

「な!あ!」

「これが罰だよ。少しの間庭が見たいんだ。こうしていくれるかい?」

「・・・はあ・・・分かったよ。」

?・・・?・・・?

あれからだつたね・・・もう6年・・・いや7年か?

伸びる訳だ。

チリンと音がなる。

そういうえば持ち物にはこれがあつたね。

忘れていたよ。

ずっと・・・つけていると持ち物といつか、私の体の一部のような感じがしてね。

チリン

音が鳴る。

片方だけの小さなリングイヤリングの音が鳴る。

## 第4話・思ひ出せ。 (後書き)

第4話読んで頂ありがとうございました。

第5話・パンチ? (前書き)

## 第5話・ペンチ？

ドン。  
バタン。

すごい音がしている。

目が覚めてしまった・・・まだ明るいな。

数時間は寝れたのだろうか？

それにしてもこのパジャマは・・・一気に目が覚めるね。

ミニーにしても程があるだろう。

膝丈で薄い一枚だけと・・・まあ寝る分には楽で良いのだけどね。

ドアが開く。  
なんだろうね。

「お前がミナミ・クサカか？」

全身鎧が5人と。

顔が分からぬ。

とりあえず違いますと答えておこう。

「違います。人違いでは？」

「嘘をつかないでもらえるかな？」

後ろの人が兜を外した。

ああ・・・エル・・・なんとかさんか。

「俺がいるからな、顔は覚えていてよかつたよ。俺の主がお待ちだ。

一緒に来てもらおうか。」

・・・追いついたのか。

さすがだね・・・。

アルフさん達に売られた・・・？

いやどうだろう。

まあそんなのはどうでも良い事か。

「お嬢ちゃん逃げる……」

フルプレートの一人に体当たりをするアルフさん。

「アルフさん。止めて下さい。貴方が死んでしまいます。」

さすがに体格が良いアルフさんはいえ鎧と剣持ちに素手は危ない。

「私なら大丈夫です。安心して下さい。」

「……お嬢ちゃん……すまん……騎士さん方許してくれ……」

・

「ふん。今回は見逃してやる。少し時間をやる。村にこの娘を連れて行くことを伝えて来い。同意の上だとな。」

「くつ・・・分かつた・・・」

同意とは言い難いですけどね。

「こいつを縛れ。」

「縛つたら同意の上に見えないので?後、出来れば着替えさせて欲しいです。」

火を出したほうが良いのだろうか・・・  
いや・・・殺してしまいかねないね。

人殺しというのはしたくない。

「着替えさせる訳がないだろ?一何を隠しているか分からないのだからな!」

おや・・・緑髪の人だね。・・・ピッコロさんみたいだね。

「何を笑っている。」

「いえいえ、私の知り合いにとても良く似ていたので。」

「手を出せ。縛らせてもらう。右手を隊長と繋がせてもらひつ。」

・・・縄プレイですか。

「変態ですね。寝着に縄で手繫ぎなど。」

「ふん。言つていろ。隊長!準備出来ました。」

「よし行くぞ。ミナミ制服が入った袋は預からせてもらひつ。」

「匂いは嗅がないで下さいね。」

1日外を歩き続けた制服・・・汗もかいだからね・・・。

「誰が嗅ぐか！」

「それは良かつた。」

馬車へ連れていかれる。

「すいません、アルフさん。ありがとうございます。ご飯美味しかつたですよ。

・・・私の為にそんな顔をしてくれるんですね。さつきあつたばかりですよ。」

「何も出来なくて・・・すまねえ・・・」

「いえ、ご飯美味しかつたです。体も洗えました。睡眠も取れました。すく助かりました。」

・・・頭も働くようになりました。

あの状態で捕まっていたら錯乱した可能性もあるでしょう。  
本当に助かりました。アルフさん。

「行くぞ!!ナ!!。乗れ。」

「はい。引っ張らないで下さい。エルさん。」

痛いですよ。

ガタツ  
ガタツ

音がする。

馬車には私とエルさんだけと・・・暇ですね。

沈黙は嫌いではないのですけど苦手・・・ですね。

「//ナ//、何故・・・逃げた？」  
「説明しずらいですね。」

予知が起きたといつて信用してくれるでしょうか？無いですね。

「まあ・・・良い。一応強盗の罪なんだがな。そんなのはどうでも良いらしい。」

「そうなんですか？」

「つきりそれで捕まえられたと思つたのだけども・・・？」

「主が呼んでいる。俺はお前を連れて行く。それだけだ。」

「そうなんですか。・・・エルさんは何歳なのですか？」

「25だ。そんな事を聞いてどうする？」

「暇つぶしです。付き合つてトドセ。ソリとせ違つ世界があるひと思ひますか？」

「あるわけがないだろ？・・・ああ勇者はどこから来るのか。と  
いう事か？」

頭は良いほうのようですね。

「勇者は姫が生み出すものだ。生殖的にではなく、儀式によつて生  
み出される。」

「お姫様が・・・ですか。」

お姫様が野口君を呼んだと。

では、何故一緒に来た私がここにいるのでしょうか。

「先代の勇者は10年前に来た。だがすぐにモンスターに殺された。  
さすがにあの勇者ではどうにもならなかつたのだろう。」

「どういう事ですか？」

「歳が62歳と言つていたな。確かに雰囲気は強者のそれだつたが。  
・・わすがにあの高齢では無理があるだろ？」

「・・・それはその勇者さんも大変でしたね・・・。」

「ご冥福をお祈りします。見たこともない勇者さん。

こんな世界に呼ばれてさぞ大変だつたでしょ？」

「ミナミ、お前は今までの勇者達と同じく黒髪だ。何か関係がある  
のか？」

「一緒の学生でした。と言つて信じてくれますか？」

「はつはつは！笑い話だな！そんな事があるわけが無い。お前が勇

者の仲間ならばここから逃げるのも容易いだろう。先代の勇者ですら何匹もモンスターを一人で狩っていたのだからな。」

「そうですね。突然変異で黒くなってしまったんですよ。」

「まあその黒髪のお陰で主に呼ばれたのだろう。良かつたと思つておけ。」

「ええ。有り難いことです。罪にも問われないのでですから。」

ガタ

馬車が揺れる。

情報が少し集まってきたね。

・・・予知というのは外れないのかな。

今までのは夢通りに動いてきたので分からぬが。

・・・逃げても縛られる。

いや・・・動いたから縛られている。

多分動かなくとも縛られる結果にはなつていたんだろうね。  
昔も私がくじを引かなくて一緒にいた誰かがくじを引いて当てる、  
いらないものだつたりして私にくれる。そういう事になつていたの  
かもしけない。

確かこれは・・・なんというんだつたかな？結果が一緒なのを・・・  
タイム・・・・・いいか。

次は野口君の事・・・。

野口君はよっぽど強くなっているようだね。

あの猪やこの鎧を来た5人では適わない・・・と。

後、黒髪がよっぽど珍しいのですね。

あの大きな屋敷の主さんが私に会いたくなるほどと・・・  
最悪、火を出して逃げるべきなのでしょう。

私は野口君以外に体を差し出す氣など無いのですから。

・・・野口君。勇者だというのなら今がピンチだよ。  
助けには来てくれないのかな?

## 第5話・パンチ?（後書き）

第5話読んで頂きありがとうございました。

## 第6話・そして振り出し戸。

また振り出しに戻ってしまったか。  
スコロクで言つと一を出したらスタートに戻るがあつた気分だね。  
憂鬱だ・・・。

一体何時になつたら野口君に会えるのだりうね。

「エル・ショタイン様お戻りになりました！」

メイドの人達が世話しなく動いているね。

「マールさん。ミナミを着替えさせてくれ。」

「はい。エル様。

では、ミナミ様こちらへ。」

「逃げるとは思わないのかい？」

当然だろ？ 女の人一人なら逃げられない事は無さそうだ。

「逃げれるものなら逃げてみる。マールさんは俺より恐ろしきぞ。」

「・・・」

「では、ミナミ様こちらへどりう。」

いきなり笑顔が恐ろしくなつたね。

取り合えず話を聞いてからにしょい。

「ミナミ様、こちらのドレスに着替えて頂きます。」

真っ黒なドレスだね。

「なんですか？」

「主様がこちらのドレスに着替えて連れて来いとおつしゃつてあります。」

「どんな趣味ですか・・・。」

「では、失礼します。」

ワンピース型のパジャマを一気に脱がされた。

「え？あの？」

「足を上げて頂けますか？下着も黒のものが似合つと思ひますが？」

「いやいやいや頭が真っ白に一瞬なつたよ？」

「一人で着替える事が出来ます。下着は大丈夫です。」

「そうですか、ではお願ひ致します。」

「ふう・・・さすがに人に着替えさせられるは少し・・・ね。」

「・・・何故そこから離れないのですか？」

「そこにいると着替えづらいのですが？」

「脱がしましようか？」

「怖いとはこいついう事か・・・。」

ドレスに袖を通す。

「ふむ・・・似合つのだろつか？」

「良くなお似合いですよ。少し髪を梳かさせて頂きますね。」

「ありがとうございます。」

似合つそうだ。

野口君に見て欲しい所だね。

けれどもドレスを着させてどうするつもりなのでしょう？

「主様という人は、何を考えているのですか？」

「私達は主の命令に従うだけです。」

「そうですか。このメイド。」

「メイド、ではなく侍従です。」

「瀟洒じやないメイドさんですね。」

「では、主様の所までお連れ致します。」

「はい。」

歩く。歩きづらい・・・ヒールが高い靴は歩きづらくな・・・。

普段はほとんどローファーだからね・・・。

「ノンノン」

「主様。ミナミ様をお連れ致しました。」

「ああマールか入れ。」

エルさんもいるようだね。少しは安心。・・・出来るわけがないだ  
うひ。

あまりに安心出来ないから顔見知りがいるだけで安心してしまった。

「ほお・・・良く似合つてゐるじゃないか。さつきの情婦のような格  
好も良かつたがな。」

「変態ですね。エルさん。私はどちらに座れば?」

奥に30台の銀髪の男性の方がいる。

これが主様と。

マールさんが主さんの横に行つたね。  
入り口から入つて右にエルさん。

私は左かな。

「ミナミ、お前はそこだ。」

指を指された。

「床に座るのはちょっと・・・そこまで変態だつたのですか?あつ  
後マールさん、グリュッデルを下さい。」

ブルーゲンはコーヒーのようなもの。グリュッデルはどんなのか試  
してみたかったのだ。

「お前・・・自分の立場が分かつているのか?はあ・・・私の反対  
側の椅子に座れ。」

「ええ。分かつていますよ。あそこの主様は私に用があるのでしょ  
う?それも私に大きな利用価値があると。内容までは想像出来ませ  
んでしたね。このドレスはその為に必要な事。そんな所でしょう。  
エルさんの顔が引きつりましたね。」

「ミナミ。お前は馬鹿な振りをしているのだな。何故わざわざ?」

「乙女の秘密ですよ、エルさん。」「

「まあいい。主、ミナミ・クサカ・・・・」

「お前がミナミ・クサカか?」「

主様が喋りましたね。さて何の用でしようかね。

「そうです。私に何の用があつてここまで大事にしたのですか?」「

「ミナミ・クサカ。俺の娘となれ。」「

・・・首を傾げる。

何故かすこい突拍子も無い事を言われたような?

「ミナミ・クサカ。俺の娘となれ。と言つたのだ。」「

「聞こえていますよ。理解が出来なかつたのです。」「

「ふん、まあ良い。俺の娘となつたら、服も食べ物も好きにさせてやう。」

・・・そんなのが聞きたい訳ではないのですけどね・・・。

「理由はなんですか?」「

「勇者の陥落だ。まさか、こんな近くに勇者を落とせそうな奴がいるとはな。その黒い髪。」

勇者と同一のものだらう?・エルに聞いた時に閃いてな。同郷とまでは言わんでも勇者と話すにはうつてつけだらう?「

まさか野口君に会わせてくれるのだろうか?

これは願つたり叶つたりですね。

他にも理由はありそうですけどね。

「そうなのですか?勇者という方と結婚。それが理由と。」「

「あ、結婚は無理だらうが、勇者と深い繋がりをもつ。それがお前に伝える条件だ。」

それさえ出来るのならば、何でも願いを叶えてやう。」「

・・・結婚は無理?

異世界で野口君と擬似結婚も悪くないね・・・と考えていたのだが?

「何故、結婚は無理なのでしょうか?」「

「はっはっは！面白い事をいうやつだな。勇者はノーラ姫と仲が良いというのが国では一般的だと思っていたのだがな！お前みたいな無知もいるものなのだな！」

眉間に皺が寄ったのが分かりました。

「くーるに行きましょう。くーるに。落ち着いて。

「そうでしたか。それはそれはノーラ姫とやらはそれだけお綺麗なのでしょうね。」

言葉に棘がいっぱいしている気がするね。

「うむ。勇者はノーラ姫と毎晩・・・」

びきつ

・・・カップにビビが入つてしましました。

「マールさん。これを・・・すいません。」

「俺の名前はトラビア・シュタイン。ミナミ、お前はミナミ・シュタインとこれから名乗り1ヶ月後の夜会に出てもいい。」

「夜会というのは1ヶ月後しかないのですか？・・・と、その前にエルさん・・・？なんで貴方は警備なんてしているのでしょうか？」

何故主と同じ家名を持つ人が警備なんて？

「長男は対外的な事を。次男以降は家の事を。王都の家には執事の3男もいるぞ。全て家の事に関しての長は家の者がやる。ああマールさんは別だがな。あいつは別格だ。」

「1月以上後がいいのか？ そうなるとノーラ姫と勇者が結婚しかねないな。」

「いえ、違います。明日出発しましょうと書つてます。」

悠長に構えている気などありません。

「そこまで、勇者を落とす自信があるのか・・・？」

「ええ、勿論。」

目を合わせる。  
揺るがせない。

真剣勝負だね・・・。

「・・・分かった。マール、明日王都へ行く準備だけ済ませておけ。

後、グーラ卿が開く夜会が7日後にあつたな。一人走らせる。3日で行かせて夜会に出席すると伝えておけ。」

「畏まりました。主様。」

野口君、すぐ行くよ。

お姫様と二人で何をしていたのかじっくり聞かせてもらおうじやないか。

「忘れていたな。マール、飯が終わつた後こいつに作法を仕込んでおけ。」

「畏まりました。」

・・・作法・・・私も忘れていたね。

野口君と会えるだけで良いと思っていたのだがね・・・。

ああそうだ。トライビアさんに言わないとね。

「トライビアさん。これから、よろしくお願ひします。」

「えらく殊勝になつたな。先程とは別人のようだ。」

「ええ、私は貴方の娘なのでしょう?」

「そうだな。」

「お義父様”これから、よろしくお願ひしますね。」

・・・先は長いね。

まあ1歩ずつ進んでいこう。

焦れば焦る程遠くなるものだからね。

第6話・そして振り出しへ。（後書き）

第6話読んで頂きありがとうございます。



## 第7話・お風呂回

・・・豪華ですね。

食事となつたのですが・・・フォークとナイフですか。  
純日本人の私には辛いですね・・・。

使えないという事は無いのですが。

「ミナミ、食べ終わつたか?」

遠いですよ。お義父様。

5m近くは、ありそうですね。

「はい。大丈夫です。」

「そうか。マール、この後は任せたぞ。」

「畏まりました。」

「では、ミナミ様。城でといいますか、常識的に使われる貴族の作法を教えさせて頂きます。」

「一般常識も教えて欲しいのですが・・・。」

色々と質問もあるのだが、

「王都まで、どれぐらいかかるのですか?」

「馬車で5日程ですね。街道に沿つていればほぼ、モンスターも現れません。」

そこらへんはRPGの様なのだね。

道に沿つていると敵が出づらい。不思議だね。

「モンスターという存在は・・・」

「ミナミ様、先にドレスを脱がせて頂いてもよろしいですか?」

「ええ、構いません、一人で・・・」

「では、失礼します。」

・・・早いですね・・・

「これは良いのです・・・よね?」

下着を指差す。

「ええ、何着もあるものです。ドレスに関しては胸のほうと裾のほうの調整が必要です。」

「大きすぎましたか、いやはや困りました。」

「いいえ、まったく逆ですね。胸はあまり氣味、裾は引きずり氣味・・・新しいドレスの寸法を王都へ一緒に送つておきます。」

うるさい。

少しくらいはお世辞をいつてくれても良いではないか。

「ミナミ様、先程のお話は?」

「えっと・・・」

何だつたかな。ああそうだモンスターの事が聞きたかったのだね。  
「モンスターの定義を教えて頂けませんかか?」

「モンスターとは動物が大きくなつたものを言います。大体が2倍～3倍と行つた所でしそう。稀に5～10倍といつた大きなものがいますが数年に一度大掛かりなモンスター討伐が王都で行われるので、そこまでの大きさのものはほとんど存在しません。

他に人に寄生する類でしょうか。」

・・・人に寄生?そんなものまでいるのかい?

「人に寄生するものは1年以上身体の奥に住み込んだ病気が刺青と現れます。そうした人は凶暴になり力が増し、理性を失うと聞きました。私も見た事はありませんので何とも言えませんが。」

・・・それはモンスターではなくただのイカれた狂人なのでは・・・  
刺青が現れる以外はこちらの世界でもいる可能性はあるね。多分理性を失つて人間の力を100%引き出したのだろう。

人間は30%程度の力で日々生きていると聞いたからね。

一般人の全力でも50%といったところかな?

アスリートでも70%も出せないものだらう。

「ああ・・・後、」

「なんでしよう・・・?」

「人外と言つたら言い方が悪いのですが、モンスターとほぼ大差がない理性を保つた人間もいると聞きました。

なにせ300年以上生きて、人の世を自由に駆け回つていると聞きました。」

「何を言つてているのですか? 150年以上人が生き続ける事が出来るのですか?」

「ありえないだらう? 確か人間の脳や身体はどんなに見た目が若くとも150年までしか持たないと聞いた。DNA上不可能という事だね。」

「ええ、私達は100歳まで生きられたら奇跡でしょう。」

「ですが・・・何事も例外がいるのです。」

「その人は時を操り、自分の姿を若いまま保ち続けていると聞きました。」

「まあ尊の類です。本当に存在するのかも分かりかねます。」

「はあ・・・日本に連れ帰ったのならば、億万長者になりそうな人だね。」

「現代科学で不老不死を解明出来るチャンスじゃないか。」

「まあ尊の類・・・いや、ここは異世界何があつても可笑しくないと人間の昔からの大願だね。」

「まあ尊の類・・・いや、ここは異世界何があつても可笑しくないとと思う。」

「いや、100%いると考えましょう。」

「話の流れ的に私が聞かなくとも出て来た答え。神様。いるのかは分かりませんがシナリオ通りと言つた所ですか?」

歩き方を習つ。

動き方を齧つ。

お辞儀の仕方。

「ふう・・・疲れたね。マールさん、一緒に来て練習に手伝つて欲しい所です。」

「主命がありましたら。」

喋り方。

笑顔の作り方。

「ミナミ様は万能ですね。元々そのよつた事を齧つていたのですか？」

「そう・・・ですね。先生が優秀だったのでしょうか。」

「そうですか？ありがとうございます。」

普段のお喋りが少し硬い所がある私としては、楽なほうではあった。

「笑顔が硬いのが難点ですね。」

「頑張ります。」

笑顔が硬いのは許して下さい。

「もう遅いですから、本日は休みましょうか。」

「そうですか・・・疲れましたね。汗もかきました。お風呂に入りたいですね。」

外は真っ暗だね。

また拭うだけなのだろうか・・・そろそろ髪が洗いたいな。

「でしたら、主様に許可を出して貰いましょう。3日に一度なのですが1日ぐらいは良いでしょう。」

お風呂があるのであるですか？浴槽は無いと思っていたのですが、これは嬉しい誤算ですね。

言つてみるものです。

「ふん、良いだろう。用意しておけ、俺も入りたいからな。先に入つていろマール。」

「畏まりました。」

・・・一緒に入るのですか・・・さすがですね。

制服を脱いでお風呂に入る。

大きいね、10人は一緒に入れそうだね…

「ミナミ様。髪と体を洗わせて頂きます。」

・・・一人で出来るのだがね・・・。

断つてもしてくるだろうね・・・。

まあ、髪は助かるかな・・・いつも一人だと大変だからね。

「綺麗な髪ですね。ミナミ様。」このよつな黒髪手入れが大変でした  
しきう。」

「そうですね。お風呂には毎日1時間程入つっていましたね。」

「・・・いちじかん?どれくらいですか?」

・・・時間の概念がないのかな。

「1日は何刻ですか?」

質問に質問で答えてしました。

「1日は24刻です。」

ああ、これは楽だね。

「1刻の事ですね。」

「そうでしたか、それは大変ですね。」

「苦労はなかつたけどもね。楽しかつたよ。」

野口君は・・・この髪が好きだったからね。

1回髪が野口君に当たった時、何しやがると言ひながらも顔は赤かつたからね。

良い匂いがしただろ？。フフフ。

「ミナミ様、そのお顔ですよ。」

何をいつているのかな？

「そのお顔が出来るのでしたら、勇者様とはいえ男です。簡単に落ちるでしょう。」

「どんな顔をしていましたか？」

「とても優しく、誰かの事を思つ笑顔でしたよ。思ひ人がいるのですか？」

「いませんよ。こむとしたら勇者やんの事を考えていたからですかね。」

「それはそれは相思相愛となるとよろしいですね。」

そうだね。

どうなるかは分からぬけどもね。

べた

音がした。

「ミナミが洗つてもうつていたか。マール俺も後で頼む。」

何をしているのでしょうか？この馬鹿は。

「何をしているのですか？お義父様？」

タオルらしき布で身体を隠して聞く。

「何を言つているのだ？風呂に入りにきたのだが？こひは俺の風呂だからな。」

・・・そうですよね。

そんなの気にしなそうですね。

「死んでください。」

お腹を殴つた。

「マークさん……髪は私自身で洗いますので、お義父様を洗つてあげてください。」

「恐れました……」「

悶絶してますね。

そこまで痛かったのでしょうか……。

湯船に浸かり、身体を休ませる。

「ミナミ。こんな事で恥ずかしがつてこいは……」

「近づかないで下さい。」

イケメンでも許されないことはあるのですよ~。

「まあ良い……。明日の朝出る。今日ばかりはと身体を休めるのだぞ。」

「あ……まあいい。

なんでも良いのだから。

ここはいつこの世界。

貴族とはいつこのもの。

気にするだけ無駄でしょう。

野口君。

・・・お姫様と一緒にお風呂なが入つていらないだろ?ね。  
・・・無理かな。

フフフ。

そんな事を考え……。

私は湯船に身体を預けていました……。

## 第7話・お風呂回。 (後書き)

第7話読んで頂ありがとうございました。

## 第8話・魔法、思い出と共に

「……て下せ。起きて下せミナミ様。」

眠いです。

「起きて下さい。」

まだ暗いじゃないですか。

「起きる。」

・・・

「起きないと・・・脱がしますよ?」

田が覚めました。

「そういうのは良くないと思こます。」

「おはようございます。ミナミ様。主様が下で待っています。お早めに。」

ワンピース・・・ですか。色は薄い青と・・・。

制服以外のスカートなどあまり着ないのですけれどもね。肩が出ていて少し肌寒いですね。

出来れば羽織る物が・・・

「ミナミ様、こちらを。」

ストールですね、暖かいです。

「ミナミ起きたか。田は覚めたか?」

「大丈夫です。まだ暗いのですが。」

「早めに行動しなければ間に合わないからな。ここから王都まで5日、あちらに着いてからは1日しかない。用意もしなければならないからな。早く着くに越した事はない。」

「そうですか。」

それもそうですね。お義父様も準備があるでしょうしね。

馬車というのは初めて見ましたね。

北海道に行けばまだあるのでしょうか・・・?

・・・ありそうですが無さそうですね。

イメージはぴったりなのですが。

「ミナミ、手を出せ。」

なんでしょう?

「はい。」

引っ張り上げられました。

すごい力ですね。

「ミナミ様。主名があつたため、王都まで馬車の御者を務めさせて頂きます。」

マールさんも一緒だね。

「エルさんは行かないのですか?」

「エルは離れられん。俺が居ない間は家の事は全てあいつが取り仕切るのだからな。」

そうですか。

ガタ  
ガタ

馬車が揺れる。

森の中を馬車が走っています。

・・・ん。中々風情のある体験ですが。  
暇ですね。

お義父様は本を読んでいます。  
私も欲しいですね。

「読みたいのか?」

「どんな本を読んでいるのですか？」

目も合わさないで良く私の考える事が分かりますね。

「王とは。という本だな。」

「王様が書いた本なのですか？」

「違うな。王の側近が書いた本だな。王に必要なもの、今の王はこれが素晴らしいという本だな。」

「それは・・・面白ですが遠慮しておきます。」

それよりも聞きたい事がありました。

「お義父様。手から火の球を出す事は可能なのですか？」

「不可能だな。」

・・・不可能を可能にしたのですか私は。

「ですが私が捕まつた村で、火の球を出して大きなモンスターを倒した人がいました。」

「それは、火の球ではなく矢だろう。この力は誰にでも使える。だが媒体が必要だ。」

媒体? 何か必要なものがあるのでしょうか。

「ふん。見せてやろう。マール馬車を止めろ。俺の剣を寄こせ。」

どういう事でしょうね。

ズ、ズズズ・・・

・・・木が大きくなりました。

「これが俺の力だ。土の力だな。」

剣で木を斬り付けました。

傷一つ有りませんでした。

そしたら木が大きくなりました。

これは不思議ですね・・・。

魔法というのは便利ですね・・・。

「このように。俺はこの剣が媒体だ。  
何か媒体を用意し、想像する。  
それを行ひ。

それにより結果が伴ひ。

手から火が出るという事はあり得ないのだ。武器となるものが必要なだからな。」

「その媒体というのは、どうしたら手に入れられるのですか?」「ずっと使い続けているものだ。それも思いを込めてな。人というものは、消費する生き物だ。一つのものを使い続けることは不可能に近い。

服などはずつと使つものもあるだらう。だが、思いを込めて使い続けるか?」

・・・そうですね。ほとんどの人は使い続ける事が出来ないでしょ

う。「俺のこの剣は剣を初めて握った時のものだ。この剣でモンスターを斬る事はない。

例え、折れてしまつたとしても使えるだらうがな。」

「とても大事なものなのですね。」

「ああ。父からもらつた。初めての俺の物だ。」

通りで短いわけですね。お義父様の身長には合わないものだと思いました。

・・・では何故、私は火を手から出せるのでしょうか。

・・・これでしじうか。

耳をさわる。

装飾品というのは珍しいのでしょうか。

ああ・・・これは野口君から貰つたものだからでしょうか。フフフ。

そういうば、中學生の時からずつと着けていますしね。

? · · · · · · · · · · · · ?

中学にあがつたある日だった。

「南！南！チョコレareよチョコー！」

野口君？突然だね。

「野口君、何を言つてゐるのかな？チョコレートは私の栄養素なんだよ？君は私から栄養素を奪つてしまふのかい？君はなんて残酷なんだい・・・。」のチョコレートは私のもの。君にあげるチョコレートなんて無いよ。」

「そんなの初めて聞いたわ！・・・ん？お前「一ヒーとか好きなのになんで甘い物が好きなんだよ。」

「それにはまったく関連性がないね。苦い物が美味しいからこそ甘い物が倍美味しくなるのじやないか。何故、私からチョコレートを奪おうとしたんだい？」

「ああ・・・俺の学校の奴がな。明日はバレンタイン。だから誰が何個貰えるか勝負だと言つてきてな・・・」

「で、まんまと勝負と言われた野口君は挑発に乗つてしまつたと。」

「う・・・良いじゃねーか！南くれよー！1個ぐれー良いだろ？」

「『愁傷様。チョコレートを1個も貰えなかつた野口君。』

「つるせーー！まだバレンタインは始まつてもいねえ！」

「つるせー。」

「・・・はあ・・・まあ しようがねーかー明日になれば誰かから貰えるかもしれないしな。」

「そうだよ野口君。明日になつたら下駄箱や机の中にでも入つてるかもしれないよ？」

「そんな漫画みたいな事ありえねーよー。」

「そうなのかい？」

「南！南！」

声が大きいよ野口君・・・。

「どうしたんだい？」

「これ見てくれよこれ！チヨコだぜ！下駄箱に入つてたんだ！いやー昨日はあんな事いつたんだが、漫画見たいな事つて本当にあるんだな！」

「良かつたじやないか。野口君はもてもてなんだね。」

「いやー良かつた良かつた。あいつら1個も貰えてなかつたからなー今日は俺の圧勝だつたな！」

1個は勝ちに入るのかな・・・?0と1なら勝ち・・・なのかな。  
低レベルな争いだね・・・。

「誰かは知らないけど嬉しいなー結構入つてるみたいだから南一つ  
食べるか？」

「いや、遠慮しておくよ。」

「遠慮しなくていいんだぞ？お前の栄養なんだろ？」

「それは野口君の事を思つて誰かが作つてくれたものだから野口君が食べるべきだよ。」

「そうか。 そうかもしれないなーじゃあ早速1個。」

・・・鞄から水を取り出す。

「かれえ！超かれえ！なんだ・・・ゲホッ・・・ウルトラかれえ！」

「はい。野口君。」

「さんきゅ・・・なんでこんなに辛いチヨコが・・・」

「それはタバスコチヨコだね。野口君は甘いものが苦手だったりう

?

「・・・ん？南！てめえ！何しゃがるー死ぬかと思つたわ！」

「頑張つたのだよ・・・?」

「う・・・はあ・・・初めて貰つたチヨコがこれかよーー！」

「そうかい。では、2番目も私だね。」

「・・・ん？何が2番目だつて？」

「南！ よおー！」

声が大きいよ野口君。

「どうしたんだい？ 野口君？」

「いやー今日はホワイトデーだろ？ これか、南の為に買つて来たんだよ！」

小さな箱が渡される。

「そういうえば今日はホワイトデーだったね。忘れていたよ。ありがとう野口君。」

「選ぶの苦労したんだぜ！ マネージャーに入れ物とか売つてるお店聞いてなーすげーファンシーなお店で入るの苦労したんだぜ。」

「そこまでしてくれたのかい？ 嬉しいね・・・。本当にありがとうございます。野口君。」

「あ、おう。飴程度でそんなに喜んで貰えるとは思わなかつたわ。」

「じゃ、こりは気持ちだよ？ 野口君。・・・なんで目が泳いだのかな？」

「いや、早く渡したくて走つてきたからなー息があががつちまつてー。」

「そつなのかい？ それは悪い事をしたね。では1個もりづね。」

丁寧に包装を解いて1個口に運ぶ。

「ケホツ・・・ケホツ・・・野口君・・・？」

「へつへーー！ 引っ掛けた！ バレンタインの仕返しだよー。」

「そつなのかい？ では来年のバレンタインを楽しみにしているんだね。精々今後1年間は夜、一人で外を歩く時は背中に気をつけると良い。」

振り返り歩く。少し嬉しかつたのだがね。

「怖つ！ なんだその台詞！ おい南！ 待て、待てつてばー！」

「まだ、何かようかい？」

「じつち見ろよ。」

「なんだい？」

振り向いた。

頭の上に何か乗っけられた。

「これは？なんだい？」

大きくなつたね。野口君。上を見れないと顔が見れないね。

「まあ！またな！」

走つて行つてしまつた・・・足が速くなつたね・・・。

昔は私に負けていたといふのに・・・もう勝てる事はなさそうだね。

? · · · · · · · · · ?

チリン

昔は両方あつたイヤリング。

今は片方しかない。

けれども大事な、大事なもの。

「何を笑つていたのだ？」

「少々、昔の事を。」

「ふん。いつもその顔をしておけ。

そうすれば勇者に限らず、世界中の男を虜に出来るべ。」

「無理・・・ですね。」

お義父様、「これは野口君と一緒に無いと出来ませんよ。

## 第8話・魔法。思ひ出せば2。 (後編)

第8話を読んで頂きありがとうございます。

## 第9話・そして王都へ。

1日が過ぎた。

森を抜けた。

モンスターには会わなかつたね。  
けれどもお義父様は強いのでしょうか。

あれだけの事をしてしまつのですから。

「マールさん。お疲れ様です。変わつてあげれば良いのですが。

「いえいえ。お気遣いならせりやす。」

広大な平地だね。

道がなければどこへ向かつていいのかも分からぬ。

日本では見れない光景かもしだれないね。

日本は山があるから地平線まで平地といつのは見れるものじゃない。

「広大な平地だね。」

「ミナミ様の住んでいた所は違つのですか？」

「街だつたね。大きな建物がそこかしこに建つていて。」

「ミナミ様の住んでいた街はとても栄えていたのですね。」

「そうだね。これだけ大きな土地といつのは残つていなかつたと思うよ。」

「土地が無い程建物があつたのですか？」

「そうだね。見渡す限りの建物ばかり、農作物を建築物の中で作り

出した時は正氣の沙汰なのかと疑つたよ。」

「それは、それはその国はいづれ近い時、滅ぶでしょうね。」

「何故そう思うのだい？」

「あるがまま、ありのまま。それが出来なくなつた国から滅ぶものですよ。」

「やうなの・・・かもね。」

「どうやって育ててているのは想像出来ませんが、その国は余程切迫

した状況なのでしょうね。」

「切迫はしていなかつたとは思う。

けれども・・・時代の変換期だったのだろうね。

「まあ、この国も切羽詰まつた状況なのだろう? 勇者を召還してまでモンスターから守つてもらつなどしている国に未来はあると思えないのだが?」

「どうなのでしょう。ですが、モンスターに関しては勇者など必要ありません。王都やその周辺の街々はモンスターなど脅威では無いですね。」

「・・・モンスターは脅威ではない? では・・・何故勇者を?」

「なんで勇者を呼ぶのですか?」

「知らないのですか? まあ前回起こつたのは100年前と言われていますからね。もう誰も生きていた人はいません。」

何があつたのだろう?

「100年前、隣国のエルニアール帝国は一度滅んでおります。」

滅ぶ? 人災や災害で?

「それは何故?」

「ええ、災厄と言われる自然災害みたいなものと聞いております。」

「災厄?」

なんだらう? それは。

「その時に我が国では全ての騎士が集まり、エルニアール帝国を救援に向かいました。

ですがその騎士達で帰つてきたものは十数人。それも途中で危険と判断し、隊長の方々が逃がした者達のみと。」

「・・・それは大災害だね・・・。」

全滅と言つわけだね・・・。

「その時に地底から一人の黒髪の青年が現れたそうです。」

「それが・・・勇者と言つわけですか。」

「それはそれはその黒髪の青年はなんて事をしてくれたんだろうね。」

「その青年はその災厄に一人で立ち向かい、そして、災厄が消えた

瞬間にその青年は剣を杖にそのまま死んでいたそうです。

「美談だね。」

御伽噺のようだ。・・・勇者は死んでなお、その災厄からこの地を守つた？

おかしくないだらうか・・・野口君と同じように呼ばれたのだったら私だつたら絶対に拒否するね。

何かの理由があつたのだろうか？

・・・野口君がその勇者足りえると・・・野口君に死ぬと言つのか。この世界は。

いや・・・100年前と言つていたではないか。時代が違う。死なないでなんとかなるのかもしないね。けれども、勇者足り得る何かが必要と。

・・・伝説の剣やら伝説の鎧でもあるのかな？

・・・まあ災厄・・・か悪の大魔王みたいなものだらう。これを倒せば元の世界へ・・・

来た・・・

こちひりの世界に来てから眩暈の頻度があがりすぎだね・・・

・・・・・・・・・・・・

「ミナミー・サエウー」

「どうしてだい？野口君は・・・本当に・・・私の事が・・・」

・・・・・・・・・・・・

・・・なんだろう今のは・・・

・・・最初に見た夢と関係があるのだろうか・・・?

いやまつたく違う風景なのだろうか？

・・・分からぬ・・・

繫がりが無いように思つ。

けれども実際に・・・いや・・・一度思考を止めよう。

これは迷路に嵌るパターンだ。

一度落ち着いて・・・

「ふう・・・」

「ミナミ様！ミナミ様！どうしたのです？顔が真っ青です！」「呼ばれていたようだね。

「大丈夫です。マールさん少し休めば治ります。」

「そうして下さい。主様！」

「どうした？ミナミどうした、その顔は。」

「大丈夫です。お義父様。横にならせてもらいます。」

「ならいい。少し横になつていろ。マール！少しの間馬車を止めておけ。俺は狩りにでる。」

「畏まりました。主様。」

2～3時間は寝ただろうか。携帯を見る。

・・・電池がなくなつていたね。そういうえば最初の日以来一度も携帯をいじつていなかつたね。

元々あまりいじらないほうだつたからね・・・。

「ミナミ様？起きましたか。顔色は・・・大丈夫そうですね。」

「心配おかげしました。」

「こちらを。ウサギ肉と山菜が入つたスープです。」

・・・お義父様が取つてくれたのでしょうか。

「ありがとうございます。マールさん、お義父様。」

「いえいえ、私は料理をしただけです。御礼ならば主様のほうへ。」

・・・寝ていますね・・・。

「お休みのようですが・・・？」

「久々の狩りで疲れたようです。最近は狩りなどしませんでしたか

「うね。」

「……フフフ。

お義父様、ツンデレでしたか。

「……獣臭いスープです。インスタントのスープのほうが美味しい。けど暖かいスープだね……それだけで十分美味しい。」

「ふふ。獣の匂いがするでしょう? 野生の動物の肉というのは熟成させなければ本当の味にはなりません。」

「すごく美味しいです。本当に。」

「そう言つて頂けると助かります。」

「ミナミ、体調管理はきちんとしろ。お前は勇者に会うのだらう? 俺はその品物を運ぶだけだ、その後はお前の役目だ。そんな顔をしていては勇者にも振り向いてもらえないだらう。」

「！」忠告ありがとう! やります。お義父様、起きていたのですね。

「ふん、俺は寝る。後一日もすればイクエルに到着する。ゆっくり休みたければそこまで我慢しろ。」

お義父様や、エルさん、マールさんやアルフさん……なんだかんだ言つて助けられてばかりだね。

一人では今頃食事にもありつけていなかつたのだらうね……。何かしてもらつたならば返さなければね……。

野口君。君も助けてくれる人が近くにいるんだろうね。

異世界に飛ばされて一人で大変だとは思う。けど、助けてくれる人もいるのだからきちんと恩は返すのだよ。

「……ふふ。」

思わず笑つてしまつた。

高校に入つてからは私が心配する事などほとんど無く、私が心配されてばかりだったのだがね。小学生の時に戻つたようだね。

・・・これまこれまで・・・悪くは無いわ。

第9話・そして王都へ。（後書き）

第9話読んで頂きありがとうございました。

## 第10話・砂糖菓子のよつて甘い時間の終わり。

・・・街が見えてきました。

確か・・・イクエルと言いましたか？

「ミナミ様、イクエルに到着しますよ。本日は宿に泊まれそうですね。」

「嬉しいですね。さすがに馬車の中といつのは身体が痛くなります。とこりでお義父様？」

「なんだ？」

「この街には何があるのでしょうか？」

「何も無い。ただの拠点だな。王都へ行くまでの拠点と行った所だな。」

「・・・なんてつまらないのだろう。」

「ここは異世界らしく、冒険者ギルドとか。

迷宮とかモンスターの巣窟が近くにあるとか無いのでしょうか？」

「言つておぐが王都の近くにそんなものがあるほうが不自然だろう？」

「なぜ、私の心の声が分かるのですか？」

「顔を見れば分かる。」

「そんなに分かりやすかつたですか？」

「あからさまにつまらなそうな顔をしたからな。」

「わざとですよ。」

「そうか。」

「この国は結構平和なのではないだろうか。」

「広大な森、そして土地。」

「の大きなモンスターさえなんとか出来れば・・・。いや駄目です。」

「戻れない事など考へては。」

野口君と一緒に戻ると決めたではないですか。

何がなんでも帰つてあの甘味所にいかなくては……

・・・チョコレートも食べたいです。

「コーヒーも飲みたいです。

この世界は色々と足りないものが多いのですから。

・・・甘いものが食べたいですね。

糖分が不足している気がします。

「お義父様、甘いものが食べたいです。何か甘いものを希望します。」

「何を突然。イグルでも食べたいのか?」

・・・イグル?なんでしょうねそれは。

「イグルとは何ですか?」

「砂糖菓子だな。子供が食べるものだな。」

砂糖はあるのですね。

楽しみが一つ出来ましたね。

街へ馬車に入る。

入り口でマールさんが門の人と少し話をしていましたね。

何かあるのでしょうか?

ガタ

石畳の通路を進んで行く。

石で出来た街並み、これはこれはすごいですね。

日本とは違うのが分かります。

煙突らしきものがそこかしこに立っています。

暖炉があるのでしょうか?少し楽しみですね。

スノーボードに行った時に泊まったホテルには暖炉がありましたが、

あれは良いものです。  
眠くなります。

「おい主人」

馬車の中から露天の人に話かけていますね・・・。

失礼ではないのでしょうか？

「ど、どうか致しましたか！？何が失礼でもありましたか！？」

「違う。イグルを一つ売つてくれ。」

「へ、へい！今すぐ用意致します！少々お待ちを！」

・・・露天の人気がすごい焦つているのが分かりますね・・・。

これは、私が欲しいなどと言つたせいなのでしょうか・・・。

不可抗力だと思いたいですね・・・。

「お待たせしました！お三方でしたよね、2つはあつしの気持ちで  
す！貰つてください！」

・・・何故そこまで媚び詭うのじょうつか・・・。

「ふん・・・有り難く貰つておひづ。マール、謝礼を渡しておけ。」

「・・・ありがとうございます！こんなによろしいので？」

「構いません。これは主様の家証かじょうです。次からはここで商売をする  
時はこの家証をつけて商売をして下さい。」

「・・・へい。大事にいたしやす。」

・・・なんでしょう・・・この違和感。

貴族の家紋らしきものを渡して、それをつけて商売をする。

その看板を背負う。という事はブランドが付くという事ですね。

ブランドがあれば品質に問題ないという事になる。お客様も沢山  
入るでしょう。

・・・その代わりがありそうですね。

売り上げの数%はシュタイン家に入るという事でしょうかね・・・。

まさか私の我慢からこんな事になるとほ・・・。

貴族というのは買い物も大変なのですね。

「お義父様は、もしかして偉いのですか?」

「気にするな。それよりも食え。お前が欲しいと言つたのだらう?」

「そうですか。では一口。」

小さなフォークで刺す。透明な固形物のキューブですか。柔らかいですね。

キャラメルみたいです。

「すゞい甘いですね・・・。」

「そうだろう?だから言つただろう。子供の食べ物だと。」

水あめを固めたキャラメルと言つた所でしょうか。

「美味しいですよ。」

けど食べたいものとは・・・少し違うね・・・。

「宿へ迎えマール。いつもの所だ。」

「畏りました。」

・・・砂糖はある。牛乳らしきものは料理に入つていた。パンはある。バターは確か牛乳を振れば作れる筈でしたね。クッキーが作れそうですね。

ふふふ。

都へ行つたら作るのも良いですね。

野口君も食べたがりそうです。

作つて持つしていくのも喜んでもらえるかもしません。

広大な土地があるこの世界は高さよりも横幅という事でしょう。

「失礼します。」

「これはこれは! シュタイン様! 本日は当宿をご利用ですか?」

・・・大きい宿です。横に・・・。

日本の建物は上に上に大きくなりますからね。

「ああ、いつもの部屋を用意してくれ。」

「恐まりました。おい！あの部屋の客を違う部屋へ移動だ！すぐご用意いたします。」

「分かった。待たせてもらうな。」

ロビーらしき所の椅子に座る。

柔らかいですね。

「・・・ふう・・・じゃないですよ。人をどかしてまでその部屋なのですか？」

「ミナミ様。主様が泊まる部屋はそこ以外に無いのです。誰が泊まつていようとも関係ありません。そこのお客様も主様が来たと分かれば快くあけてくださいます。」

どういう事でしうね・・・。

・・・貴族専用部屋。という事でしうか。

「おい！お前か！私を部屋から追い出すなどと、・・・」

金髪です。歳は50前後と言った所でしょうか・・・。

貴族の方でしょうか？

「・・・失礼致しました。シュタイン様でしたか。すぐに部屋のほうは空けさせて頂きます。おいお前らー部屋の物の移動を手伝つてこい！」

・・・お義父様。

想像がつきました。

何故、私を勇者に近づけようとするのかも。

・・・大きな部屋です。30人は泊まれるのではないでしょか・・・

インテリアは暖色系で落ち着いていますね。  
ベットは柔らかいですし。

食事も期待出来そうです。

「お義父様。少しお話が。」

「なんだ?」

「お義父様はすごい偉い方なのですね。それも、この国で並ぶ人が  
ほぼ居ない程の。」

「そうだ。」

「勇者に私を近づける理由はそれが一番の理由ですね?」

「そうだ。」

「お義父様は、次の王候補と。そしてそれにはノーラ姫と勇者が結  
婚というのが邪魔と。

「お義父様は、ノーラ姫が勇者と結婚する。という事は勇者が次の王になる。その  
可能性が高い。・・・高い所ではないのでしょうか? 確実と。」

「そうだな。」

「私を勇者に近づけて、ノーラ姫と勇者の仲を今の最高の状態から  
少しでも落として欲しい訳ですね。結婚してくれば最高。最悪勇者  
の気を引いて結婚を王が死ぬまで伸ばしてくれれば良いと。」

「ふん。そこまでは考えてはいらないがな。」

「どうでしょうね。」

「お姫様はどうなるのですか?」

「飾りになるだけだ。俺の養子としてな。」

「王様は何歳ぐらいなので?」

「70を超えてる。」

「そうですか。」

「そういう理由でしたか。」

「”トーラビアさん”。良いですよ。その策に乗りましょう。」

・・・私も野口君を取り返せれば、それで良い。

「そうか。」

「子供っぽいかもしませんね。」

「そうですね。」

優しいだけでは貴族なんて出来ません。」

・・・少し嬉しかったのですけどね。  
お父さんと呼ぶのは久しぶりでしたしね。

・・・早く野口君に会いたいな。  
早く帰れ。この世界は私にとって毒でしか無い。

第10話・砂糖菓子のよひに時間の終わり。（後書き）

第10話読んでいただき有難うございました。

## 第1-1話・思い出と共に♪&歌詞・お父さん&お母さん；

あれから一晩もトライアさんと話をしていない。  
今まで普通に話が出来ていたのだけどもね。

「ミナミ様、朝食が済み次第出発致します。」  
マールさんが呼んでいるね。

「はい。」

不思議な気分だね。

朝だから頭が働いていないのかな。

力タン  
カタン

馬車の車輪の音が鳴る。  
朝食の味を覚えていないね。  
残念だね。  
せつかくの「」飯は美味しい食べたい所だよ。

目の前がゆっくり動いてゆく。そのような気がしたのだろ？  
馬車が倒れてゆく。

何故？

頭が働いていない。

大変だ。

それだけしか分からない。  
どう動けばいいのか分からない。

・・・誰かに抱きしめられた気がする。

「あ・・・

？・・・・・・・・・・・・・・?

中学生3年生になった。

”なんでだらうね・・・色々あつて疲れていたのだらうか。  
思い出したくないもの程、嫌な時に思い出す。  
それは人にとってとても残酷な事なのにね。”

お父さんが倒れた。

当然でしょ。お母さんが居なくなつてずっと働き続けていたのですから。

家の事はしています。ですが毎日帰つて来てるにも関わらず2・3日顔を合わせない事もあるのですから。

”この辺りからですね・・・私が遅くまで起きているようになったのは・・・”

「過労ですね。検査入院の為2・3日病院に居て下さい。」

「そうでしたか。良かつたです。大丈夫なのですか？」

「ええ。まだ断定は出来ませんが検査の為の入院ですね。」

「お父さんは仕事しそぎです。休憩だと思って休んで下さい。」

「ああ、悪かつたな南。お前共ずっと一緒にいてやれなかつたしな。」

「ええ。寂しかつたですよ。入院期間は毎日来ます。ゆつくりお話ししよう。」

1週間経つてもお父さんは退院できませんでした。

「なんですか？2・3日ではなかつたのですか？」  
「え、ええ。その検査でお父さんは・・・」

「南、お父さんに何があつたら、親戚の叔父さんを頼りなさい。  
「何かなど無いのでしよう。私達は一人の家族なのですから。」「  
「そり・・・、だな。」

「お父さんは、後3ヶ月も生きていられないでしよう。」「  
・・・呆然とはこの事でしよう。  
何も言葉が出てきません。  
何を言つているのでしょうか。  
「心の準備はしておいて下さい。」

「南・・・すまないな。お前には苦労ばかりかけた気がする。」「  
「苦労なんて無いですよ。家事も上手になりました。」「  
「そうか。」「  
「今度暖かいご飯作つてあげますね。家に帰つたら食べましょう。」「  
「そうだな。楽しみだ。」「  
「ええ、楽しみにしておいて下さい。」

雨の降る日でした。  
そういうえば・・・お母さんの時も、雨の降る日でした。  
今朝、お父さんは死んでしまいました。  
何故なのでしょうね。  
病院を抜け出して来てしました。

ポツ

雨が・・・、髪が濡れて気持ち悪いです。

・・・こんな所まで来てしました。

昔、野口君と遊んだ広場ですね。

・・・ふふ・・・小さい時は楽しかったです。

野口君となんでも勝負をして、

お母さんとお父さんにその事を話して、

二人は笑顔でしたね。

私は笑顔になれる・・・のでしょうか？

「・・・何故なのでですか？神様？」

「私が何かしましたか・・・？」

「Iの未来を見る力。

何の役にも立たない未来を見る力。」

「小さい時から私に関わることなら教えてくれていたでしょう。」

「引いたら一等が当たることが分かつた。明日、雨が降ることが分かつた。」

「なんで・・・なんで！そんな小さな事しか教えてくれないのですか！」

「お母さんも！お父さんも！早く分かっていれば助けてあげられたかもしだせん！」

「なんでですか！」

「お母さんほ、一緒に車に乗つていれば教えてくれたのですか！」

「お父さんほ、もつと一緒に居る時間があれば教えてくれたのですか！」

「何故……なんですか……。」

ひしゃん……。

足音がした。

「南……？」

「……野口君？なんでここに？」

「……え？未来が見える……？な、なんだそれ？意味が分から  
ないぞ……？え？え？え？」

「……南……お前小さい時から準備万端だったのつて……え？  
俺との勝負とかも？テストとかも……？」

「違う！野口君！信じてくれ！そんなに役立つものなんかじや……」

「うるさい！なんだよそれ！信じられるかよ！」

「野口君！」

「……野口君……足が速くなつたね……。」

「……一人になつてしまつた。

「……どうして……こんな事になるのだろうね……。」

神様が本当に居るのだとしたら……大笑いでもしているのでしょ  
う。

私のこの様を見て・・・。

夏になつた。

「南ちゃん、本当にいいのかい? うちに来ていいんだよ?」

「ええ、有難う御座います。ですが・・・中学校を卒業するまでで良いのです。この家に居させて下さい。」

「・・・本当は駄目なんだらうけどね・・・毎日うちで電話してくる事。1週間に1度は顔を見に来るよ。もし駄目そつだつたら。」

「はい。駄目そつだつたら叔父さんの家にやっかいになります。」

・ 未練でしょうか。

何の?

お父ちゃんとお母さんの。

・ そして野口君の・・・。

今まで以上に勉強をした。

料理も上手になつた。

スポーツも前より出来るよになつた。

・ なんだからね。  
満足出来ないよ・・・。

イヤリングにふれる。

チリンと音が鳴る。

ふれる。鳴る。

冬になった。

受験が終わった。

無事に合格したようだ。

誰も周りに居ないね。

それはそうだろう。

合格発表から1日経っている。  
人もまばらでしょ。

春になった。

「・・・実感が湧かないね。」

中学を卒業した。

卒業式の日、

皆が泣いている。

私は一人で校舎を歩く。

3年間のお礼を言いに先生の所へ行く。  
一人で校舎を出た。

家へ戻る。

「残念だね・・・」

せつかく近くの高校に受かったといつのに。

ほん。

肩を叩かれた。

振り向く。

頬を叩かれた。

「痛いじゃないか。何をするんだい？」

野口君？

今更どうしたんだい？

「南。殴れ。」

「何をするんだい？と聞いたのだけども？」

「南、俺の事を殴れ。」

「何を言っているのかな？ついにM属性にでも・・・」

「巫山戯るのは無しだ。」

「そつかい。」

では、遠慮無しに。

バキッ

良い音だね。

「いつてえ！南！お前本気で殴りやがったなー眩暈がすげーんだが  
すげーふらふらすんぞ！」

「女の子の頬を叩いてそれだけで済んだのだから喜んだほうが良い  
よ。」

「・・・南。悪かった。おじさんが亡くなつて泣きたいのはお前の  
ほうだつたのに・・・俺も動転してた。」

「もう1発殴ろうかい？人の心情を勝手に決め付けないで欲しいね。」

「悪い・・・なんて言えば良いか良く分からなくて。」「

「・・・良いよ。野口君、君は仲直りに来たのかい？」

「そうだ。南、お前は俺の一番のライバルで・・・幼馴染だからな。」

「そうかい。でも残念だね。」「

「何がだ？」

「私は春休みが終わつたら、遠くに行く。」

「なんでだよ！ああ・・・そうか・・・親戚の所にか。」

「良く分かつてるじゃないか。さすが幼馴染だね。」「

「行くな！」

「野口君に引き止める権利があると思つのかい？それに今更だろう？」

「行くなつて言つてるだろ！」「

「・・・抱きしめる権利もあるのか・・・と言いたいね・・・も  
う高校生だよ・・・？私達は。」「

「行かないで・・・くれ。」「

・・・泣く程かい。

「一生の願いだ。」「

「・・・君は一生のお願い事をそんな事で使って良いのかい？  
もう2度と願い事が叶わないかもしれないよ。」「

「構わない。」「

・・・早いね。」「

「ああ、構わない。」「

「ふう・・・」「

電話を取り出す。

かける先は叔父さんの所だ。

「・・・そうかい。娘も楽しみにしていたのだがね。お姉ちゃんが出来るつて。

まあ、南ちゃんが残りたいんじやしじうがないね。

今までと同じで1週間に1度は顔を見に行くよ。

暇があったら電話しておいで。

後、その野口君も連れて一緒に1度ご飯でも食べに来るよ。

「ええ。いつか一緒に連れていきます。」

「・・・あれは南もわりーだろー！未来とか言つてるしなーあんな状態だから嘘なんか言つてるよーにみえねーしょーー！」

「つるさい。・・・嘘ではないけどね。」

「あなんでも良いわ。南は南それだけだろ。その未来が見えるつーのはテストとかには使えなかつたんだろ？」

「そうだね。そんな便利なものなら学校になんていかないね。」

「そうちもしれないな。・・・けど自分の身の回り限定ねえ・・・

微妙だな。」

「微妙だね。何も役立たない能力だよ。」

「天気予報を見ればいいじゃないか・・・。」

「まあ便利だと思つけどな！明日雨が降るつて分かれば濡れる心配

がなくなる！」

「天気予報を見ればいいじゃないか・・・。」

「・・・それがあつたな！」

「ひむか。」

「桜が綺麗だね。」

「

「ああ、3月だからな、今年は早かつたみたいだな。」

「桜は良いね・・・。甘そうで美味しいそうだ。」

「チョコにでも見えたか？」

「それは無いね。」

「そういえば南、どこの高校にいくんだ？」

「ここから一番近くの高校だよ。」

「・・・南・・・?お前遠くへ行くって言つてなかつたか?」

「そうだね。そう言ったね。」「

詰欺だ云ふだ!! 僕の涙有

「……このへんの野郎！」

い？  
ふふふ。

「なめねーよ！」

「おや？ 野口君？ 制服のボタンがないよ？」

え？あー第2ボタンはマネージャーに取られた。」

「そうなのかい。人気者だね。」

「なんで第2ボタンなんて欲しがるんだろうな？」

「理由は知らないね。」

「南欲しかつたか？」

「いらないかな。第2ボタンなんでもらつてもしょうがない。」

「そうだよなー！第2ボタンなんでもらつてもしちゃうがないよだ

「そうだね。だから私は第1ボタンを貰おう。」

「なんでだよーー！」

「野口君の一番のライバルであり。

## 野口君の一番の幼馴染。

そして・・・野口君を一番に思つてゐる。

「それだけで十分だろう？」

2番目なんてごめんだね。

私は1番目にしか興味は無いよ。」

ブチツ

「あーあー・・・本氣で取るなよ・・・制服が千切れるかとおもつただろーが・・・」

「・・・そういうえば野口君はどこの高校に行くのだい?」「話変えやがったな・・・まあいいか・・・」

「で、どこへ行くのだい?」

「初めてだな。」

「何がだい?」

「よろしくな。同級生。」

「・・・そつかい。よろしく。同級生。」

私は物心ついて初めて泣いた。

? · · · · · · · · ?

「ミナミ様! ミナミ様! 大丈夫ですか! ?」

「・・・マールさん・・・・・・・」こは?」

「馬車の中です。もう王都へ向かっています。」

「トライア・・・さんは?」

「主様は馬車を動かして頂いております。」

「何で・・・ですか?」

「私では王都へ早く着く事が出来ません。主様自ら動かしたほうが早いですからね。」

「・・・はあ・・・・。」

馬車が止まる。

「ミナミ。起きたか?」

「はい。大丈夫です。」

「何者かに馬車ごと倒された。」

「で、私は氣絶をしたと……。」

「そうだ。」

「で、抱きしめて助けてくれたと。」

「そう……だな。娘を守るのは親として当然の事だらう。」

「そう……ですか。私を娘と言つてくれるのですか。」

「当然だらう。ミナミ・シユタイン。」

「……ふふ。有難う御座います。」お義父様。

「後2日もかかるん。今日は休んでいろ。」

「……はい。ありがとうございます。」お父様。

「ふん。」

顔を背けてしまいましたね。

・・・嫌な夢でした。

けども・・・もう良いでしょう。  
引きずるべきではないでしょ。

・・・お父さん。お母さん。

私は元気です。

第1-1話・思ひ出と#恋愛&恋愛・・お父さん&恋愛・・(後書き)

第1-1話読みでいただきありがとうございました。お父さん&恋愛・・(後書き)

## 第1-2話・実力で。

「ミナミ、起きたか?」

「毎朝確認されていいる気がしますね・・・。」

「当然だろう。お前は立つても寝ている時があるからな。」

・・・そんな器用な事をしていたのですか私は・・・。」

「まあ良い。先日件だが。」

「馬車が倒された件ですか?」

「ああ、一応聞いておけ。馬車の襲撃犯は物取りの類だった。」

「・・・本ですか?」

ありえないでしょ?

「建前上はな。確実に勇者派だろう。そんなものは氣にもとめないがな。」

「そうでしょうね。お父様はそういう人でしょう。」

貴族同士というのも一枚岩ではないのでしょうか。

お父様の味方はいるのでしょうかね。

・・・そういえば。

「お父様?」

「なんだ?」

「聞き忘れていました。私が勇者と近づくのは良いです。」

「そうだろうな。」

・・・忘れていましたね。何故でしょ?

「・・・お父様がノーラ姫と結婚すれば良いのでは?お父様はまだ若いでしょう。お姫様も20歳前後なのでしょう?それで万事解決になるのでは?」

「ふん。俺は婚姻などせん。子供も嫁もいらん。」

・・・政治とかそういう風な意味だったのですが・・・。

「政略結婚という意味だったのですが？」

「無いな。」

・・・何故でしょうか？

「足枷でしか無いのだからな。俺は王になりたいのだ。王というのは名ばかりの女王の側近になどなりたくは無いのだからな。それに加え、災厄というのを他人に頼りきりという今の状況が気に食わん。俺が王になつたら勇者の儀式など全てなくして見せよう。」

・・・ふふ。男らしいのですね。

「ミナミ。」

「何でしょうか？」

「王とは孤独なものだ。」

「そうでしょうね。」

「勇者も似たようなものだがな。」

国の一番上になるという事。英雄となる事。  
人の期待を一身に背負う。

その身の全てを捧げるという事だ。

王とは誇りと穢れの全てを背負い込む代名詞だ。

婚姻すれば、その連れにまで背負い込ませるという事だ。

子供が出来れば、俺はその子供にこの国を継がせたいと思つのだろうな。

だが、そうして滅びた国は多くある。

実力が無いものが上に立つ。それ以上に害悪なものなど無い。」

世襲制が大嫌いと。

「お父様が王となり、死んだ後は？」

「実力があるものが王となれば良い。俺が実力あるものを指名してもいいがな。」

「そうですか。」

お父様、貴方は王様となる資格があると思いますよ。

石の壁が目の前にある・・・。

・・・大きいですね。

イクエルの街の門も大きいものだと思いましたが・・・  
比較対象になりませんね。

円状に横に広がる大きな石壁。

どこまでも遠くまで続いています。

これは人がしたのでしょうか・・・

何かの魔法だと思いたいですね。

1年やそこらじゅう作れないものでしょ。

ふう・・・この門を抜けたら王都だね。

ふふ。

野口君まで後少し。

「シユタイン様！」

おや？一人の鎧の人気が来たね。

「義務ですので、シユタイン様にも確認を取らせていただきます。」

「分かっている。」

・・・目を見ている？何でしきう？

「シユタイン様、そちらの方は？侍従の方では無いようですが。もしありましたら家証を見せて頂けますか？」

「こいつは俺の娘だ。最近養子になつたのでな。瞳に家証は無い。目に何かしているのでしょうか？」

「そうでしたか。失礼致しました。では、王都にいる間に家証をつけて下さい。もしつけない場合はシユタイン様でも外に出る事が不可能となります。」

「ああ、分かつていい。」

「どういう事なのでしょうね？」

「王都へは通行証が必要と・・・？」

「ミナミ様。侍従にはこちらがあるのです。」

「カード型の通行証と。家証が彫られているね。」

「これがあれば城にいけると？」

「いえ、違います。これは王都へ入るためですね。城へは瞳に家証

が無いと入れません。」

「・・・ん、ということは？」

「マールさんはお城へ入れないのですか？」

「本来ならば。ですが侍従は何人かまで入れます。この黒の通行証ではなく赤い通行証が主より渡されます。その通行証は命を掛けて主を守る証。もし無くしでもしたならば命はありません。」

厳しいね・・・。

「マールさんは来るのでしょうか？」

「勿論です。」

「綺麗ですね。」

「そうですか？」

「ええ。」

門を抜けた途端、一面の金色の草原。

一目見るだけでもお金を払う価値はありそうだね。

「これは主様が主導を行い作ったシユーレの畑です。20万と言わ  
れる王都全ての人の食料となります。」

・・・シユーレとはなんでしょうね。小麦とかの事でしょうか？

「パンの材料にでもなるのですか？」

「ええ。このシユーレで作ったパンは昔の黒いパンとは比べ物にな  
らなかつたのです。」

黒いパンとはライ麦の事でしょつかね。

あれは確かにパサパサするイメージですね。

・・・そういうえばお城はどこへまつたく見えないのだが?

「王都はどこに?」

「ここから半日は馬車でかかります。」

・・・それは見えない訳だ。まだ野口君まで半日もかかるのか。

「・・・ふう・・・まあいいか。野口君は逃げないからね・・・。」

「野口君とは勇者様の事ですか?」

・・・おつと。

「そうだね。」

「会つたことがあるような言い方ですね。」

「最初にそう言つたはずだよ。」

「冗談にしか聞こえませんでした。」

「そう思つたのはそちらだよ?」

「ええ。ですが本当にお知り合いなのでしたら、主様も喜びます。」

「そうだろうね。ふふ、早く会いたいよ。」

「その・・・勇者様の事がお好きなのですか?」

・・・どうなのだろうね。

好きな事は好きなのだが。

ずっと一緒にいると分からなくなつてくるものだよ。

恋人として好きなのか。

幼馴染として好きなのか。

それとも、ずっと友人として一緒にありたいのか。

・・・この楽しい関係を壊したくないのだろうね。  
逃げているのかな。

・・・野口君は私の事が好きなのかな?

「どうだらうね。

言動を見ているとちがとちがつてこるよひには見えないのだけじわ。

「・・・どうだらうね。」

「複雑なお顔ですね。けどミナミ様らしい顔だと思います。」

「そうですか。そんなに私は考え方をしているように見えますか?」

「ええ、勇者様のお話をする時は分かりやすいですね。」

「・・・ふふ、そうですか。」

あまり顔には出ない性質だと思ったのだけれどね。

## 第1・2話・実力で。（後書き）

第1・2話読んでいただきありがとうございました。

## 第1-3話・クッキー···いや違うチヨコレートが私は食べたいんだ。

「···不思議な感覚だね。」

半日前、王都の門を通りたはずなのに、また門がある。

今度のは先ほどよりかは簡素なものが、それでも立派な石造りの門だね。

終わったようですね。

「手続きは終わりましたか？お父様。」

「ああ。久々の王都の家だな。」

「主様、約1月ほど経つております。ルーク様も会いたがっているでしょう。」

「そうか。」

「ルーク？誰でしょうね。」

「ルークさんとは？」

「シユタイン家3男で王都邸宅の執事長をしています。」

「それはそれは、私にとつては叔父さんですね。」

「···そうですね。」

「なんですか、その間は。」

「···お会いになれば分かりますミナミ様。」

「···そうですか。」

「どんな偏屈な人が出でてくるのでしょうか···。」

「ミナミ様、何か今晚に特別食べたいものはありますか？」「いえ、特には。」

「この国の料理は私の口には少し合わない。」

おいしいのだが、海外の料理を食べているという感じだね···。

毎日食べたくなる料理ではないかな・・・。

「ああ、そういうえばクッキーが作りたいですね・・・。」

「くつきー? とはなんですか? ミナミ様。」

「・・・」

クッキーとは何か。説明しづらい気がするね。

「・・・作つてみますので食べて判断してください。説明がしづらいです。」

「そうですか。楽しみにしています。何か必要な物がありますか?」

「牛乳、こむぎ・・・いえ・・・シューーレを粉にしたもの、砂糖、バター、卵辺りがあれば良いですね。分からるのはありますか?」「ギュウニュウですね。それ以外は邸宅にいけばあります。」

・・・牛がないのか・・・この国は・・・。

「牛の乳なのですが、この国には牛がないのですか?」

「ミナミ、牛は肉だ。それ以外の何物でもない。」

・・・なるほど。乳牛として育てないと。それは困りましたね。

「では、先日の料理に入つっていた、あの白いのは? というかバターの原料はなんですか?」

「あれは山羊の乳だ。」

・・・今きました。何故バターがあるのですか?

「それで良いです。」

「でしたら、家に全て揃つていますね。ミナミ様の料理楽しみにしておきます。」

「一つ聞かせて下さい。バターといつのはど? から作り方が?」

「先代の勇者だ。あの勇者はバターとチーズを真つ先に作つていたな。」

・・・何故でしょ? うね。」

・・・チーズ・・・チーズ・・・60台の勇者・・・。」

・・・ああ、もしかして。」

「お父様、この国的一般的なアルコー・・・お酒は?」

「ワインだ。その他にホールや果実酒もあるがワインが主だな。  
・・・なるほど。よっぽどお酒のおつまみが欲しかったのでしょうね。

先代の勇者様はお酒好きと。

「なんだ、ミナミ。酒が飲みたいのかついでだ、買つていいくか。

「いえ、飲んだ時はありません。」

「では、今日が始めての口だな。」

飲む事が確定ですか・・・。

ここは異世界ここは異世界。

未成年とかを気にしてはいけませんね。  
少し楽しみですね。

「活気に満ちていますね。この王都というのは、やはり人が多い所は違いますね。」

「それはそうだろう。今代の勇者が現れたばかり、それに加えて、  
その勇者は強い。

この街の安全はほぼ確実なのだからな。」

安全というだけでこの活気。私達の世界も見習わないといけない所  
かもしれませんね。

「ミナミ、どれを選ぶのだ？赤、白、青、黄があるが。」

「では・・・」

え？なんでそんなに色があるのでしきつ。

信号ではないのですから、そんなに色があつてはおかしいでしきつ。

「赤は渋味、白は甘味、青は苦味、黄は酸味が強いな。俺は赤を買  
おう。店主、赤を20本ほど家へ送つておけ。」

「ショタイン様、畏まりました。すぐにでも送つておきます。」

「どれだけ飲むのですか。」

まあ良いです。

「では、青色と黄色を。」

「ふむ。青と黄を10本ずつも一緒に送つておけ。」

どれだけ飲むのですか・・・。

・・・本当に青いですね。少し緑色が入った青色。これは原材料は

黄色はまだ良いですが。。。レモンみたいな葡萄があるのでしょ

う。

ゴーヤみたいな葡萄でもあるのでしょうか・・・?

「お帰りなさいませー・主様ー」

うるさいね。……それはそうか200人の人が同時に喋ればうるさいに決まっている。

「おかれりー！トラ兄ー！……この人誰？」

お父様、お母様、お兄様、お姉様、お孫様

10台前半にしか見えないのでですが・・・。

今戻った。ル・ケ、こいつは俺の娘だ。ミナミという。

・・・どういう事なのでしょうね・・・。

「マルさん・・・？」

はい、あの方かジニ・タイン家(3男川口ケ・ジニ・タイン様)の家の執事長をしております。

年齢は一歳で、じゃこね。

「・・・執事長が・・・13歳ですか・・・。」

「ご心配なさらなくても大丈夫です。シュタイン家の名は伊達ではありません。すぐに分かります。」

ルークさんが私の目の前で直立不動し、お辞儀をした。

「トラビア・シュタイン様の娘。ミナミ・シュタイン様ですね。初めてお田にかかります、ルーク・シュタインと申します。トラビア様のお嬢様となられたのでしたら、私の娘共同義。是非、この館にご滞在をなさる間は、私共を頼りにしてください。・・・なんなんだろうこの変わり身は・・・。

「はい・・・ありがとうございます。」

年下に娘呼ばわりされる口がくるとは思わなかつたよ・・・。

「分かりましたか?」

「はい・・・否応無く分からざれました。」

「ミナミ、クッキーとやらは飯にはなるのか?」

「いえ、なりません。なつても食後のお酒と一緒に食べるぐらいですね。」

「そうか。なら作つて来い。」

・・・偉そうですね。

・・・偉いんでしたね・・・忘れていました。

「ルーク様、ミナミ様が厨房を使いたいそ�です。一人就けて差し上げてくれませんか?」

「では、私が就きましょ。」

ルークさんですか・・・仕事は良いのでしょうかね・・・。

「ふう・・・いくよーーミナミ姉ちゃん!」

手を引つ張らないでくれ・・・。

「ミナミ姉ちゃんは料理が上手なんだねー・・・。」

「そんな事はないよ。」

「後はこのー・・・でうでうーしたの焼けばいいの?」

「そうだね。」

不思議な子だな。

計算づくんだらうか。

それとも2重人格に近い？

「どつちも僕だよ。」

・・・食えないね。

さすが小さくてもお父様の弟だけある。

「初めて会った人にはこっちの顔はあんまださないけどねー。怒ら  
れるし。」

「そうかい。」

ええっとオーブンは・・・ってオーブンが無いのか。

「焼くためのものはどこに・・・。」

「ここだよー。」

石窯・・・そうだね。オーブンなんて便利なものはないだろ?ね・・・。

「ピザを焼いたらおいしそうだね。」

「ピザ?」

「今度機会があつたら作ろう。」

「たのしみー!」

「それは良かつた。」

「おいしそうな色になつたね。」

「食べてみますか?」

「うん。・・・おいしい!思つたよりもおいしこね!」

本音がでているよ。ふふ。この正直さは昔の野口君を思い出すね。

「ミナミー!苦労だつたな。」

「偉そうですね。お父様。」

「偉いんだ。」

「忘れていました。」

「ふん。まあいい。グラスを出せ。」

「・・・マールさんとルークさんの日が見開いていますよ・・・。  
「それはそりゃう？俺自ら注いでやるなど王以外には今まで一度  
もないぞ。」

「光榮なことで。」

チン

グラスが鳴る。

・・・ 苦いね。

まだ私は大人では無いからね。

もつと大人になれば分かるのだろうか。

・・・ ふふ。野口君と二人でお酒も悪くない未来かもね。  
・・・ けどワインのイメージはあまり無いかな。

日本酒とかビールとかを飲んでそうだね。

クッキーは薄く焼いて塩味とチーズを乗せた物。  
甘くふんわりサクサクとした物を一つ用意した。

お父様はチーズのほうを食べている。

「料理が上手いのだな。」

「それ程でも。」

「明日の夜も焼いておけ。」

「ふふ。気に入りましたか？」

「ああ、娘の作つたものだ。消し炭でも食つてやうつと思つていた  
のだがな。存外美味しいものが出てきて嬉しい限りだ。」

「うるさい。」

消し炭はありえないでしょう。

・・・ふふ。

野口君は喜んでくれるかな。  
明後日には野口君に会える。

野口君もあつちの世界の食べ物が食べたくなる頃でしょう。  
食べたければ3回回ってワンと言わせてみるのもいいかもします  
んね。

・・・・・いや、本当にしゃべりだからやめてしまおう。

第13話・クッキー···いや違うチョコレートが私は食べたいんだ。（後書き）

第13話読んで頂き有難いござります。



第14話・クリスマス。思い出と共に4

雪が降っている。

高校生になつた。  
新しい友人も出来た。

最近は野口君も忙しいみたいだね

一ハ一木の木が遠か一レル円を走  
メタリで雪景色も奇麗なのがカバ

「後、少しで2年生か。もう一年終わってしまったのだね。」

ほん

後ろから肩をたたかれた。

「なんですか？」

誰でしょ、うへ

見た所同じ学校のようだが？

「久坂さんだよね？」

「ええ、そうですが貴方は？」

「俺は高田康孝。陸上部の部長をしているんだ。」

卷之三

「野口克也君ですよ。」

「ああ……そういう意味じゃなかつたんだ。」めん「めん。」

顔が歪んだ気がしますね。

「で、何の用事ですか？」

「「」あんね久坂さん。」

年上にさんづけですか・・・何か面倒な用事でもあるのでしょうか?

「久坂さん、俺と付き合つてくれないか?」

「何を言つてているのですか?」

「冗談ならばリアクションの良い子を選んだほうが良いですよ?」

「冗談なんかじゃない!俺は初めて久坂さんを見た時から!」

「売約済みです。申し訳ありません。」

「田惚れといふのですか。私はあまり信じていませんがね。」

「お気持ちは嬉しいですが、私は恋愛事に興味がありません。」

「・・・本当なのかい?」

「ええ。」

「野口と付き合つてゐるのか?あいつは付き合つていいないと聞いたのだけど?」

「付き合つていません。」

「だつたら!」

「申し訳ありません。」

「もつと可愛い子は沢山いるでしょう。」

「私など相手にして居ないで、他の子に告白すれば良このひ。」

「貴方のような方でしたらよりどりみどりしちゃう。」

「・・・少し考えてくれないか?」

「申し訳ありません。」

「・・・そうか。」

「告白といつのは初めてだった。」

「恋愛事とこいつのまじうなのだろうね。」

野口君の顔が赤黒く腫れている。

「どうしたんだい？」

「なんでもない。」

「本当にかい？」

「ああ、男の意地だ。なんでもねえ。」

「そりゃかい。」

それは何かあったと言つてこるやうなものだよ？

クリスマスが近づいてきたね。

今年はどうするかな・・・。毎年食べ物というのも・・・餌付けしている気がするしね。

廊下を歩いて考え方をしていた。

「久坂さんー会いたかったよー！」

・・・「ひむさい。

「学校ならばこぐらでも余れるでしょ。クラスにくれば良いのです。」

「・・・ん。そうだね。」

高田さん。普通は怒る所ですよ。恋は直田といひのは本当なのでしょうかね。

「クリスマス、俺と一緒に過ごしてくれないか？」

「何故ですか？」

「良いじゃないか。野口に聞いたらあこいつはあこいつの好きなよつとん」と言つていたし。」

何故、野口君が出てくるのでしょうか？それは当然です。

「どうして野口君が私の予定を決めるのですか？それは当然です。私の予定は私自身が決めます。」

「良いじゃないか！親睦を深めると思つて。」

「申し訳ありません。クリスマスは親と一緒に過ごすつもりなので。」

「

「・・・久坂さんの親はもう居ないじゃないか！」

「何を言つてますか？私は、野口君の親御さんと野口君と過ごすつもりですよ？」

「ぐ・・・。」

「お誘いありがとうございます。私の予定は私自身で決めています。覆すつもりもありません。」

クリスマス・イヴになった。

商店街のイルミネーションが綺麗だね。

「野口君、あの木のイルミネーションは綺麗だね。」

「そうだな。」

「なんだい？こんな可愛いい子と一緒にいるといつのに冴えない顔をして。」

「そうだな。」

・・・詰まらないね。いつもなら的確な・・・。

「野口・・・」

呼んでいるよ野口君。部長さんが。

「・・・高田先輩。」

「お前・・・久坂さんは何も無いって言つてただろー。どつこいつ事だよ！なんで一人で歩いてるんだよ！」

「高田さん、私達は幼馴染ですよ。小学生の頃から、ずっとクリスマスはこうして過ごしてきました。」

野口君の前に出る。

「ぐ・・・あ・・・久坂さん。」

「高田先輩すいません。南が決めた事なんで、俺は何も言い訳するつもりはありません。」

野口君が私の前に出た。

「・・・良い度胸じゃねーか野口。・・・久坂をんどこいてくれるか？」

「嫌ですね。何が起きるか想像出来ますよ。やうじつのは漫画の中だけにしてもらえますか？」

「チツ・・・。」

野口君に何か言っていますね。

「野口君？何をするつもりかな？」

「なんでもねえ。」

「私にも言えないのかい？」

「意地は張り通す。」

「君は本当に正直だね。」

夕方になつた。

野口君はどこかへ行くよつだね。

ふふ。私を撒こうなど100年早いよ。

「野口。お前南さんとは付き合つてないつてこつてたよな？」

「なんで名前で呼んでいるんだろつね。」

「付き合つていません。」

「あれは幼馴染としてなんだな？」

「・・・ええ。」

高田先輩が手を振り上げたね。

バキッ

「・・・」

なんで何も言わないんだい？野口君？

「嘘こいつてんじやねえよーあれのジジがつまあつてねーってこうんだ！」

「嘘じやありません。」

バキッ

痛そうだね。

ふう・・・。

「高田さん、もう止めて下れ。」

「久坂さん・・・なんでここのへ野口？」

「言つていません。」

「言わなくとも分かるのです。」

「・・・ふふ・・・あははははー野口ー。」

野口君の前に立つ。

バキッ

痛いですね・・・舌を切つていませんか・・・

カラーン。

あ・・・

グシャ。

・・・

「高田先輩・・・・・・・・・・南になにしやがんだあ！」

野口君・・・・私が勝手に前に出てきたんだよ・・・

「野口良い度胸じゃねーか！」

30分は経つた・・・私は何も口を挟めない。

「チツ。野口・・・もういいわ。興味が失せたわ。」

「・・・・ハア・・・・ハア・・・・そうですか。」

高田さんはどこかへ行ってしまったね・・・。

野口君・・・?

「南、勝つたぞ。」

「いっぱい殴られていたよ?」

「勝つたんだ。」

「そうなのかい?」

「勝つたんだつての!」

「そうなのかい。」

野口君の首にチョーカーを着ける。

「今日はクリスマスだからね。勝ったのならプレゼントをあげないとね。」

「・・・首輪?」

「犬かい?野口君は・・・?ワンと鳴いてじーらん?ほりお弔。」

「誰が犬だつての!—いつてえ・・・唇切つてるわ・・・。」

「はい。」

ハンカチで血をぬぐつてあげる。  
ごじごじと。

「こつてええええええ！超いつてえ！…！」

「おや？ウルトラはどうしたんだい？」

「ウルトラとかもう使わねえよ…」

心配させた罰だよ。

「なんで最初は殴り返さなかつたんだい？」

「殴つたら負けだろ。あーいうのは。俺は負ける為に勝負はせん…」

「そりなのかい？それは男のロマンといひやつかい？」

「・・・どうなんだろうな。そりかもしけないな。」

「男のロマンとやらは、私には良く分からぬ。」

「そりや そうだろ。だから浪漫なんだよ。で、この首輪石がくつついでるんだ？」

「首輪じゃないよ、チヨーカーだね。手作りで作つてみた。野口君にぴつたりな石だよ。」

「どういう意味だ？」

「その石はトパーズだよ。宝石言葉は眞の友情。」

「そりやまあ、俺達らしいかもな！まつまつは！」

「そうだね。幼馴染だからね。」

「ああ、幼馴染だからな。」

野口君の家に着く。

「野口君、じめん。君からもひつたこれを一つ壊してしまつた。」

「・・・まだ使つてたのかよ。」

「勿論だね。」

「また、何か買つてやるよ。」

「そりかい、では今すぐジムヒリー・ショップに…・・・」

「ちよつとまで…今すぐとはいってねーだろ…」

「ふふ、冗談だよ。今年の野口君のクリスマスプレゼントはなんだ

ろうね。楽しみだよ。」

「う・・・あー！ そういえば今年のケーキはチココレートケーキだと。」

「野口君。早く行こ」うじやないか蠅燭ふーは私のものだよ？」

「別に俺はしねーよ！ それもそれは誕生日だらうがーなんでクリスマスに蠅燭吹き消さないといけないんだよ！」

それで良い。

いつもの野口君に戻ったね。

「野口君、ありがとうね。」

「何がだよ。」

「全てにだよ。」

「そつか。」

「そうだよ。」

野口君。トパーズの宝石言葉の本当の意味はね・・・。

? . . . . . . . ?

第14話・クリスマス。思い出と共に4（後書き）

第14話読んで頂きありがとうございました。

## 第15話・勇者との邂逅。

良い朝だ。何か不思議な気分だ。

そういうえば、久しぶりに自分の力で起きたね・・・。  
アルコールを飲むと寝覚めでも良いのでしょうか？

コンコンコン  
ノック音がする

「ミナミ様。入ります。」

起きていないと思つてているのだろうね。  
そうだろう。

こちらへ来て1度もマールさん起こしてもうつてこない日など無い  
いのだから。

「ミナミ様。起きて下さ・・・。」

「おはようございます。マールさん。」

目を見開いているね・・・。

どうしたのだろう？

「主様ー！ミナミ様が一人で一人で起きてください・・・。」

「うるさい。私は子供ですか。貴女は私のお母さんですか。」「似たようなものでしょう。」

そうですか・・・。

「本日はこちらを着て頂けますか？」

真っ黒な服だね・・・黒は嫌いではないのだけどもコーディネート  
としてはどうなのだろう？

「本日は街へ行きますので、少しでもミナミ様に立つて頂かねば  
いけません。」

「ああ・・・少しでも認知せるとこう事かな？」

「ええ、主様は顔がある程度知れ渡っていますが、ミナミ様はビリしてても。」

「そうだろうね。まだこちらへ来て数日程度。王都にきたのは昨日。知り合いなど居ないのだから少しでも目立とうとしなければいけないと。」

「それに加えてですが、夜会に出席する時のドレスの略式の服です。本日は装飾品を見に行きますので、その服に合ひ物を主様が選ぶと思われます。」

なるほど……。

「良くお似合いでですよ。」

「そうですか。」

黒が似合う。黒が似合う人はある程度の素材の良さが必要だと思つただけだね。

「ミナミ、起きたか？今日は一人で起きていたと聞いたが、明日、災厄が起きるのではないだろうな？」

「私が起きたぐらいで起きる災厄ならば、虫でも退治出来そうですね。」

「それもそうだな。」

大きいお店だね。

品物が多数あるのだろうか？

「シユタイン様！お待ちしておりました。本日の『』用件は？」

「『』の娘の服に合ひ装飾品があるか？」

「・・・ほ・・・・黒髪ですか。珍しいですね。この黒髪自体が立

派な装飾品のよつな気がしますが・・・合わせましたり。

「主人。先日の黒銀石はどうした?」

「あれは、不純物だらけですので商品にはなりません。」

「あれを貰おう。」

「宜しいのですか? あれは。」

「あれ以外にこいつに似合う物は無いだらう?」

「・・・そうかもしませんね。初物の加工の為ある程度のお代は頂きますが宜しいですか?」

チャリン。

金色のコインが何枚か机におかれたね・・・。  
あれはいくらいくらになるのだろうか・・・。

「シユタイン様! ?こんなには・・・」

「お前の所の工房で出来る限りの細工をしぃ。手間賃だ。」

「畏まりました。お時間は少々頂きますがよろしいですか?」

「厘だ。」

チャリン。

また数枚の金色のコインが・・・。

石の加工を数時間で終わらせると、そのような機械があつても大変だと思うのですが・・・。

この世界に機械らしき物は見当たりません。手作業で数時間で終わらせるところ?

「畏まりました。必ず仕上げて見せましょ。」

「厘過ぎに取引にくる。」

「お父様、黒銀石とはどういう物なのですか?」

「吸い込まれるような黒。それに呑ませたような斜線の銀。それ以外の不純物はまったく無い石だ。」

「先程の不純物とは？」

「その石は銀が入っていないく、金が石の周りに点々と無数に入っているのだ。」

「だから安いと？」

「普通の家族ならば、その石一つで6月は暮らせるだらうな。」

「半年も暮らせる石・・・。」

「私に似合う石なのですか。」

「ああ、お前以外には似合わないな。お前の為にあるような石だ。」

「昼を楽しみに待つておけ。」

「楽しみですね。アクセサリーにはあまり興味がなかつたのだけども。綺麗な物を見るのは楽しみです。」

ざわ  
ざわ

「どうしたのでしよう？周りの店の人達や歩いている人達が止まつてしましましたね。」

「勇者様とノーラ姫が見れるんだろ！もう少し近くにこいつぜー！」  
声が聞こえましたね。

「顔見せですか・・・。王族というのも大変ですね。」

「責務だからな。人というのは崇拜と尊敬の対象を欲しがるものだ。」

「・・・そうかもせんね。」

「人というのは何かの為に動くのが一番楽で、長続きするのですから。」

「ミナミ、どうした？」

「行きましょう。お父様。」

「明日会えるのだぞ？」

「行きましょう。パパ。」

「・・・」

ため息をつかれてしまいました。  
パパというと愛人みたいですね・・・。

広場のような場所に出ました。  
喧騒が大きくなっていますね・・・。

勇者様ーーーーー！

ノーラ姫様ーーーーー！

・・・あれば・・・野口君だね。  
少し痩せたかな？いやどうだろ？遠田では少し分かりづらい。  
城の低い場所から手を振っているように見えるね。

私も手を振ろう。

こちらを見たね。  
きずいたかな？

いや、無理でしうね。

100、200どころじゃない数の人が埋め尽くしているのだ。

野口君、ここまで来たよ。

そんなに大変では無かつたと思つ。けれど苦労もしたのだよ？

早く帰るつ野口君。

もし君が正義感を振りかざして災厄を。なんて言い出したら殴つて

でも連れ帰らせてもらひうよ。

ここは私達がいる世界ではないのだから。  
私達に何か出来る訳ではないのだよ。

視線を横へずらす。

「あれがノーラ姫ですか。綺麗な方なのでしょうね。ここからでは  
髪の色ぐらいしか分かりませんが。」

金色の髪。腰までの髪。

野口君・・・金髪が好きなのですか？

「ああ。」

ノーラ姫が野口君の手を取つてお城へ入つていきましたね。

・・・ふふ。

優しくしてもらつてているようだね。

・・・背中には気をつけるんだね。

「どうだ?一人の仲は良好のようだらう?」

「ええ。あれだけではまだなんとも言えませんが。」

「自信は揺るがないのか?」

「ええ。」

「そうか。」

・・・お腹が空きましたね・・・。

「お父様、お腹が空きましたよ?」

「・・・」

スルーですか。無視ですか。

しそうがないじゃないですか。野口君は居なくなりましたしね。  
広場はおいしそうな物の匂いがします。

「子供がお前は・・・。これで何が買つて来い。」

銀色のコインですね。何を買いましょうか。

・・・これで何が買えるのでしょうか・・・。

「お父様、パンに何か挟まつている食べ物は売っていますか?」

「ああ・・・。その店だな。シユゲルが食べたかったのか?」

「ええ。シユゲルが食べたかったです。」

シユゲルとはサンドイッチの事でしょう。

なんでも良いです。

・・・

「何でしよう・・・。これは?」

「言つただろう? シユゲルだ。」

パンに挟まつています。

あえて言つならハンバーガーでしょうか?

「ここの間に挟まつているのは?」

「焼いて平にしたパンだな? 塩味が効いているな。」

「パンにパンが挟まつている?」

「そうだ。」

意味がわかりません。

私が想像したものを180度ひっくり返してもこんな物は想像していませんでした。

・・・まあそんなに不味くはないので良しとしましよう。

炭水化物＆炭水化物は日本の特徴だと思つていたのですけどね。

「ミナミ、店に戻るぞ。」

「もうそんな時間でしたか。」

もつお昼を過ぎていきましたか。

「シユタイン様、お待ちしておりました。こちらが完成品となります。」

「ふむ……ミナミ来い。」

私の胸元にあてていますね……。

似合うのでしょうか？

「店主、貰つていこい。」

「ありがとうございます。」

ブローチみたいですね。

「お父様、私にも見せて頂けますか？」

・・・結構大きいですね。

手のひらより少し小さいぐらいの石。

それに土台があり、石は綺麗な黒、綺麗な金色が星のようですね。

土台は・・・炎のようですね。

何故でしょう？

「お前は火のようなやつだ。」

「何故ですか？」

「どこに行くか分からぬ不安定さ、怒る時は静かに、そして気づかぬ内に燃え広がる。」

「気づいた時には？」

「お前の怒りはどこへ消えたかな。」

「ふふ。面白い例えですね。気に入りました。」

家へ到着した。

数時間だったのだけども、結構長く感じましたね。

「マールさん。ただいま帰りました。」

「主様、ミナミ様、お帰りなさいませ。」

「マール」の石をドレスに合わせておけ。明日朝までにな。

「戻りました。」

さて野口君用のクッキーでも作るかな。

・・・何故でしょうか?

「すゞい騒がしい気がしますね・・・?」

「ミナミ様が作られたクッキーを再現しようとしているようですね。」

「・・・私が居る間にすれば良いことじゃないか・・・。」

「・・・ルーク様が食べたくなったとおっしゃって・・・。」

「そうですか・・・。では、私も作ります。」

「はい。よろしくお願ひします。」

「あーミナミ姉ちゃん! おかえりー! 早く早く!」

「・・・ふう・・・ため息がつきたくないね・・・。」

「この厨房は暇なのだろうかね・・・。」

「何故こんなに真っ黒な消し炭が沢山・・・。」

「どうしても焦げちゃって。」

「昨日詳しく作り方を言わなかつた私も悪かつたね・・・。」

料理人の人達にも教えますので、こちらへ。」

・・・数百枚のクッキーが出来上がつた。

・・・こんなに食べるのでしょうか・・・?」

まあこの館の従業員は3・40人はいそうだからね。  
大丈夫でしょう。多分。

私が最初に作ったクッキーは綺麗に包装して。

明日、野口君へ渡そづ。

ふふ、喜ぶ顔が目に見えるね。

第15話・観者との邂逅。（後書き）

第15話を読んで頂も有難いございました。

## 第16話・お城へ。

「ミナミ様、ミナミ様。」

朝・・・?

「おきましたか?」

「はい。」

「本日は朝はドレス合わせ。昼からは主様とお茶を楽しんで居て下さい。夜からが・・・」

「はい、起きています。」

「ミナミ様、寝ていますね?」

「寝ていません。」

「では、朝からの予定を言つて頂けますか?」

「今日はお休みです。」

「起きる。」

「・・・眠いですね・・・。」

「起きて。」

「・・・眠いですね・・・。」

「ミナミ、起きたようだな。昨日のは一体なんだつたのだ?」

「青天の霹靂とこつやつでしょ?」

「なんだそれは・・・まあいい。・・・本当に起きているか?」

「大丈夫ですよ・・・。何度も確認しないで下さい。」

「確認するぐらいでないと安心出来ないからな。」

「・・・どれだけ寝ぼすけですか私は。」

「自覚をしろ。」

「・・・すいません・・・。」

「・・・すいません・・・。」

綺麗なドレスです。

けれども・・・普通の結婚式などで使つたら浮いてしまことつです

ね。

「どうだ？」

「ええ・・・とても綺麗だと思いますよ。この黒銀石もとても綺麗ですね。」

「黒銀石とでも名づけるか。」

「それはそれで良いのでは無いでしょうか。」

「ミナミ、お前には金色が映える。その耳の装飾品も良い代物なのだろう? 装飾が複雑に出来ているようだ。」

「・・・多分ですが、朝食のパンが30・40個ぐらいで買える物ですね。」

「・・・それを作った者はあまり金に執着がないのだな。」

「・・・この国の装飾品は全て手作りのようでしたからね。」

「まあ・・・いい。ミナミ。グラスをとれ。」

「はい。」

「お前の前祝いだ。」

「ありがとうございます。」

チン

グラスが鳴る音だけが響く。

「このドレスは前のドレスと違うのですね。」

「ああ、前のはノーラ姫への献上品の中の一つだな。」

「それを私が着てしまつてようしかつたので?」

「意味が出来た物を献上するものほど阿呆はないだらう?」

「・・・そうかもしませんね。」

通りで娘もない。使用人以外女の人がないあの館にドレスがあるはずです。

・・・下着は何故あったのでしょうかね・・・。

ウエストの辺りにシルクらしき肌触りの良い布を巻きつけ前面で縛られる。

「少し痛いですね・・・。」

「ですが腰や胸元が綺麗に出るのですよ?」

「痛いものは痛いですね・・・。」

「慣れて下さい。」

ガタッ

ドアが開く。

「ほう・・・良い格好じゃないか?」

「お父様・・・?何をしているのですか?」

私はドレスを着る前なので下着と布しか身につけていないのですが?

「ミナミお前の裸なぞ興味が無い。特にお前のような・・・な。」

何が言いたいのですか?胸ですか?

「ふ・・・お父様、女は胸ではないのですよ?」

「無いよりも有るほうが良い。それは金や人、なんでもそつだらう

?」

「・・・100回死んでください。」

「ふむ・・・良く似合っているではないか。前のドレスも似合っていると思つたが。」

「有難うございます。」

「・・・マール。花を。」

「畏まりました。主様。」

「これだな。この黒のやつだ。肩から首にかけてと頭に一つずつ。

黒と黄色の花びらを下に散りせ。」

「畏まりました。」

驚きました。

「お父様、貴族ぽいですよ?」

「貴族だからな。」

「そうでしたね・・・普段の態度を見ていると貴族の雰囲気が壊れてしまいそうです。」

「お前は女ぼくはないがな。」

「・・・真似をしないで下さい。後30歳を超えている人が”ぼく”とか使わないで下さい。」

女らしくないというのは・・・あまり否定はしませんが。」

「ふはは。俺も興奮しているのか。お前が何をするのかは分からん。分からぬからこそ、楽しみなのかもしけんな。」

「変なお父様ですね。」

「貴族とは得てして人とは違うものだ。」

「・・・そうですか・・・。」

私の周りには変人ばかりが集まつてくるね・・・。

類は・・・とは思いたくないけれども・・・

ガタ  
ガタ。

馬車がきました。

緊張しているのでしょうか。

私が?

ふふ、慣れない場所なのでから当然でしょ!。

野口君、ここまで来たよ。

似合つてねーよーとか言われて笑われるかもしませんね。

けれども、もし、・・・似合つてると書いてくれると嬉しいのだけ  
どもね。

後、数時間。

「行きまじょうか・・・お父様。・・・ん？」

「早くしゅう//ナ//。」

「置いていかないで下りこよ・・・。一応私が主役なのでは・・・  
?」

運動会で一番頑張っていたのは父兄でした。とか後で言われちゃいますよ?

「娘の晴れ舞台だ。打算はあるが、俺も楽しみに違ひは無い。」

「そうですか。」

「行くぞ、ミナミ。」

「はい。お父様。」

馬車が走る。

走る。

最初に見た夢がここからどう繋がるのかは分からぬ。

だが、この世界には剣もある。

あり得ない事ではなくなつた。

・・・私が野口君を殺す。

そのような事にもし・・・なつたひ。

いや、駄目だね。

前向きに。

逆夢にして、一緒に帰る。  
それだけを考えれば良い。

悪い方向になど考えるな。

## 第16話・お城へ。（後書き）

第16話読んで頂きありがとうございました。

## 第17話・勝負。

「綺麗なお城ですね。」

日本のお城とは違うね。

中学校の修学旅行で行った時に見たものとは違つ。

西洋風なお城なのだね。

日本のお城が厳かな雰囲気なのに比べて、やはり聖的なものといった感じかな。

「シュタイン様お待ちしておりました。皆様揃つております。」

「ああ、分かつた。」

「では、馬車はこちりいで。」

「ミナミ、行くぞ。」

手を引かれる。

「子供ですか。」

「似たようなものだらう。」

何故でしじゅう？何がじろじろと見られて、いる気がします。

「どうして皆様に見られているのですか？お父様が田立つののは分かりますが。」

「俺の娘として城に入るのだから当然だらう。」

「そういうものですか。」

「ああ、クッキーの件もあるかもしれない。城中の人々に配られたみたいだぞ？」

「どういう事ですか……。」

「昨日のあの枚数を家の者だけで食べられる訳がなからう。マールとルークが昨日嬉しそうに袋に包んでいたぞ……？」

「・・・やうですか・・・。」

こちらの世界に無い新しい食べ物ですからね。  
わざ珍しかつたのでしじょう。

「ミナミ、お前がただ単に美しいからかもしれないぞ?」

「あり得ませんね。遠田でしたがあ姫様はすごく綺麗でしたよ。金色の髪がさらさらと。」

「お前は黒髪だらう?さしづめ黒姫といった所か?」

そうでしたね・・・この国の黒髪は私以外は野口君しか居ないのでしたね。

小さな部屋へ通された。

「マールさん、ルークさん。」

二人が待っていたね。

「主様、ミナミ様、お待ちしておりました。クッキーは皆様喜んで頂けました。」

「そうか。」

「初めての食べ物を良く皆様食べる気になりましたね・・・?」「材料は極めて普通なものですから。説明したら皆様普通に食べていましたよ。」

それはそうか。

「お父様?皆様の所へは行かないのですか?」

「慌てるな。」

「慌ててなどいませんけどね。」

「あ、マールさん。野口君に渡すクッキーを持ってきて頂けましたか?」

「はい、じゅりん。」

クッキーの袋が手渡される。

「ミナミ、俺が預かる。お前が今日の主賓だ。そのような物を持つていると邪魔でしようがないぞ。そのドレスには物を入れる所など無いのだからな。」

「・・・ああ、せつかもしれませんね。ありがとうございます。お父様。」

「そういえば、何故すぐに行かないのですか？」

「すぐに入ってしまうのは格が低く見られるからだな。今俺達が到着した事が会場に伝わっている。あちらにも準備が必要だからな。」

「ああ・・・そういうものでしたか。マールさん、何か飲み物が欲しいです。」

「ミナミ・・・お前には緊張といつ葉は無いのか？」

「緊張してもしょうがないでしょ？」

「まあ・・・そうだがな。」

ただ、幼馴染に会うだけ。

ただ、それだけ。

その他は有象無象。

ジャガイモとでも思えればいいだけです。

「ミナミ、お前はどこでそのような事を覚えたのだ？」

「急にどうしたのですか？後、そのようなとは？」

「これから行く先には100名より多くの人間がお前を待っているようなものなのだと？」

「そうなのでですか。」

それは多いですね・・・。

「それだ。そこで驚くでもなく、ただ単に”そうですか”的の一言で済まされる胆力だな。」

「昔からですね・・・あまり昔から緊張は無かつたです。ですが、あえて言つのならば囲碁、いやなんと言えばいいですか。盤を使つた頭を使い戦う物といえば分かりますか？」

“ “イゴ” という物は知らないが、地図を使った軍事演習のような物でいいか? ”

「ええ。それで構いません。その囲碁というものをしている間は周りの目など気にならないのです。相手以外は関係ないものですから。盤上、相手の目、手、呼吸音、それと相手の心の声でじょうか。それ以外は私には映りません。

そのようなものをしていたからでじょう。私には目的以外のモノはただの置物にしか見えません。」

「・・・そうか。それがお前の元か。ミナミ、お前はその“イゴ”とやらいは強かつたのか? 」

「どうでしょうね。ですが、同年代に遅れを取るといつたことは無かつたです。プロ・・・いえ専門家、職人と言いましょうか。専門家とも打つた時がありましたが一度も勝てませんでした。」

「それはそうだろう。どんなに優れた人であつたとしても何か一つに昇り詰めたモノは恐ろしいぞ。」

「ええ、怖かつたですね。何せ何も見えないのですから。動搖、焦燥、不安、何も見えて来ないのである。けれど、上がまだある。そう思えてとても嬉しかったです。」

「そうだ。上がある。それだけで挑戦者といつものは努力をする。だが、昇り詰めたモノが見るのは得てして下だけだ。上を見るという事が出来なくなる。王や勇者というものがそうだろう。民の為、臣下の為。下ばかりを見ている。俺は王となつても、挑戦をし続ける。」

「民の事は考へないと? 」

「違うな。王が考へる事ではないだけだ。王は指示するモノ。民はその指示する方向へついてくるものだ。王が下を気にしていっては、国はそこで終わってしまうものだ。」

「そうですか・・・お父様。」

「なんだ? 」

「貴方がお父様で良かつたと思います。」

「 そりが。」

もし万が一戻れなかつたとしても、戻れなかつた・・・としても。  
この人が王となる國なら生きてはいけそうです。

野口君と一人で、小さな家を建てて、小さな生活をする。

・・・それも良いかもしないね。

不便かもしない。

けれども、ここでしか得られないものもあるかもしないね。  
そう・・・思つてしまつた。

「 主様。そろそろ。」

「 ・・・行くか。ミナミ、行くぞ。」

「 はい。お父様。」

ここまで來たよ。

さあ・・・勝負へと行こうじやないか。

ふふっ・・・勝負か。野口君の口癖がうつってしまったかな?

第17話・勝負。（後書き）

第17話読んでいただき有難うござります。

## 第18話・再会。

お父様の横を歩く

とてもふわふわした絨毯の上を歩く。

・・・この上を十足で歩くのですか・・・。

少しもつたいたいような・・・気がしないでもない。

「シュタイン様、お久しぶりでござります。」

「・・・サイン・クラウドか。3月ぶりか?」

「それ程とは思いませんでした。シュタイン様、くつきー?でした  
か?誠にありがとうございます。あれはシュタイン様が?」

「いや違う、俺の娘がな。」

誰でしょうね。部屋に入る前に人が来るとは思っていませんでした。  
30台青い髪。もう色では驚きませんよ。

「ミナミ・シュタインと申します。クラウド様・・・?でしたか。  
お初お目にかかります。お父様とは仲がよろしいようだ。

「そうだな。小さき頃から知り合いではあるな。」

「ええ、そうですね。もう20年以上昔ですか。」

「俺達も年をとるわけだ。お前は婚姻はしないのか?」

「ええ。目ぼしい相手がないので。」

「こちらを見た?なんだろうね?」

「ミナミ様・・・でよろしいですか?」

「ええ、クラウド様。シュタインでは、お父様と分かれませんから。」

「では、私もサインとお呼び下さい。」

「分かりました。サイン様。」

「ミナミ様、この夜会が終わった後に一人でお話したいことが。」

「クッキーの事ですか？」

「良くお分かりで。つくり方をお聞きしたいと思います。」

その為にここまで来たのでしょうか？物好きですね。

「・・・ミナミ様、クッキーのお話が無かつたとしても一人でお話は出来ますか？」

「何のお話ですか？」

「愛の囁きですよ。」

「お断りします。冗談はあまり。」

「・・・・はっはっは！断られてしまいましてね。」

「本気でしたら、お話だけは聞いてあげますよ？」

「では、後で。楽しみにしておきます。小さき黒姫。貴女はノーラ姫に負けるとも劣らない美しさ、気高さをもつていらつしゃるのですね。ノーラ姫が血統書きならば、貴女は孤高の黒狼と言った所でしようか？」

「女人を犬扱いとは。これはノーラ姫に言わないとな。」

「ふふ。それが普段の話し方ですか。またお会いしましょう。シユタイン様」

「ああ、後でな。」

「・・・小さき黒姫・・・か。」

「どうしました？お父様？」

「良く似合っているじゃないか。お前そのものだぞ？」

「服まで黒くしたのはお父様でしょうか。」

「小さきというのもだがな。」

「背の事ですよね？それでしたら許しますよ。慣れています。」

「さあな？ふふふ。」

「100回殴りますよ。」

大きな扉の前についた。

10人ぐらい一度に入れそうだね。

「シユタイン様お待ちしておりました、息女のミナミ様ですね？皆様お待ちしております。」

「そうだ。」

「トライア・シユタイン様！息女ミナミ・シユタイン様入られます！」

静かだね。

人並みが左右に分かれている。

髪は金と銀が多いかな。

皆通るたびに一礼している。

綺麗な椅子が3つ。

左にはもう誰か座っていますね。

「ふん。」

お父様は右に座りましたね。私の椅子は無いのでしょうか？

「横に立つていろ。笑顔を振りまいてな。」

・・・私は立つのですか・・・皆様も立つていますしね。私が座るのもおかしいのでしょうか。

「シユタイン、唐突で驚いたぞ。お主がこのような場に来る事はほとんど無いからな。」

「グーラ、悪かつたな。娘のお披露目に使わせてもらつた。」

「構わん。王も姫の顔見せのようなものだ。姫より目立つなよ？」「知らん。俺の娘が目立つようならばノーラ姫の魅力が足りないだけだろ？」「…」

「お主の娘はかなり目立つ。これと比べられてはノーラ姫も可哀想

ではないか。まさかの黒髪が、どこで見つけてきた。

「家に落ちていたのだ。」

「そのような冗談を言つてはいるのではないのだがな。」

本当です。

・・・この人が主催のグーラさんですか。

50前後の恰幅のいいおじさんと言つた所ですかね。

髭が似合っていますね。

この2人に加えて王様がこの国のトップといったところですかね。

・・・お腹空きましたね。

ずっとただ立つているだけというのも・・・あの美味しいそつな食べ物の所へ走つていきたいですね。

バン！

扉が開く

「魔王キャストル・イスター・ナ様入られます！」

皆頭を伏せてしまったね。

私もしたほうがいいのだろうか？

お父様は・・・?していしないね。

正面を見ておー!ハ。

・・・本当に70歳ですか・・・筋骨隆々とはこの事でしょう。

強い人が王となるというのは本当のようですね・・・。

白いひげも生えていませんし・・・。

王様といつたら”ふおふおふおつよくきたのじや勇者!”とか言って白髭を生やしているイメージなのですがね。

「ふおふおつ、グーラとシュタイン、久しいな。」

言いましたね。

王様っぽくなりました。

「そちらの娘は？」

「俺の娘ミナミ・シュタインと申します。イスター・ナ様。ミナミ挨拶を。」

「畏まりました。お父様。お初お目にかかります。魔王イスター・ナ様。トライア・シュタインが娘ミナミ・シュタインと申します。」スカートの裾を摘み少し上へ上げ、お辞儀をする。

・・・この挨拶はいつも思うのだが、少し扇情的だと思つる・・・。

「ほお・・・黒髪、黒のドレス、装飾品まで黒か。黒髪は勇者と同じじゃな。その石も花も悪くない。シュタイン、良い趣味をしておるな。」

「ありがとうございます。ミナミ、良かつたな褒めて頂いたぞ。」

「ありがとうございます、イスター・ナ様。褒めて頂いた経験などあまりありませんので嬉しい限りです。服ばかりなのが残念ですが。正面を見据える。王様の田から田を逸らさない。逸らしたら負けだね。」

「・・・ほお・・・・・・ふつわつはつはつはー。」

笑い出してしまいました。

「シュタイン、お主の娘は面白いな。顔を褒めてくれと直接言つてきた奴は初めて見たぞ。

勿論良い女ではないか。我が後50年いや40年若ければ娶つてやつたのじゃがな。」

「有難きお言葉嬉しい限りです。」

「いえいえ、イスター・ナ様そこまで褒めて頂かなくて結構。調子に乗つて館に帰つた後が大変になりそうでね。」

・・・うるさい。」

「シュタイン、お主の娘は有力な貴族と婚姻させんのか?伸びてき

ている貴族も何家もあるつ?」

「まだ娘は若いので任せたおきます。私自身も若い身であります。

好きに選ばせてあげますよ。」

「それも良いのだらうじやがな、若いとこりう事に甘んじるところ」とはするべきではないと思つがのう。」

「ええ、良く分かつております。」

「なら良いのじやがな。」

行き遅れたら野口君に貰つてもうらいましちょうか。

ガタン

ドアが開く。

「勇者!」

きたね・・・やつとだね・・・。

「カツヤ・」

会いたかったよ。

「ノグチ様入られます!」

カツ。

ブーツの音が響く。

チャリ。

剣の音がする。

赤いマントが左右に動く。

私達の前まで来た。

野口君が跪く。

「イスター様、グーラ様、シュタイン様。只今到着いたしました。

「勇者よ。姫はどうした?」

「只今着替えの最中との事です。先に初めていて下せることおひしゃつしていました。」

勇者か。

ふふつ。結構様になつているじゃないか。  
似合つてゐるよ野口君。

すぐに抱きついても良いのだけどね。

・・・おや?首にあるチヨーカーが・・・無い?  
・・・はずしてゐるのかな?それとも家にでも置いてきた・・・?  
いや、学校で会つた時には着けていた気がする。

野口君が顔を上げる。

びっくりしているね。

ふふつそうだらうそうだらう。

どうだい?似合つてゐるかな?

「・・・シユタイン様。こちらの方は?」

「俺の娘のミナミ・シユタインだ。ミナミ!」

ああ、初めて会つた振りをしたいのかな?

王様の手前騒ぎ出せないんだね。

「勇者様、お初お目にかかります。ミナミ・シユタインと申します。

笑顔が自然に出る。

「・・・ほあ・・・。」

王様とグラさんから声が聞こえましたね。  
ふふつ。野口君の顔も赤くなつてゐるね。  
これは・・・後でいじる楽しみが出来たね。

「・・・//ナミ様。少しお話があるのですが、よろしいですか？」  
手を差し出してくる。

「喜んで。勇者様。」

手を受け取る。

今いる、このひと時だけは、私の時間だ。

ノーラ姫など関係ない。お父様など関係ない。イスター・ナ国など関係ない。

私と野口君の時間だ。

誰にも邪魔はさせないよ。

第18話・再会（後書き）

第18話読んでいただき有難うござります。

第1-9話・雨模様。(前書き)

## 第1-9話・雨模様。

野口君に連れられて、窓の外へ出る。  
風が出てきたね……。

似合っているかい？野口君。

「ここまで来たのだよ。

遠く遠くの世界で、また出会つ。

ふふ・・・・じこの恋愛小説のようだね。

「ミナミ様はとても綺麗な髪をしていらっしゃるのですね。」

・・・ミナミ様？

「ひつたのだね？」

ここなら誰にも会話が聞こえないでしょう？

いや、どうしてもばれてはいけない理由が？

「ありがと」「ゼコムズ。勇者様。」

「一回見た時、私の心は奪われてしまったようです。」

・・・何かの暗喩？

野口君は私に何か分かつて欲しいのか？

「そこまでおっしゃってくれるのですか？嬉しい限りです。」

「誇張などでは無いのです。ミナミ様貴女はとても美しい。この国の誰よりも。」

「ありがとうございます。……野口君。」

これで・・・どうだね？

目を見開いているね。

「いえ、名前ではなく。前で・・・読んでは頂けませんか・・・

？」

・・・どうこう事だね？・・・？

小窓こ時から私はこの呼び方で呼んでいた。

今更・・・名前で呼べ・・・というのだろうか？

これにも意味が・・・？

「ええ・・・か・・・」

その時大きな声が部屋から聞こえてきた。

「王女ノーラ・イスター・ナ様！入られます！」

王女様が来たようだね。

会場から人の声が消えた。

さすが王女様だね。

皆、閉口してお辞儀でもしているのでしょうか。

大量の水が・・・流れで来た気がした。

・・・今のは・・・？

幻覚？

ここはおかしい。

何かがおかしい。

いや何かではない、全てが・・・おかしい？

「野口君・・・？」

野口君が壁にもたれている・・・？

どういう事だろう？

何故・・・そんなに苦しそうな顔をしているんだい？

「・・・う・・・頭が・・・」

「大丈夫かい？野口君？」

「・・・」

返事が無い？

・・・ 気絶 ・・・ ?

これは・・・ 一体何があつたというんだい・・・ ?

カツ

カツ

靴の音が聞こえる。

カツ

カツ

靴の音が近づいてくる。

カツ

・・・止まつたね・・・。

私の後ろにいる。

何だろうね・・・。

振り向いてはいけないという予感がひしひしとするよ。

「お久しぶりですね。南さん。1ヶ月ぶりでしたか？」

・・・ 良く聞いた事がある声だね・・・。

振り向く。

「初めまして。匕首がよろしかったかしりへ・ミナミ・ショ  
タイン様。」

「さつき久しぶりといつていたよ。ノーラ・イスター・ナお姫様。  
いや・・・絢子さん。一体全体どうしたのだい?絢子さんは少し茶  
色がかつたショートだつたはずだけども。その金髪は一体どうした  
のかな?エクステかな?カツラかな?」

「どういう事でしようか・・・。」

何故ここに絢子さんが?

いや・・・何故1ヶ月?私がこちらに来て・・・まだ10日も経つ  
ていなればずでは?

どういう事でしよう?

「いえいえ南さん。これが私の本当の髪型ですね。」

「そうなのかい・・・。絢子さんがそういうのなら本当なのだろう  
ね。」

「ええ。勿論。南さん・・・」  
「で話すのも・・・そうですね。外  
へ行きませんか?」

「いいのかい?絢子さんはお姫様なのだつへーにから外へ行くな  
ど出来るのかい?」

「ええ、皆様ぐつすりとお休みになつていらっしゃいます。南さん  
のお父様。トラビア・シコタイン様もぐつすりと。」

「そうなのかい。・・・一つだけ良いかい?」

「ええ、どうぞ。」

「野口君は・・・大丈夫なのかい?」

「ええ、勿論1時間もしない内に田を覚ますでしよう。」

・・・なら風邪は引かないかな・・・。

いや、野口君の事は後回しにしろ。

気にするのは田の前の事だ。

目的の変更。

この事態に対処しろ私。

頭を動かすんだ。

カツ

カツ

優雅に歩くね・・・絢子さん。

本当に君はお姫様だったのだね。

「もう一つだけ聞いても・・・良いかい?」

「絶対に答える訳ではありませんが。」

「野口君の記憶を消したのも絢子さんかい?」

「ああ、どうなのでしょうね?ふふつ。」

「答えているのと同義だね・・・。」

舌打ちしたくなる状況とはこの事だね・・・。

広い庭に出た。

ぽつ

ぽつ

雨が降つてきているね・・・。

野口君が消えた日も雨が降つている日。

お父さんとお母さんがいなくなつた日も雨・・・。

私は雨女のかな・・・?

「南さん、率直に言います。」

「何だい？」

「元の世界へ帰つて下さい。」

「野口君も一緒にならいつでも。帰る方法があるところのならだけ  
どもね。」

「それは出来ませんね。克也さんは・・・勇者様のですから。」

「災厄を打ち破るという勇者が野口君なのかい？」

「ええ。克也さんにはここに永久に居続けていてもらわなければい  
けないのです。」

「・・・そうかい。」

「そうです。」

「帰つてという事は帰る方法はあるのかい？」

「勿論。すぐにでも送つておしあげますよ。」

「では・・・直接的に聞かせてもらひつよ。絢子さん。」

手から火を出す。

絢子さんに向けて放つ。

ヒュン

当たるか？

大丈夫なはず。私の目線の方向へ動くものだ。

絢子さんに当たりそうになつたらずらせば良い。

・・・動かない？

「水よ。」

指を振る仕草・・・?

絢子さんの田の前に水の壁が出来上がる。

「ふふ・・・驚きました。南さんは火の術式使いでしたか。手を出  
すのが速いのですね。」

火が水の壁に当たった。  
水が爆発する。

ジユウ・・・・・ボン！

水飛沫がひどい。  
目の前が見えない。

「南さん。術式といつのは適当に使えば良いものではないのですよ  
？」

「御高説感謝だね。」

水飛沫が・・・蒸気へと変わっていく。

「・・・液体がなぜすぐに气体へ変わる。」「  
そこまで教えてあげる気はないわ。」

・・・これがイメージネーションの力というわけか。

水蒸気が辺り一面を覆う。

「・・・南さん？水蒸気爆発といつ言葉は知ってる？

「ああ・・・勿論だとも。」

火はもう使えないと・・・。

「どうしたの？ 鹿さん？ ふふつ。 どうやら火を出してかましませんよ？」

声が響く。

反響している？

いや・・・この水蒸気から出れば良い。  
出れば火も出せる。

女の子を殴るといつ事はしたくなかったけれども・・・。

走り出でた。

シユツ

音がした。

・・・飛んでる・・・？

え？

どうして？

ドサツ

地面に落ちた？  
視線が低い？

痛い。

痛い・・・。

動けない・・・？

手足が動かない？

「かはつ・・・。」

声が漏れた。

絢子さんが近づいてくる・・・。

動け。

動かないと。

「南さん、貴女が災厄の可能性があります。今すぐ元の世界へ帰つて下さい。」

「いや・・・だね。」

「そうですか・・・」

耳からイヤリングを取られる。

「これは、貴女にはもう必要ありません。」

「返し・・・たまえ。それは・・・私の・・・」

水が私を覆う。

タツ

足音がする。

「ノーラ！大丈夫か！？どうしたんだ！ドレスが水浸しじゃないか！」

野口君？

どうしてここに・・・？

”野口君！”

声が反響している？

「いえいえ、泥棒猫がいたもので追い払っていました。」

「どういうことだよノーラ。」

「お気になさらず。」

チリン

ノーラ姫の耳に金色のイヤリングが光る。

「ノーラ……？そのイヤリングは？」

「最近手に入れまして。似合っていますか？」

「ああ！良くなっています。」

「有難うござります。」

”野口君！それは……君が私に！”

「うるさい泥棒猫ですね……。むさと消えて下さい。」「ノーラ何を言っているんだ？」

「いえいえ、なんでもありませんよ。克也さん。」「そう……か。まあいいか風邪を引くぞノーラ。」「ええ、戻りましょう。」

水が光輝く。

ふふ・・・・・

記憶を消すことが出来る。

世界の移動も出来る。

私の姿も声も消す事が出来る。

全て……水に流す魔法という事かい……？

それに加えて王女という名声と美貌をもつていると……。

なんていう卑怯さ……だらうね……。

ゲームでやったラストボスですら……そんなに有能ではなかつた  
よ……

ふふ・・・

・・・私はまた一人になってしまったのか・・・。

どうこう事なんだい・・・。

神様。

彼方は・・・私に幸せになるなどおしゃつて居るですか・・・。

この世界で・・・生きて行く事になつても良い・・・と思えたばかりだつたのに・・・。

これは・・・あんまりでしょ・・・。

・・・野口君・・・

君は・・・うそつきだよ・・・。

薄れる雨模様の景色。

ぽつ

雨だけが泣いていた。

第19話・雨模様。（後書き）

第19話読んで頂きありがとうございます。

## 第20話・&quot;邂逅&quo t・思に出と共に5

・・・ろ・・・め・・・

く・・・・・・・め・・・

?・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?

絹子さんと会つたのは・・・いつの頃だつたかな。  
初めて話に出たのは・・・。

小学校の6年生の時。

「南ー南ーこの家すっげーでっけーよなー!」

「そうだね野口君。」

「ウルトラでっけー犬がいるんだぜ!」

「本当に野口君はウルトラが好きだね。」

「ウルトラって格好いいだろ!超の上つて感じがしてー!」

「・・・そうなのかい?」

「そりなんだよー!」

「そりなんだね。」

「南にはわつかんねーかなー!ウルトラつていつたらー”おといのー  
ろまんー”つてやつなんだつてさー!」

「・・・なんだいその男の浪漫とやらは・・・?私は女だからね。」

野口君はたまに不思議な発言が出る。  
どういう意味なのだろうね。

男子ならみんな分かるのかな?

「ウルトラというと3分で帰つてしまつ超人を思い出すよ。」

「3分で敵を倒すんだぜ！さいきょーじゃねーか！」

「……私なら3分あつたらお湯をいれているかもしれないね。」

「……ラーメンにか？」

「ああ、美味しいよ？」

「はあ……もういいよ……。」

ふふ、呆れた顔も可愛いね。

「なあなあ南。」

「どうしたんだい？野口君。」

「なんだとと思う？」

「……分からぬ……大方可愛い子を見つけた……とかかい？」

「自分で可愛いとかいうな！南とは違うんだなーこれが！俺のクラスに今日すっげー可愛い子が転校してきたんだよ！」

「そんなにかい？」

「ああ！すげー可愛いなー俺の隣の席なんだけど髪が長くて、さらさらで。」

「私も髪は伸びてきているけどね。」

「南より長いな！」

「そうなのかい。」

「目が大きくてー……。」

「力持ち……。」

「細くて……みんなが守りたくなる……。」

「力持ち……。」

「力持ちとか付け足すなよー可愛いなくなるだろうがー！」

「私よりも可愛いのかい？」

笑顔を野口君へ向ける。

「……う、あ、俺宿題がでてたんだった！」

「野口君？私より……。」

「やつベーやつベー！すげーこつペーでてるんだったわ！南じゃあまた明日な！」

「では、私が教えてあげよ。良いだろ？一緒にやつたほうが効率が良いじゃないか。一緒に行こうか？野口君。」「…………」

「何か蝶おうね？野口君？」

中学生になつた。

野口君が肩を貸されて足を引きずつて歩いている。

「どうしたのだい？野口君？」

「ああ・・・部活中に足ひねつちまつてな。」

「捻挫かい・・・捻挫は癖になるそだからきちんと治すのだよ？」

「あーあー分かつてる分かつてる。お前は俺の母ちゃんか。」「似たようなもの・・・ではないかい？」

「似てはいねーよ！」

「野口君・・・その人は誰？」

「髪が長い。目が大きくとても可愛い女の子。」

「ああ、俺の幼馴染の久坂 南。南って呼んでやつてくれー！」

「なんで野口君が私の呼び方を決めるのだい？」

「いいじやねーか！ケチつけんなよーー！」

「久坂・・・さんで良い？」

「南でいいよ。で、野口君？こいつは誰なのだい？」

「良いんじゃねーか！」

「あつごめんなさい。私は小林、小林 紗子です。」

「小林さんか。とても可愛い名前だね。」

「そ・・・そんな事ないですよーありきたりだと思いますし。あつ

私も紗子でいいよ。南ちゃん。」

「・・・南ちゃんと言わされたのは初めてだね・・・。中々新鮮だよ。

では、私は絢子さんと呼ばう。」

「南は男っぽかったからなあ！ 小さい時なんて！」

「つるさいよ。野口君。君は人の昔話を話したがりたいのかい？ では・・・私も野口君の昔話を野口君は小学校2年生まで・・・。

「こらあーーーーー！ それは言つなー！」

「妹ど・・・むぐむぐ。」

口を押さえないでくれないかな？

「2人共仲良いんだね。すゞく自然つていうのかな。」

「そうかもしれないね。小さな時から一緒だったからね。」

「腐れ縁というか幼馴染だな。家が隣なんだよ。」

「そりなんだ？ あれ？ けど同じ学校じゃないんだね。」

「学区が違うのだよ。道路を挟んで隣でね。」

「ああそりなんだ。じゃあ、私ともご近所さんなんだね。」

「そりなのかい？」

「あー南・・・前話したろ？ あのでつかい犬がいる家。」

「ああ・・・そんな話もしたね。そんな近所だったのかい・・・。」

絢子さん私も手伝おう。野口君も大きくなってきたからね。大変だつただろ？」

「うん、すっごく大変だつた。野口君結構重くて。」

「だから良いつていつたろマネージャー！」

「だつて家近くだし。」

「マネージャー？ おつと野口君、右腕をを上げてくれないか？」

「ああ・・・わりいな。陸上部のマネージャーなんだよ。」

「そりなのかい？ 陸上部のマネージャーというのはどういつた仕事があるのかは分からぬけど大変なのだろう？」

「つうん、そんな事ないよ。タイム計つたりドリンク配つたり。みんなのタオル洗つたり。

普段家で家事してるからそんなに大変じゃないかな？」

「私も家事をしているよ。一緒にだね。」

「じゃあ今度一緒に菓子でも作らない？」

「いいね、出来れば、チョコレートがいいかな。」「じゃあ俺たつべるかかりいーー！」

「働くがざる物食つべからずだよ？野口君。」

1歩ずつ歩く。

2人で肩を持たなくとも良いのだろうね。  
3人でその時は肩を並べて歩いていた。

「野口君。両手に華だね。」

「ぶつ！南！」

「み、南ちゃん！？」

「野口君？どうじて周りをキヨロキヨロと見ているんだい？」  
「いやいやいや・・・同じ学校の奴らがいねーかと・・・こんな所  
そういうえば見られたら・・・。」

「自慢するのだろう？「俺は一股しているんだぜーー」とみんなに  
自慢を・・・。」

「南ーーお前俺に彼女が出来なくてなつても良いのかよ！」「  
絶対に手に入らないものを欲しがつてもしようがないよ？」「  
絶対とかいうんぢやねえ！」「  
ほんとーに2人とも仲いいんだねー・・・。」「  
野口君？今手が胸にあたつたのだが？触りたいのかい？」「  
触つてねーよ！つーかあたるほどねーだろうが！」「  
・・・それとも死にたいのかい？」「  
なんだよその選択肢！理不尽すぎんだろ！」「  
あはは。2人共面白いんだねー。」

高校生になった。

「南ちゃんー一緒に高校だつたんだねー一緒にクラスかな？」「  
どうだろうね？今からクラス発表を見に行く所だよ。」

「やうなんだ・・・一緒に良いね。」

「そうだね。絢子さん・・・すゞく綺麗になつたんだね。」

「ええ・・・またまたあー！何をいいますか・・・南ちゃんもう『ぐく女の子』になつたね。その髪・・・受験の時大変だったでしょ？髪が長いと不利つて先生に聞いたし。」

「髪が長いと不利なのではないよ。その場凌ぎがいけないんだね。普段から髪を綺麗に手入れしてあつて、髪を染めていなくて、きちんと纏めてあれば不利なんて事は無いはずだよ。」

「えええ――！私受験の為にばつさり切っちゃつたのに――えええ・・・それを教えてよ・・・南ちゃん・・・。」「大学受験の時には安心だね。」

「先は長いよ・・・南ちゃん・・・。」

「3年なんてあつという間だよ・・・まあ入学したてで卒業の事はあまり考えたくないね。」

「そりだよー・・・ん？南ちゃん！イヤリングなんて学校にしてきちゃ駄目だよ！」

「髪できちんと隠れるから大丈夫だと思つよ。もし見つかつたとしても言い訳は考えてあるから大丈夫だね。」

「いやいや駄目でしょ！見つかつたら没収されちゃうよー？」

「野口君から貰つた大切なものだからね。ずっと・・・つけていたいんだ。」

「・・・・・・え？」

「南ちゃん。」

「なんかい？絢子さん。」

「私・・・野口君に告白するね。」

「やうかい。なぜ私に言つのだい？」

「・・・なんでだろうね・・・。自己満足・・・かな。」

「そうかい。」

「・・・」

「今日は静かなのだね野口君。」

「南・・・俺、マネージャー・・・いや絢子に告白された。

「良かつたじやないか。絢子さんは可愛いからね。」

「断つたんだ。」

「そうなのかい。」

「・・・何も聞かないんだな。」

「幼馴染だからね。」

「そう・・・だつたな。」

「そうだよ。」

「南さん・・・? 最近遅刻が多い気がするよ?」

「絢子さん・・・すまない。出来る限り少なくするよ。」

「そう。少なくしてね。」

「努力するよ。」

「どこかでずれたのだろうね。」

「何故・・・」うなつてしまつたのだろうね。

3人の幼馴染が世界を超えてまで・・・会うなんてね。

不便だね。

人間は不便だ。

動物と違つて欲求の赴くままに行動できないのだから。

? . . . . . . . . . . . . . . . . . . ?

† . . . . . . . . . . . . . . . . . . †

小さき黒姫、1日だけ待つてやう、ワシはお主が気に入った。  
の心根、どこまで折れずに進めるのか見物じゃのう。 . . 。  
”

† . . . . . . . . . . . . . . . . . . †

## 第20話・&quot;・邂逅&amp;quot;・思に出で共J5（後書き）

第20話読んで頂きありがとうございましたー。

これをもって第0章を終わりたいと思します。  
次は第1章の開始となります。

## 第1話

・・・なんでしょう・・・

すゞく長い夢を見ていたような気がする。

どうして、やう思つんだろう。

何故ここにいるのが分からぬ。

久は・・・私の居る所ではない。・・・そんな気分だった。

「う・・・眩しい・・・久は?」

保健室?

なんで保健室にいるのでしょうか?

授業中に貧血にでもなつてしまつたのでしょうか?

「久坂!」「南ちゃん!」

・・・うるさい。

なんだらう?

「久坂さん!・・・起きたのね・・・体は大丈夫?」

「どうしたんですか・・・?滝沢先生。それに・・・叔父さん?どうして学校に?」

・・・それと保健室の・・・名前が思い出せないね・・・保健室の救護の先生がいる。

「どうしてだと?おい久坂!野口と小林はどうした?」

「待つて下さい!滝沢先生!久坂さんは起きたばかりなのですよ!・?少し休ませる時間を・・・」

「待つてなどいられるか！生徒が3人も居なくなつたんだぞ！戻ってきた生徒がいるんだ！野口と小林がどこに行つたのか分かるかもしれないんだぞ！」

「ええ……分かつています。ですが……」

「南ちゃん……体は大丈夫かい？」

「はい……少しお腹が痛いのですが……その他は……」

「……なんですか。」

「この服は……一体なんなのですか？」

「叔父さん……」の服……ドレスでしようか……これは一体なんですか？」

「……南ちゃん？……落ち着いて話をしようつか。」

「はい、……分かりました。」

「……どうじう事でしようつか？」

私は授業中に倒れたのでは無かつたのでしょうか？

「南ちゃんは4日前の授業中、野口克也君の体が消えるのを見て駆け寄つた。

そして、野口君に触れた途端一人共一緒に消えてしまつた。そこまでは覚えている……かい？」

「……申し訳ありません。全く覚えていません。」

「……そうなのかい。その後、クラスが騒然となつていてる間にクラスメイトの小林絢子さんという子も消えていたと聞いた。そして……今日の2時間目の授業中に南ちゃんは野口君の机の傍に突然現れた。私も言つていて意味がわからなくなつてくるね……ああ……南ちゃん今は12時だよ。一通り話が終わつたら」飯でも食べにいこう。」

・・・何を言つてるのでしようか……理解が追いつきません。

「叔父さん一つだけ良いですか・・・？」

「ああ、大丈夫だよ。南ちゃん、一つだけといわすなんでも言ってくれ。」

「・・・野口克也さん・・・と小林絢子さんでしたか？」

「ああ、それがどうしたんだい？」

「”その一人は一体誰なのですか？”」

「え？ 野口君じゃないか。私の家にも一人で一緒に来ててくれたじゃないか。」

「・・・誰なのでしょう。・・・全く覚えが無いのです。」

「久坂！ 何を言つてはいる！ お前自身が言つていた事なのだろう！ お前と野口は幼馴染だと！」

「幼馴染・・・？ 私に幼馴染？ 小さな時からずっと一緒にだったのですか・・・？」

「・・・滝沢先生。吉川さん。少しよろしいですか？」

「3人ともどこかへ行つてしまつた。」

「何なのだろう・・・？」

「私に幼馴染？」

右耳を触る。

不思議な感覚・・・。

なんだらう？

いつもあるものが無い。

そんな感覚。

右耳？

耳に何か付けていた事はあつたかな……？

「南ちゃん。」

「はい、なんでしょうか？」

「野口克也君。小林絢子さん。」の一人の名前には本当に覚えがないんだね？」

「・・・はい。一人の名前も顔も身に覚えが無いです。」

「そうかい・・・。滝沢先生、嘘は言つていないと 思います。南ち

やんが野口君の事を隠す理由が・・・。」

「・・・くそっ！久坂・・・思い出したらすぐに言つてに来るんだぞ。

「はい・・・分かりました。」

「先生方、今日は南ちゃんを帰らせてもよろしいですか？家でゆつ  
くつと休ませてあげたいのです。病院へは明日朝一で連れていきま  
すので。」

「・・・すぐのほうがいいかもしませんが・・・見た限りは応対  
もしつかりとしています。身体を見る限りも腹部の打撲程度でした。  
1日寝ていれば痛みも治まるでしょう。けれども、朝すぐに病院へ  
連れて行つてあげてください。」

「はい、分かりました。南ちゃん・・・立てるかい？」

「はい、大丈夫です。先生方・・・話を聞く限りは3年生のこの時  
期に大変迷惑な事をしてしまつたようですね・・・。申し訳ありません  
ん。」

「・・・ふう。まったくだ。どういった事態なのかも分からん。教  
師を始めてこんな事が起こつた事など・・・。前代未聞だ。」

「すいません・・・。」

ドレス姿で歩く。

今はお昼休みですね。

みんなこちらを見ている。

それはそうでしょうね。

こんな格好をして歩いていては。

「久坂さん！・・・大丈夫？」

クラスメイトの女の子達だ。

「身体は・・・大丈夫だね。頭も・・・変な所は無いと思う。」

「そつか・・・良かつた。いっぱい聞きたい事あるんだけど、明日

学校はくる？」

「朝、病院へ行つた後、授業をうけにくるかな。」

「そつか・・・分かつた。明日聞く事にするね。」

・・・何を答えれば良いのでしょうか。

これは・・・私は記憶喪失というのでしょうか・・・。

みんなが知っている事を知らない。

不安になりますね・・・

「・・・ふう。」

動搖はしてはいけない。

心を落ち着けて。

今の私に何が足りないのか。

足りないモノは・・・何なのか。

大切なモノなのか。

・・・それとも大切では・・・ないモノなのか。

・・・甘い物が食べたいです。

何でしょう。

無性にチョコレートが食べたい気分です。

ずっと食べていなかつたような。

感覚では昨日食べた感じなのですが・・・。

ずっと食べる事が出来なかつた・・・そんな感じです。

「南ちゃん? 何か食べたいものはあるかい?」

「チョコレートが食べたいですね。」

「やうかい。『ハビ』のやういかい?」

「ええ。何でも構いません。」

まづは・・・チョコレートを食べる事を第一としましようか。

「いや、もやもや」とした感覚を払拭出来れば良いのですが。

## 第1話（後書き）

第1話読んでいただきありがとうございました。



叔父さんの車へ向かう。

「南ちゃん！」

呼ばれた？

「克也はー克也はどうしたのーー？」

「野口さん……むすめの事を話に行ひと迷っていた所でした。」

「雪ちゃん……」

野口 雪さん。

野口 桜さんの親御さんです。

私の家の隣さん。

「すいません……雪さん。克也君とこう方を私は……。」

「……説明は私からしよう。」

二人は離れていく。

本当に……私は……何か大切な事を忘れている?

本当に大事な事なのだろうか?

大事では……無いから忘れているのでは?

「……南ちゃん……克也の事……本当に覚えていないの?」

「……はい。雪ちゃんの事は覚えています。桜ちゃんは元気ですか？」

「……なんで桜の事は……私の事は覚えていてー克也の事は覚えていないのーあんなに仲が良かつたじやないー毎日のよつと一緒にーうう……。」

「・・・すいません。」「

何ででしょうね・・・。

会う人みんなが何故忘れているのかを聞いています。  
そんなに・・・私は・・・その人の事を知っていたのでしょうか。

「・・・南ちゃん。」このチョーカーは・・・覚えてる?

「・・・なんでしょうこれは?」

「克也が南ちゃんから貰つた物だつて喜んでいたのよ。・・・学校  
の椅子に落ちていたのを私が預かつたの。」

「私があげた・・・?」

「そう。南ちゃんがあげたの。」

「そうなのですか。」

「・・・南ちゃんに渡しておくわ。」

「何故ですか?それは克也さんへの手がかりでは・・・?」

「・・・克也さん。南ちゃんが・・・そんな言い方をしたのは始め  
て聞いたわ。」

「そうなのですか。」

「つうん。いいの。南ちゃんが持つていて。もしかしたら・・・思  
い出すかもしないじゃない。」

「・・・はい。」

チョーカーを受け取る。

石が綺麗だね。

・・・眩暈がした。

・・・・・・・・・・・・

「 勇者を殺す事になるかもしれんぞ？」

「 ……ええ。 覚悟の上です。」

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

今のは・・・なんだろ？ね・・・。

勇者？ そんなものが居るわけが無いでしょ。

「 「 南ちゃん！」」

「 はい・・・。 大丈夫です。 すいません眩暈が・・・。」

「 そう・・・・・ びっくりしたわ。 それを渡した途端に顔が真っ青にな  
るんだもの・・・ 思い出したのかと思つたわ。」

「 ・・・・ すいません。 雪さん。 今度ゆっくりお話しに行きますね。  
「 ・・・・ そうね。 話を聞いた限りだと・・・ 南ちゃんは克也を助け  
よつとしてくれたみたいだもんね。 ・・・ お礼は言つても責めたり  
は出来ないわ。 またご飯食べに来て、 桜も楽しみにしているわ。」

「 はい。 私も楽しみです。 桜ちゃんは可愛いですから。」

寂しい空気が・・・ 流れた気がした。

多分、私はもう雪さんの家へは行けないのでしょう。

・・・・・の克也さんの事を思い出せない限り。

・・・ 誰かに見られた気がした。  
後ろを振り返る。  
誰も居ない。

・・・ 気のせいでしたか。

叔父さんの車に乗る。

「これから私の家へ向かうからね。身体は大丈夫かい？」

「ええ・・・分かりました。あ、叔父さん、着替えたいので一度家へ行つて貰えますか？」

「そういえば制服はどこへいつてしまつたのだろうね。

確かスカートは替えがあつたはずだね。

ブレザーは・・・しょうがないね・・・。家に無かつたら買い直しかな。

途中で「ンビーに寄りチョコレートを買つてから家へ向かう。

「なんでしょうね。すごく・・・久しぶりな気がします。」

「・・・そういうものなのかもね。南ちゃん、付いていつたほうがいいかい？」

「いえ、大丈夫です。着替えてすぐ戻りますから。」

・・・このドレスといつのは脱ぎにくいのだね。

「ニームとジャケットに袖を通す。

鏡台に手を伸ばす。

・・・何を取りうとしたのかな？

・・・無意識で手が動いた？

・・・本当におかしいね。

胸騒ぎばかり起きる。

早く思い出せ。と、わんばかりだね・・・。

・・・そんなに克也さんという人の事は思い出さなければいけない事なのかな?

机に向かつて歩く。

引き出しを開ける。

箱がある。

これを・・・開けていいのだろうか?

これを開けではない気がする。

これを開けたら・・・駄目な気がする。

・・・箱を手にとり・・・鞄へ入れる。

・・・いつからこんなに臆病になつたのだろうね。

「叔父さん。すいませんお待たせしました。」

「待つてなんていないよ。行こうか。」

「はい。・・・いってきます。」

家へ挨拶をする。

誰も居ない家に向かつて。

「南ちゃんが来るとなると娘も喜ぶな。」

「そうなのですか？」

「いつも南ちゃんが来る時はおねえちゃんがくるのー?って喜んでたよ。」

「今日はいっぱいお話が出来そうですね。」

「娘の相手も大変だと思うけど、無理はしないんだよ?」

「ええ、大丈夫です。無理なんてしてません。葵ちゃんは可愛いですしね。」

「・・・そういうえば高校あがる時、私の家に来ることになっていたのは覚えていいかい?」

「はい。あの時は・・・」

頭痛がする・・・。

”一生の願いだ！”

「一生の・・・お願いを・・・」

”行くな！”

「・・・お願いを聞いて・・・」

”行かないで・・・くれ。”

「・・・泣くほどの事・・・なのかい。」

「・・・南ちゃん!..?どうしたんだい?涙が・・・。」

「・・・どうしたのでしょうかうね・・・。」

涙が出てた・・・?

どうしてなのでしょう。

とても・・・大切な事。

とても・・・忘れてはいけない事。

「・・・大丈夫です叔父さん。行きましょう。」

「・・・そうかい。」

† .

「・・・黒姫、お主の思いはその程度のものか?記憶を消された程度、自力で乗り越えてみるのじやな。その時は・・・手を貸してやらんでもない。一日の内に思いだせんような思いならば、全て忘れこの世を楽しめ。その時は一思いに・・・忘れさせてやれつ。」

† . . . . . . . . . .

## 第2話（後書き）

第2話読んで頂もありがとうござります。

景色が流れていぐ。

「南ちゃん、娘の相手も良いけど、夕飯が終わつた後にでもどうだい？」

「・・・叔父さん・・・今田はどうしましょつか・・・」

「ああ、身体が疲れてそつなら良いんだがね。見た限りそんな感じもしなかつたからね。」

「大丈夫ですね。頭も動かしたいですし良いですよ。」

気遣つてくれてているのでしょうか。

いきなり泣き出した私を普段のペースに戻そうとしてくれているのでしょうか。

チョコレートを食べる。

甘いね。

とつても甘い。

ビターなのは私はあまり好きじゃない。  
美味しいといえば美味しいのだけどね。

「・・・・・・・・野口・・・君ですか。」

「え？ 南ちゃん！？ 思い出したのかい！？」

「いえ、違います。」

「そ、そうかい。・・・野口君は良い子だったよ。」

「・・・皆、心配していますしね。とても良い人だったのでしょうか。」

「私は何回か会つた時がないからなんとも言えないが誠実そうだつ

たね。裏切るなんてしなさそうな子だったよ。」「

チヨーカーの石を転がす。

・・・これを私が作つた。

・・・私が男の子に物をあげたと。

あり得ない事だね。

石が光つた気がした。

そんな気がした。

光の反射でしょう。

ばかばかしい。

ばかばかしいです。

・・・非科学的ですよ。

「・・・叔父さん少しお父さんとお母さんの所へ行って頂けませんか?」

「良いよ。どうせ通り道だ。」

「ありがとうございます。」

墓地へ入つていぐ。

「あ、お花・・・忘れてしましたね。」

「今度買って来てあげよう。今日は突然の事だつたしね。鞄は置いていかないのかい?結構大きい荷物だろう?」

「ええ。勇気をもらいに行くのです。一人では・・・私は何も出来ない子なので。」

「はつはつは。そんな事はないだらう、私も手伝つてはいたけど家事は出来ていたじゃないか。」

「ええ、そうですね。家事は出来ていました。」

それ以外の事は出来ていたのでしょうか。

ずっと、誰かが傍に居てくれた気がします。

思い出せ。  
思い出せ。  
思い出せ。

小学生の時。

お母さんが死んでしまった時。  
一人で庭に行つた。  
”誰か”と話した。  
”誰か”が背中を押してくれた。

中学生の時。

”誰か”に初めてのチョコレートを渡した。  
”誰か”から初めてプレゼントを貰つた。  
お父さんが死んでしまった。  
”誰か”は最後には一緒に居てくれた。

高校生になつたら。

”誰か”といつも一緒に家へ帰つた。  
”誰か”が守つてくれた。  
”誰か”に私がプレゼントあげた。

・・・顔も思い出せない。

これも私の記憶なのか分かりません。  
私は良く夢を見ます。  
・・・これが夢の中の出来事なのか、本当の出来事なのか分かりません。

お墓に水をかける。

「お父さん、お母さん。お久しぶりです。

毎日は中々来れなくてごめんなさい。

今日はどうしても、胸のもやもやが取れなくて来てしました。

私は、どうしたら良いのでしょうか。」

鞄から箱を取り出す。

「これを開けたほうが良いと思いますか？」

「南ちゃん・・・？これは？」

「私の大切な物だと思うのです。不思議と机に引き寄せられた気がして、開けたらこれが一番上に入つてました。」

「その他に家の中で覚えていないものはあつた？」

「無いです。」

「・・・そうか。」

これ以外記憶に無いものなど無かつたのです。

私は今は一人暮らしをしています。

どこになにがあるか分からぬで一人暮らしなど出来ないのですから。

この箱だけは見覚えが無いのです。

けれどもその他の机の中の物は全て見覚えがあるといつ。

「お父さん、お母さん。私は、野口克也君という人を思い出したほうが良いのでしょうか？」

・・・返事はあるわけがありません。

ビュッ

風が吹いた。

前を見続ける。

「ありがとうございます。お父さん、お母さん。」

お辞儀をする。

箱を開ける。

「みなみちや・・・」

何も言わせません。

私自身が決めたのです。

壊れたイヤリングが一つ。

・・・また視線がします。

触れ。という事でしょうね。

誰だかわかりませんが、ヒントを出さないで下さい。

ゆっくりと・・・

イヤリングへ触れる。

ドバッ

私の手の平から水が出てくる。

「南ちゃんー?なんかいそれはー?」

「大丈夫です。落ち着いてください。・・・見えるのですか?」「そんな状態で何を言っているんだいー?」

手から水が零れ落ちてゆき・・・そして止まる。

手を振る。

ピッ

水が飛ぶ。

「お父さん。お母さん。有難うござります。背中を押して頂きました。」

・・・絹子や・・・いや、”小林さん”。舐めた真似をしてくれたね。

こちらに帰つて来てから記憶を取り戻せるようにしたのかな?。忘れさせるならば完全に忘れさせるはずだ。

このよくな中途半端な魔法。

思い出させて・・・逆に苦痛をといった所かい?

「ふ・・・ふ・・・ふふふ・・・。」

舐めないでもらいたいね小林さん。

さて、私を見ている人は・・・当たりかな?はずれかな?  
多分ですけど・・・当たりでしょう。

「み、南ちゃん!..?どういう事なんだい?」

「その前に、叔父さん。少し離れて居て下さい。」

「え、え?どういう事だい?」

「離れてください。」

「分かったよ・・・。これぐらいで良いかい?」

「火よ。」

ボツ

音が響いた。

「み、南ちゃん何がどうなつ・・・」  
「隠れているのは止めて出てきてはどうですか?先ほどから視線ばかりこちりへ向けて。私にヒントを『』えていつもりですか?」

ガサツ

「ほっ・・・いつからじや?」  
「学校を出る時からです。ルーク・シュタインさん」「よくワシじやと分かつたな。」「よく言こますよ。あんな子供、貴族でもおかしいでしょ?貴方が300年生きた化け物爺といつわけですね。」「誇張があるがのつ。それであつとるわ。」

「・・・貴方は世界の移動が出来るのですか?」「出来ると答えたら?」  
「私をもう一度、野口君の所へ送つて下せ。」「お主が殺す事になつてもか?小さき黒姫。」「ええ、どうせ災厄に殺される可能性があるのでしょ?それだったら、私が殺して一緒に死んで見せましょ。」「お主が災厄の可能性もあるのじやがな。」「無いですね。私のこの力である國を壊滅させる。無理でしょ。仲間がいるならまだしも。」「お主の目的は?」「野口君の回収です。殴つて蹴つて、最後に抱きしめて。それで終

わりです。」

「行きのみの片道券じや。」

「ええ、それで結構。」

「即答・・・。わっはっはっはーたすがは黒姫といつだけあるの。」

「

「・・・南ちゃん・・・？ その人は一体？」

「叔父さん、申し訳ありません。葵ちゃんにはまた会えなくなりそうですね。」

「どうこう・・・。」

「先生方には、野口君と、絢子・・・いや小林さんを連れ帰つてみると、そいつはえてください。」

「・・・また居なくなるのかい？」

「はい。」

「絶対にかい？」

「はい。」

「そんなに野口君は大事なのかい？」

「はい。」

「ただの幼馴染なのだろう？」

「は・・・いいえ。ただのではありません。」

「はあ・・・南ちゃんは昔から言い出したら聞かないからね・・・。」

「駄目だといつたら？」

「行くだけです。」

「さつき片道だと行つていたけど？」

「絶対に帰つてきます。」

「そりか・・・。南ちゃんは冗談は言つけど嘘は言わないからね・・・。」

・・すぐに行けるものなのですか？ ルークさん。」

「すぐに行けるの。必要なものは、この本ぐらじじや。」

「南ひやん……ひよつと待つてくれるかい？」

「はい。」

車まで走つていつてしまつた。

「はあ……はあ……私も歳をとつたな。南ひやん……これ。」

「マグネット式の碁盤……？」

「異世界で暇な時もあるだひつっ。」

「……ありがとうございます。」

「では、行くかのひ、黒姫。ワシに近づけ。」

「これぐらこですか？」

「遠じのひ。これぐらこじじ。」

ギュッ

「お爺せん、ボケてると困るのですが？」

「黒姫。おぬしは良い匂いがするのひ。」

「離れてくだわこ口口爺。」

「つまりんのひ。」

リング状の物体がぐるぐると私達の周辺を回る。

「これが貴方の魔法ですか。時遣い。」

「魔法ではなく、術式じや。」

「そうですか。……叔父さん。すいません。」

お父せん、お母せん。親不孝な娘でごめんなさい。お墓参りにはもう来れないかもしれません。

ですが……引いてはいけない時があると想ひのですよ。

さあ、小林さん。

小林さんと、イスター・ナ皇国全員の思いと。

私一人の思い。

どつちの思いが強いか勝負と行こうじゃないか。

野口君、幼馴染は終わりだ。

私はもう逃げないよ。

幼馴染だなんて言つて逃げないよ。

君は逃げないでくれるかな？

”・・・好きだよ。野口君。”

### 第3話（後書き）

第3話読んで頂もありがとうござります。

暗い。

真っ暗です。

「手を離すのではなーござ。黒姫。」

「離したら?」

「簡単じゃな。死ぬだけじゃ。や。」

・・・こんな所で死んでしまったひ最悪ですね。  
ざわつかと握りなおす。

「黒姫。少し汗ばんでおるぞ? 焦つておるのか?」

「せうこつのは言わないでもいいのですよ~お爺さん。」  
指を絡めてくる。

工口爺・・・。

ふう・・・なんで言つてしまつのでしょうか。

私のスタイルは冷静沈着なのですよ。

・・・南はあんまり冷静じやないよな・・・とか野口君の声が聞こ  
えてきた気がします。

いいです。

いいんですよ。

最近の流行りは冷静な無口つ子だと聞きました。

クラスの男の子達が言つていたのですから間違いありません。

これは私の時代が・・・。

・・・南つてあんまり無口でもないよな・・・とか・・・言われ  
そづですね。

私の頭の中の野口痴ねがこれですね。

「何を笑つておるのじゃ？」

「いえなんでもありませんよ。」

「少し時間がかかる。聞きたい事があるなら今の内に答えてやる。」

「聞きたい事は3つです。」

「ほお・・・少ないのじゃな。」

「はい。それだけで十分です。」

「なんじゃ？」

「1つ目は野口君はまだ無事ですか？」

「無事じゃな。後1年もしない内にノーラ姫と結婚してしまったじゃろうがな。」

「そうですか。では2つ目、記憶の戻る方法は？」

「お主が体験した事じやろう？勇者の記憶を戻したいのならば、感情を高ぶらせ、そのチヨーカーとやらを着けさせればいいじゃろう。」

「これをつけられると。」

「そうじやな。お主の記憶が一番濃く残つておるのじゃろう。じゃから・・・それをこちらの世界へは持つてこさせなかつた。ノーラ姫も狡猾じやのう。」

「・・・野口君の媒体は・・・これではないのですか？」

「私はイヤリング。野口君はチヨーカーだと思ったのですが。」

「そうじやな。あやつの媒体は靴じや。」

「・・・ああ・・・そうですか。陸上部で使つていたバイク。それがありましたね。」

野口君は大切に使つていたようでしたから。

だから・・・私の記憶を消す事が出来た・・・というわけですか。

記憶を消す前提条件は、その人に関する物を持つていないと  
事ですかね。

「こう事は、お父様、マールさん辺りは・・・確實に忘れていると

思つたほうが良いのでしょうか。制服辺りがお父様の近くにあれば  
・・嫌です。想像して気持ち悪かったです。

エルさんは大丈夫ですね。  
私の制服が近くにある。

この魔法・・・いえ術でしたか？術の範囲がどれぐらいの物か分から  
りませんが、馬車で5日、1日40～50kmと考えて200km。  
それ程あると思えません。

それに加えて、制服やら下着やらがあるの家には・・・嫌です。想像  
してしまいました。

変態な行動はしないでくださいよ・・・。

「3つ目はどうしたのじや？」

「ええ、この術は誰にでも使えるのか。それと代償を教えてください。

「使えん。ワシは特別じやな。ノーラ姫は幼少の時に儀式で覚えた  
のじやるづ。

「儀式ですか。」

という事は私が覚えるのは不可能と。

「代償は寿命じやな。自分自身の移動にはつかわれん。じやが他人  
を移動させる。となると話は別じや1回にあたり10年といったと  
ころかのう。」

・・・重い。

「それ程この国を守る為に必要な事だったと。」

「そうじや。勇者というものはそれ程大事な欠片となるのじやな。」

「代償が命という事は・・・時遣い。貴方は何度も移動出来るので  
すね。」

「そうじや。」

「片道を往復へはしてくれないのは何故ですか？」

「4つになつておるぞ黒姫。」

「良いじゃないですか。けちけちしないでください。」

「ワシはお主が気に入つた。ただ、それだけの理由で送つてやるのじゃ。

帰りなぞ知らん。お主自身が帰りたいのならば自分でなんとかせい。  
ああ・・・お主が身体をワシに永久に差し出すところのならば、勇者だけは帰してやつてもよいぞ?本当に永久じや、若こまま朽ち果てる事もなく、死ぬといつ事もなくじや。」

・・・最終手段でしようね。

嫌です・・・ですが、背に腹は代えられないでしょう。

ぞくつ  
鳥肌がたつた。

「何をしているのですか?」

「けちけちするなどといったのはお主じやりひへ減るものじやあるまいしけぢけぢするな。」

「減りますよ。触らないで頂けますか?」

「手は離せない。尻は触るな。なんともまあわがままなやつじやのう。」

「このセクハラ爺・・・。」

この移動が終わつたら即殴り飛ばしてさしあげましようか。

「ふおふおふおつ、爺になると物覚えが悪くなつてのう・・・。」

「見た目10歳の300歳超えのお爺さんですか・・・。面倒なのに捕まつてしまつたようですね・・・。」

野口君と会つ為だ。

我慢をする。

我慢をする。

「ほれっ。」

「触るな爺。」

殴ってしまった。

「手を繋いでおったのを忘れておったわ・・・逃げ切れんかったのつ・・・。」

「もうボケたのですか? いえ、ずっとボケ続けているのでしょうかね。」

「黒姫。お主は本当に面白いのつ。」

「私は面白くないです。」

・・・野口君。もつ一度、会こにこくよ。

今度は・・・私の全てをベットしよつ。

野口君は・・・私に賭けてくれるかな?

大穴だよ?ふふつ。

## 第4話（後書き）

第4話読んで頂きありがとうございました。

真つ暗な空間に明かりが出てくる。

「あれが出口ですか？」

「やうじやな。黒姫。」

・・・戻ってきたのだね。

小林さんは悪い事をしたと思う。

命を削つてまでの決意を穢したのでしょうか。

・・・それはそちらの都合だけどもね。  
その都合は私には到底許せないよ。

トッ

土の地面に降り立つ。

「ユリは・・・どうですか？」

「ワシの本当の家じやな。外で話すのも拙い。中へ行くぞ。」

「ウッドハウスですか・・・確かに他の街は石の家ばかりだったのに。こりは日本風なのですね。」

「歴史食に一居るのじゅう。密入じゅ茶ぐらこだせ。」

・・・れきしへい?名前でしょつか?

「・・・はい。」

「それはお主の飲みかけじゅうひ・・・・本ばかり読んで、たまには身体を動かせ。」

「・・・はい。」

「なんでしょ。本のタワーが・・・

本が・・・沢山ありますね。

小さな女の子が出てきました。

「時遣い。この子は?れきしへいこという名前なのですか?」

「この子が本当のルーク・シュタインじゅな。」

・・・どうこう事なのでしょ。」

「ルーク・シュタインは元は妾の子じゅ。5つの時、親が倒れてしまったのを切欠にシュタイン家の長女として入る予定じゅつた。」「どうしてここに?・・・時遣い・・・もしかして貴方・・・幼女しゅ・・・。」

「そんな訳があるか。こやつには特殊な術式があつてのう。ワシとの相性が良いのじゅ。」

「わういえば、術式とはなんですか?」

「・・・トライアからは何も聞いておらんのか?あやつ・・・あの歳になつても説明を省くのじゅな・・・。」

「ええ。お父様からは何も・・・いえ士の力がある事だけは。魔法ではなく術式。」

「この術は誰にでも使えるところのは分かるか?」

「ええ。何か媒体を使ってといふのでしょ?」

「そうじゅな。媒体じゅな。ワシはこの本じゅな。」

「大切に使つてきた物がその術式の媒体となる。それしか聞いていませんね。」

「あやつ・・・小さい時から話を省く癖があつたが・・・術式とは4元素でなりたつておる。」

4元素・・・。

今の所見知つたのは・・・

「まず、”火”。黒姫お主の力じやな。源はそのイヤリングといつたところか？」

私のですね。

「その次に”水”。ノーラ姫のような力じやな。あやつの源は指輪じや。それ以外に増幅しておるものがありそづじやがな。」

小林さんですか。

「そして”土”。」

「お父様のですね。確か剣でしたか。」

「そうじやな。そして最後、”風”じや。これは今代の勇者の特徴じやな。」

・・・野口君は風だつたのですね。

「IJの属性とやらは・・・。」

「まあ待て。この4元素には他に力がある。火は力。風は速。土は守。そして水は五感を。

この4元素をもつとる者に与えられる能力じや。

これを”Hレメンタル・パラメーター”といつのじや。」

・・・いきなりRPGぽくなりましたね。

「その属性とやらは、どうやつて決まるのですか。」

「産まれた瞬間じや。体内で渦巻く力が体現して現れる。自然現象なのじやよ。お主達の世界では無いようじやがな。これは自然現象であり、異常現象などではない。」

「・・・私や小林さんは媒体を通して居ない気がします。お父様は言つていましたよ。媒体を通さない限りこの術式は使えないと。」

「想像力の問題じゃ。この術式に必要な物は心底大事にした物体一  
つ。それと自力の想像力。対価は身体的な疲れのみ。」

・・・あ、なるほど。

「こちらの世界にはテレビやラジ。ゲームや漫画といったものが無い  
のですから。手の平から火や水が飛び出してくるのなど想像出来ないという訳で  
すか。

「確実に媒体は通している。全ての人間が手や足、身体全体から出  
せるのじゃ。それに伴う想像力がないというだけじゃな。」

「ああ・・・分かりました。体内から出した”形の無い何か”を剣  
や装飾品を通して増幅。そして形にする。

剣や装飾品からでは無いという事ですね。」

「そうじや。お主は理解が早くて良いのう。昔の軍人連中に講師を  
した時は・・・。」

大変でしうね・・・。この概念を理解をせるのは大変でしう。  
ある程度ゲームや漫画で触れているからこそ・・・理解出来るので  
しょう。

「・・・はい。お姉ちゃん。お爺ちゃん。」

「ふ。お爺ちやんですか。見た目は若くて頭脳はお爺ちや。その名  
もー。」

「うむわい奴じやのう。」

「・・・名前はなんていうんですか?」

完璧に忘れていました。

「名前などすてた。名を呼びたければ、そうじやのう。タイムとで  
も呼べばいいじやう?」

「時遣いでTiemですか。良いんじやないですか。そういうのは  
嫌いじやないですよ。」

・・・お茶が美味しいです。

・・・あれ？

「何故、緑茶が？」

「ワシが持つてきてるからこきまつといひへ。」

「あー、コーヒーとチヨコレート……！」

「・・・黒姫・・・キャラ崩壊してあるぞ・・・お主・・・冷静なのが売りだつたのではなかつたのか・・・？」

「・・・チヨコレートを完全に忘れていました・・・。また食べれない日が続くのでしょうかね・・・。」

「金はあるのか？」

「叔父さんから貰つてください。」

「あやつか。月に一度ならば構わないじやねん。ワシも買い物に行くからね。」

・・・叔父さんごめんなさい。

迷惑ばっかりかけてしまつて。

ですが、これは譲れない事です。  
心身安定の為に必要なものです。

・・・まあいいですかね。

どうせ私が居なくなつたのならば大量のお金は叔父さんの物となるのです。

少しごらりこ出してもらいましょう。

## 第5話（後書き）

第5話読んでいただき有難い「J」ありがとうございます。

「・・・で？時遣い、貴方の術式は？」

「唐突に話を戻したのう。ワシ自身は水じゃな。姿を変えて見せる事が出来るのじゃな。」

「どういう事でしょうね。」

それで移動が出来るのでしたら、水を扱える人ならば全て世界移動が出来る事になるのでは？

「ワシは300歳などではない。まだ113歳じゃ・・・な。多分そのぐらいじやのう。」

「成る程、噂とは尾ひれがつくものですからね。ですが、それはまだという歳ではありませんよ。その姿を維持している理由は、その本ですか？」

「違うのう。これは水の術式使用の為じや。姿を変えたりするのに役立つからなのう。」

時の術式とは、ただの受け継がれし能力じやな。お姫さんの儀式と同じ物じや。」「

・・・成る程。

「一代に一人限りといった所ですか？いや・・・違いますね。死んだ時に受け継がれる。そんな所ですか。」

「・・・ほう・・・何故ワシが死ぬと分かつた？時を操るといえれば死なないという風に想像するものじやがな。」

「この術式は意識化でしか発動しないと予想したからです。それに加えて300年という噂も嘘ではないのでしょうか？貴方のお父さん、お母さん誰かは知りませんが、その人が死んだから貴方が時遣いとでもなつたのでしょうか？」

「そうじやのう。首を撥ねられたらワシも死ぬ。即死でなければ戻す事が出来る。ただそれだけじや。その時にこの因果を渡し、死ぬ。」

次は誰に渡るかのつ。」「

そうですか。

「では、早くその姿を元に戻して頂けませんか？タイムさん。」

「その前に、歴史食い。これを直すのじや。」

「・・・めんどう。」

「直せ。」

「・・・はい。」

手に持っていたイヤリングを取られた。

手元が光っている。

「ずっと手に持っているわけにはいかんじやうひへ。」

「・・・直せるのですか？」

「物体に関しては、あやつが最善じやな。」

「・・・はい。お姉ちゃん。」「

・・・私が着けていた物と同一だね・・・。

壊れてしまつた所が分からぬぐらいだね。

「どういう事ですか？これも術式？」

「壊してしまつたという歴史を食つたのじやよ。」

・・・成る程そうですか・・・。対人物に関しては時遺いが物体に  
関しては歴史食いが。

とてつもなく便利ですね・・・。

「これは・・・相性が良いといったところではありますね・・・。

「

「歴史食いはまつたくの特異性じやな。何があつたのかは知らん。ワシも100年生きてきてこのような奴は見た事がないのじやから。」

「

「媒体などは無いのですか?」

「無い。増幅器などいらないといった所かのう。」

「また卑怯なのが現れましたね・・・。」

まあ良いです。

左耳につける。

チリン。

懐かしいね・・・。

「タイムさん。えっと・・・ルークちゃんで良いかな?ありがとうございます。」  
「これは大切な物だから・・・直してくれて助かったよ。」

「・・・どういたしまして。お爺ちゃん、戻る。」

タイムさんが頷き、ルークちゃんが本の山に戻る。

「良いのですか?」

「これからのお話にあやつは関係ないからね。あやつは浴槽から離

れたのじゃ。これ以上お主には関わらせん。」

「そうですか・・・可愛かったのですけどね。」

水が・・・。

・・・水がタイムさんの周りに集まっています。

これが姿変えの術式といった所でしょつか。

「これで良いかのう・・・?久しぶりじや。本来の姿に戻る事などあまり無いからね。」

・・・どうこうした事でしょつか？

15歳ぐらいの見た目。それは良いです。  
老いなどほほ無いのでしょうか。

「タイムセラ。・・・何故？」

「君の”黒髪”か？」

「・・・やうです。」

「100年前いや正確には98年前じやつたか。その時の勇者がワシじや。」

「死んだと聞きましたが？・・・いや違いました。剣を杖に・・・

「あやつを消した後、その時の能力がある事に気づいた。」  
あやつとは・・・災厄の事でしょうか？

「君の能力を持つた時に、ワシは縋り付いた。今ではその時死んで  
いればと思わない事も無いのじやがな。」

「・・・永遠に近い命とこのまじめなのでしょうね。」

「良い事ばかりでは無ことだけいつておいつかの。」

「やうですか。」

「ワシはすべに元の世界に戻る為、壊滅した国の地下へ行った。」

「呑還した人は？」

「死んでいたのう。自害じやつたよ。首に剣を当て、次の勇者など呼ばせないとだけ血で書かれておつたのう。」

「そうですか。」

「ワシはその時に移動の力を得た。それだけじゃ。ヒルニアール帝国はそれ以降、勇者を呼べていない。今は・・・名前が違つたかのう？」

「何故こちらの世界へ戻つて来たのですか？」

「どこへ居ても一緒じゃからな。死ない。老いが無い。人と違うところのは迫害されるものじゃ。」

ふう・・・頭が回らなくなつてきたね。

理解するだけでも疲れてくるね。

学校の授業と全く変わらない・・・いや、理論が良く分からぬい時点でこちらのほうが大変かな。

「少し休むとするか。」

「はい。ありがとうございます。」

「黒姫、お主飯は作れるか?」

「ええ・・・普通になら。」

「今日は普通の飯が食えるの?・・・。」

「・・・一体何を食べているんですか。」

「歴史食いは本を読む以外にも実験好きとこの趣味があつての?・・・。」

料理にいらない物を入れてしまふ人ですね・・・。

「・・・分かりました。御礼は料理でお返し致しますよ。」

「ほつほつほ。楽しみじゃの?。」

手料理を誰かに食べさせる。

久しぶりの感覚だね。

野口君は美味しいしか言わないからね。

まあ・・・それだけで十分なのだけども。

お弁当を作つてあげて学校で渡した時など・・・ふふふ。

また振り出しに戻つてしまつた。

ゴール間近にも振り出しに戻るがある、定番だね。

いいよ。

何度も

何度も

近づくだけだよ。

## 第6話（後書き）

第6話読んで頂き有難いござります。

## 第7話

玉ねぎを・・・

しらたきは無いのですね。

ジャガイモを・・・

醤油と日本酒・・・後少しの生姜を。

「良い匂いがしてきたの、つ。」

「肉じゃがですよ。」

「ワインは入れんのか?」

「あのワインですか・・・?」

あの色が何色もあるワインをですか・・・

美味しいのですが、どうなのでしょうね。  
うん美味しいですね。  
いつも通り。変わらない味。

「今日は私の手作りなのですから、異世界の味に拘る必要は無いと思いまさよ。」

「やつかもの、」

食事を机に並べてゆく。

「いただきます。」

「黒姫の料理と、ふむ・・・美味しいのう。歴史食い、お主も少しは練習したらどううじや？」

「・・・いただきます。・・・嫌ならお爺ちゃんが作れば良い。」

もぐもぐと食べていく。

あ・・・

「ルークちゃん。汚れていますよ。」

口の周りを拭く。

「・・・ありがとうございます。・・・そういえば名前・・・。」

「ああ、く・・・いや南だよ。私は南。」

「・・・南お姉ちゃんありがとうございます。」

「初めて笑ってくれたね。」

可愛い笑顔だね。

銀髪で顔も良い。

将来はすごい美人となるのだろうね。

「黒姫。お主、これからどうするのじや？」

「お城へ行くだけです。小林さんと野口くん。一人を助けて、災厄とやらを全て終わらせ、

家へと帰るのです。約束しましたから。」

「死ぬと思うのじやが？」

「覚悟の上です。野口君の記憶さえ戻れば、後は何とかしてくれるでしょう。」

「・・・信頼と無謀は違うのじやが？」

「ええ、無謀でしょうね。ですが、この世界に味方など私にはいません。ああ・・・そういうえばエルさんがいましたか。ですが、味方はしてくれないでしょう。」

「2・3日前に泊まつていいくのじゃな。火を放つだけで敵う相手ではない。」

「・・・良いのですか？」

「お主が気に入った。そういうたはすじやが？」

「・・・ありがとうございます。」

なんででしょうね。  
いつからでしょう。

他人の善意が簡単に信じられなくなつたのは。  
子供の時は親切だと思つた事が、大人になるにつれて信じられなくなつていく。  
考へている事が想像出来る。

・・・これは困暮を打ち始めてから酷くなりましたね・・・。  
考えすぎもどうかと思います。  
度を超えると被害妄想とかになつてしまいそうですね。  
気をつけましょう。

「今日は休め。風呂に入りたいのならば、お主自身の火で勝手に焚くのじやな。ワシは寝る。」

・・・もう夜でしたか・・・。

時間がたつのが早いですね・・・。

「ルークちゃん、こちらで良いのですか？」

家の外、裏側に回つて来た。

「・・・うん。」

「ここに火をつけて、どれぐらいで焚けるのでしょうか・・・。」

「・・・半刻。」

「そうですか。では”火よ。”」

手の平から火が出る。

・・・そういえば焦つていましたが先程、あちらの世界でも火が出ましたね。

これは・・・ああ・・・そういえば小林さんも使っていましたね。姿を変えていたのですから。

薪が燃える。

火ですか。

私自身はこの火は熱く感じない。

ですが、物に当たつた後は熱さを感じる。

不思議ですね。

・・・ああ、分かりました。手の平から投げた瞬間に火となるのでしょうね。

それまではただ、”体内から取り出した何か”というやつですか。気とか念とかそういうのでしょうかね。

「ルークちゃん、一緒にお風呂に入ろうつか。」

「・・・」

首を振られた。

「なんでかな?」

「・・・お風呂苦手。」

「苦手ならば克服しないとね。」

「・・・苦手。」

ルークちゃんと手を繋ぎ、お風呂へ向かう。

「一人で脱げるかな?」

「・・・大丈夫。」

服を脱ぐ。

そういうえばドレスは置いてしまったね。

・・・ルークちゃんは結構胸があるのだね・・・。  
まだ13～14歳といった所なのだが・・・。

べた。

・・・べた。

女の価値は胸などではないのだよ。

髪を洗う。

「・・・南お姉ちゃんの髪・・・綺麗。」

「そうかい？触つてみる？」

「・・・うん。・・・す」「さうわい。」

「そうだろう？これは私が自慢出来る所だからね。」

「・・・わたしもお風呂入ればなれる？」

「ああ、私よりも綺麗になるだろうね。」

「・・・お風呂・・・入るようにする。」

「良い事だね。きちんと入るのだよ？」

「・・・うん。」

母性とはこういう事なのだろうね。

桜ちゃんや葵ちゃんに入った時にも思った事だ。

小さい子の面倒を見ていると自分が優しくなった気になれるよ。

・・・野口君と団碁をしている時は全く優しくなれないからね・・・。

。その後に桜ちゃんとお風呂に入った時は癒されるよ・・・。

湯船に浸かる。

「ふう・・・。」

髪を纏めるのが毎回大変なんだがね・・・。

この湯船に入る感覚はやっぱり忘れないね。  
やはり、私は日本人なんだ……と自覚させられる。

「……南お姉ちゃん……熱い。」

「……どうやって冷やせばいいのだろうね……。」

「ワシが冷やしてやる。」

水が放たれた。

少しぬるいかな……まあ小さい子が入るのだから……。

「……何をしているのですか?」

「ワシも入らうかと思つてのう。」

「後にしてください工口爺。」

「ほつほつほつ黒姫、お主脱いでも胸が……。」

「殺しますよ。」

髪を巻いていたタオルで身体を隠す。

「はあ……ルークちゃん外に居ては風邪を引いてしまいます。ね  
るくなりましたし入つてください。」

「……ちょうどいい。」

「そうかい。」

・・・外が見える。

周りは森だけで民家は近くになさそうだから安心だけどね。  
星が見えるというのは良いね。

温泉に入りに行きたいね……。

野口君と一人で温泉旅行というのも……悪くないかな。

・・・何かしてくるのかな……?

・・・私から言わないと何もしてこないだろうね……。

・・・いやどうだろうね。

もう私達も大人になつたのだから。  
幼馴染の範囲を超えた事なのだろうね。

・・・そういうえは髪がまた濡れてしまつたね・・・。  
ドライヤーなど無いのだから・・・乾かすのに時間がかかりそうだ  
ね・・・。

火力が調節出来ればいいのだが・・・。

・・・調節・・・想像力。

身体を離れなければ温度は感じない。  
色々使えそうな物は出てきたね。

## 第7話（後書き）

第7話読んで頂きありがとうございました。

「いや、

何か動いている……。

「……南お姉ちゃん……起きやへ。」

「後5分……。」

「……起きて。」

「あと……。」

「起きるの、じや黒姫!」

「あ、おはよひいわこます……。」

昨日はルークちやんを抱きしめて寝てしまつたのですね……。  
それは悪い事をしましたね……。

「……南お姉ちゃん起きた?」

「はい。起きましたよ。」

「やつと起きたか……黒姫。お主は本当に朝が弱いの?……。」

「……なんでここにタイムさんがいるのですか?」

「ふむ……黒い下着も良いこと思つたが、由も悪くなこの?」

「H口爺。早く出で行つてください。」

「はいほ。黒姫。」

「なんですか?」

「あの後、お主の家へ行つてドレスは持つてきただぞ。」

「……タイムセ……。」

「意外と下着は子供っぽいの?……。水色や?……。」

「それ以上言つのはりば、私の名前に賭けて貴方を……。」

「おお……怖い怖い。適当に箱に入ってきたからのう後はお主で

なんとかせい。」「

ふう・・・朝から血圧を上げる人ですね・・・。

まあ・・・こんな格好で寝ている私も私ですがね・・・。

「黒姫。飯を食つた後、ワシに付き合へ。」「

「どういう事でしようか?」

「薪割りじやよ。」

「・・・はい?」

・・・薪割り?

やつて出来ない事はないでしょ?が・・・。

1本の大きな木の前にタイムさんが立っています。

「水よ。」

水の塊がタイムさんの田の前に・・・。

「細く・・・細くじや。」

段々と小さくなつていきます。いえ小さくではなく・・・棒状・・・  
?回転している?

「見とれ黒姫。」

ヒュッ

ズ、ズズズ・・・

木が・・・ずれていきます。

「水で切つたのですか?」

「そうじやな。水というのは、圧縮すればするほど、出力を増す。  
ああ・・・そうですね。水は石をも切れる物ですものね・・・。」

「それが想像力といつた所ですか……。」

「そうじゃな応用を利かせれば何でも出来る。それがこの術式じやよ。ワシならば水で出来る事ならばなんでも出来るという事じやな。」

「……なるほど。」

想像力さえあれば何でも出来るといつのは嘘ではない事はわかりました。

ですが……何故、薪割り？

「そこに、切つた木が何本がある。あれを畳までに薪にするのじや。勿論。お主の術式でじやな。」

「……私は火ですよ？燃えて炭になつてしまつのは？」といふか薪割りなんてする必要ないのでは？昨日お風呂に使つた薪もルークちゃんにかかれば……戻つてしまふのでは？」

「そんな便利な物ではないのじやよ。歴史食いの術式は炭になつてしまつたものを木に戻すことは出来ないといつ事じや。」

・・・成る程。薪と炭では別物と。

「薪に火をつけた直後にルークちゃんが術式を使えば元に戻る。けれども違う物体になつてしまつと戻せないと。中々に使いがたいのかもしれませんね。」

「そうじやのう。黒姫、お主誰も殺したくないのじやるつ~。」

「……出来ればしたくはありません。……ですがもう覚悟は……。」

「わざわざ手を汚す必要はあるまい。」

「……そうですね。」

「薪割りをする。木自体を燃やすなればいいのじや。」

「……そんな事……。」

「お主次第じやな。頑張るのじやぞ。」

・・・行つてしましました……。」

まあ何はともあれ実践ですね……。

木の塊を切り株に乗せる。

・・・重いです。

私は文科系なのですよ・・・。

「はあ・・・はあ・・・。」

燃やさない。

・・・いやまでは・・・火で・・・どうやって切るかを想像します  
よう。

・・・それでいて・・・人を殺さないという武器はなんでしょうか・  
・・。

・・・ああ・・・ありましたね。鞭です。

「火よ。」

想像。

鞭の形を想像して。

段々と細くなっています。

木に向かって・・・振つてみますか。

パン

・・・当たった部分だけが傷ついて・・・少し燃えています。

「どうしたら・・・良いのでしょうか。」

いや、鞭というのに捕らわれては駄目です。

剣だったとしてもやり方次第で殺しはしないでしょう。

剣の形を想像する。

「これだったら剣を買つてきたほうが良いのでは……。  
まあ良いです。お金も無い事ですしね。」

木に向かつて切りつける。

ズバッ

「真っ二つに……」

ボツ

「……燃えてしましましたね……。」

火力の調節は難しいですね……。

もっと抑えて、抑えて。

・・・何個切つたでしょか・・・。

結構・・・というかすごく疲れできました・・・。

あたり一面木の燃えカスだらけですね・・・。

・・・もう一度。  
・・・いや違う。

想像して。

・・・温度を低くするから駄目なのでは?

・・・高く。高く。

もつと高く。

赤い火では駄目です。

青く青く。

青くなるまで燃えてください。

もつと。

もつと。

切れ味を鋭くすれば良いのです。  
瞬間に火が漏れ出さないように。

完璧に剣の形を作る。

・・・綺麗です。

「青い・・・炎の剣ですか。エクスカリ・・・あんな伝説の剣と比  
べちゃ駄目ですね。」

木を切る。

さつきとは違う。

何も手ごたえが無い。

トン

切り株を叩いた音がした。

「・・・真つ二つです。」

切り口は・・・燃えていないですね・・・少し黒くなっていますが・

・・上出来でしょう。

「ほお・・・黒姫。なんじゃその剣は。お主人殺しはしたくなかったのではなかつたのでは?」

「殺さない為です。これは殺さない為に・・・出来たものだと・・・思いたいです。私の意志に従う剣です。」

「ほっほっほ。初めて見る術式じやのう。剣自体に火を纏わせたのは見た事があるが・・・そのような使い方は初めて見たのう。・・・名前でも付けるか？」

「……いえ。小学生の時でしたら楽しくつけられたかもしませんが……。まあ名前をつけるとしたら、ブルー……ブルネットとでもつけましょうか。」

「青い惑星とな。何故その名前なんじや？」

「野口君が好きな漫画の番号の名前なんですよ。」

「お主はこつも悪者の為じやの」。

「・・・ええ。私の全てですか？」

## 第8話（後書き）

第8話読んで頂き有難いござります。



「・・・ふう。」

「沢山・・・切つたのう・・・。」

「そうですね・・・。切りすぎました?」

「1月はしなくてよさそうじゃな。」

「そうですか。それは良かつたじやないですか。老体に鞭を打たないで済むのですから。」

「お主も言つのう・・・。」

数百本の薪が積んであります。

少し楽しくなつてきてしまつたのは『愛嬌』でしょう。  
力を入れなくても切れるのですよ。  
楽しくなつてもきます。

・・・お腹が空きました。

「今日は何を作りましょうかね・・・。」

「カレーがいいのう。」

「また異世界ぽくないものを『所望』ですね・・・。」

「お主が薪をわつとる間に鶏を捕まえておいたからのう。」

「・・・そうですか。・・・言つておきますが捌けないですよ?」

「分かつとるわ。ワシが捌いて水で煮込んでおいた。臭みもこれで  
少しは消えたじやろうで。」

「そこまで出来るならば自分で作れば良いじゃないですか・・・。  
「分かつとらんのう、黒姫。他人が作ってくれるからこそ美味しいの  
ではないか。」

「・・・そうですか。」

・・・そつかもしれませんね。

「・・・南お姉ちゃんはお料理上手。」「

「せうかい。」

ルークちゃんの頭を撫でる。

「せういえば、タイムさん。」「

「なんじゃ?」

「お父様達はどうなつているのですか?」「

「知らんのう・・・。」

・・・えらい無責任ですね。執事長さん・・・。

「ワシが居なくなるのはこつもの事じやからう。1円べりこなれば何も問題あるまい。」

「そうなのですか・・・。それで済むのですか、結構放任主義なのですね・・・。」

・・・本当に大丈夫なのでしょうか?

かなり心配なのですが・・・。

「の、黒姫。」「

「なんですか?」「

「城にいくのじやひひ?..」

「ええ。」「

「ここからは歩いて10日はかかるのじやが?」「

「途中に街などあるのでしよう?」

「お井、金はあるのか?」「

・・・せういえば、ああ換金してもらいましょつか。

「タイムさん、換金していくださー。貴方はあの世界で買い物するのでしょうか?」

「せうじやな。1000円当たり1シグラ当たりでどうじや?」「

「シグラ?どれぐら?ですか?」「

「どぞの宿で1泊は出来る金額じやな。これじや?」「

銀色のマインが渡される。

「これで1泊ですか・・・安いのですね。」

「価値が違うからね。」

「今1万円が確かバックの中にあります。これを換金して下さい。」

「10シグラじやのう。はれ。」

「タイムさんちゅうじ良いです。貨幣に關しても教えて頂けますか?」

「めんどうじやのう・・・トライアはそんな事も教えていなかつたのか?」

「はい。ですが金色の貨幣は見せてもらいましたね。後確か、銅色もありましたか。」

「そうじやな。まず銅色のやつは1グル 100グルあれば1シグルとなる。100シグルあれば1ゴグルとなる。分かつたか?」

「はい。10万円が金貨一枚と。10円が銅貨一枚と。」

「お主、頭は良いのじやな。」

「普通じやないですか・・・?」

「普通でしょう。100倍と1／100をすれば良いだけの話ではないですか。」

「・・・後は、その髪じやな・・・」

「出来れば・・・染めたくは無いですね。」

「ふむ・・・ワシが姿を変えてやる事は出来るが・・・元に戻せんのう。」

「・・・どうこう事でしょつか?」

「その水の術式で他人の姿は変えられないのですか?」

「変えられる。じゃが、100%同じ姿には戻らん。黒姫、お主顔が変わつても良いか?」

「良くないですね・・・。染める・・・しかないのでしょうかね。」

「染める・・・染めたくは無いですね。」

やむを得ないのでしょうか……。

「……タイムさん。」

「なんじゅ?」

「術式とは、媒体を通して……身体から出せるのでしたね……。  
?」

「せうじゅが?」

「少し失礼します。」

椅子から降りて正座をする。

「何をしどるのじゅ?」

「火よ……。」

田の前に青い炎がある。

手の中に……

身体に……

顔に……

髪に……

「……なんとも。黒姫、お主。本当に術式を知らなかつたといつ  
のか?」

「……どうですか?」

「黒姫…………いや蒼姫とも呼べば良このかのつへ。」

「…………南お姉ちゃん…………すいじく綺麗。」

真つ青な髪になつていますね。

「似合ひでありますか?」

「良く似合つてゐるだ。黒とまた違つ雰囲気が出るので。」

「……中々疲れましたが……術式とこのはいつのはいつの風で同じ風で使  
えるのですね。」

「そんな使い方をしたのはワシが見た限りお主が初めてじやよ。」

「なんでも、一番は良いものです。」

「先程、何故正座などしたのじや?」

「ああ……私は囲碁を打ちますからね……。その姿勢が一番集  
中出来るのですよ。」

「……囲碁を打つのかお主。後で何局か打つてもうおつかのつ・  
・。」

「マグネット式しかあつませんよ?」

「十分じや。」

「では、後で打ちましょ。タイムセーブ。」

「セツジヤな蒼姫。」

黒じゅなくっても似合つてこるところてくれるかな・・・野口君は。

ふふ、顔を赤くして言つてくれそうだね。

早く記憶を戻してあげないとね・・・。

準備は・・・出来たかな。

ルークちゃんとお別れなのは寂しいけれども・・・

・・・嫌な事はひとつ終わらせてしまいました。

## 第9話（後書き）

第9話読んでいただき有難い「J」ありがとうございます。

第10話

パチ

パチ

暖炉の火が燃えている。

「黒姫。」

「なんですか？動搖作戦ですか？打つていてる最中は動搖などしませんよ？」

「……違つの？ おま、不思議な手を打つの？」

「そうですか？」

「基本的には普通じゃ、じゃが……前半の山場などひみつも……

・悪手な手を打つ時があるといつたといひか？」

「……漫画の影響ですよ。」

「そうじやったか。」

？ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

中学生3年生のある日。

「南ー南ー囲碁しよびやー！」

「……一体全体じつこいつ事なんだい？ 突然囲碁とは？」

今まで囲碁を打つた経験などないのだが？

「これだよこれーこの漫画超おもしろしれーんだよー。」

「……また漫画の影響かい？ そもそも漫画は卒業したほうが良いのでは？」

「男はいつでも少年なんだよ！」

大冒険！

主人公覚醒！

弱い主人公が段々と強くなる！

ヒロインを助け出す！

男の口マンだろ口マン！」

「私は栗が食べたいね。」

「マロンじやねえよ！栗が食べたいなら終わったら家にくれば山ほどあるわ！」

「さうかい。それは楽しみだね。」

ルールブックを読む。

「奥深いね。トランプやオセロと違つてルールが複雑な感じだね。・・・とこりでこの碁盤はどうしたのだい？」

「買つた！3ヶ月の小遣いなくなくなつたまつた！」

「よくやるね・・・まあ・・・野口君のお金だからね。まずはルールブックを読みながら打つとしようか。」

「そうだな。」

パチ

パチ

「これで、この石がもひえるのかな？」

ジヤラ。

10個程の石をとる。

「な！なんでだよ！」

「これで石が囲まれているはずだが？」

「・・・本當だ。どうなつてんだ！南お前本当に初心者かよー！」

「初めてやつたよ？まあ最初なんだ、最後までやってみよつか。」「そうだな……。」

「パチ

「パチ

「これ……どうやつて勝敗見分けるんだ……？」  
「……石が大量にあるね……地とはじうやつて……。」「まあ引き分けでいいだろ！栗食いに行こうぜー。」「……明らかに私が勝ったよつな気がするがね……まあ栗につられておくとしようか。」

「そーそー。遊びに本気になっちゃいかんのだよ！南君ー。」

「野口君。君はいつも勝負に本気のよつだが？」「……細かい事は言いつこなしだ！」

大量の石が手元に転がってる。

「南ー！今度はまけねーぞ！」  
「そうかい。」

毎日学校から帰つて来て一人で1局打つ。  
頭の体操になつていいくかもしれないね。

「み、南様……チヨコレート……おもちしました……。」「ふむ。ありがとう野口君。あ、後ゴーヒーもいれてくれるかな？」「なんで俺が！くそー！次はまけねーからなー。」「罰ゲームをつけようといったのは君じゃないか……。」「俺が勝つたら南ー！お前メイド服な！」

「・・・そんな物持つていいのかい・・・？」

「かあさん色々服あるからな！なんか見た時無い服が沢山あるんだぜー！」

「・・・雪さん・・・一体どんな趣味をしているのだい・・・？」

「・・・『主人様。これで良いかい？野口君？』」

「・・・お、おう！南！コーラが飲みたい！」

「・・・買って来なければ無いのだがね・・・。この格好でそ・・・。

。

「どうした？」

・・・毒をくらわば皿までだよ？野口君？ふふふ。

「『主人様、買い物にいきたいので外へ一緒に行つて頂けますか？』

「な！外にでるのかよ！その格好の南をつれて・・・」

「さあ、行きましょうか。ふふふ。」

「みなみいいいいい！手を引っ張るな！」

商店街までやつてきた。

「南ちゃん可愛い服着てるねえ。」

「ありがとうござこます。」

「克也くん・・・良い趣味してるわねえ・・・。」

「つるせえ！」

商店街のおじさん、おばさん達に笑われた。

高校生になつた。

「南！団碁部作ろづぜー！」

「また唐突だね・・・。一体なんだというんだい？」

「学校の団碁部去年で潰れたんだとさー3人いりや部活になるみた  
いだしなー！」

「やうなのがい？」

「そりゃ大会にも出られるし良いだるー。」

「野口君・・・君は陸上部だったと思うのだが・・・？」

「先生は許可くれたぜ？趣味の範囲なら構わんだったでー。」

「・・・部長や顧問の先生は？」

「部長は南な！俺部活掛け持ちだから部長やれないしな！顧問は見つけといたからー。」

「・・・無責任だね・・・まあ良いよ。」

「やつりー！これで昼休み打つても変な目で見られなくてすむぜー！」

「別に私は気にならないがね。」

「俺は気になるんだっての！」

毎日。

毎日。

そんな代わり映えの無い日を過げーしていました。

? · ?

「投了じやな。」

「ありがとうございました。」

「ほれ、勝利者の特権じや。」

「これは？鞄？」

「ワシの鞄じやな。術式を使って、物が沢山入る鞄になつてーる」

「・・・そうですか。大切なもののでは？」

「量産品じやよ。」

「そうですか。」

茶色い革のショルダーバックですか。

・・・こういう物も作れるのですね・・・。

「もしかして、あの照明器具もタイムさんが?」

「そうじやな。あの明かりは苦労したわい。

あれはのひ、中に小さい蠟燭が3本入つとる。

術式を使用し、蠟燭が倒れた場合とある一定の長さになつた場合に発動するように」とる。」

「・・・ある一定の長さや倒れた場合、元の長さや場所に戻る。」

「そうじやな。」

「便利ですね・・・。」

ファンタジーですね・・・。

いや、火がでたり水を出したり。

・・・そういえば。

「タイムさん。空を飛んだりは出来ないのですか?それが出来ると楽なのですが?」

「できんのう。そのような想像した事もなかつたわ。」

「空を飛ぶモンスターなどは居ないのでですか?」

「ある。翼が生えたでかいトカゲみたいのがのひ。」

・・・それはドラゴンでは・・・?

トカゲで済ませていいものなのでしょうか?

「それを倒す時は一体どうやって・・・。」

「お主・・・火の玉を出した時方向を変えられたじゃね?矢でも一緒じやよ。」

・・・ああ成る程追跡するといつ事はほぼ100%当たるといつ事ですね。

「だから空を飛ばなくとも良いと・・・。」

「そうじやな。飛べたら飛べたで気持ちの良いものじやね?がな。」

鞄に物をつめる。

全て入るのでしょつか?

「そういえば取り出す時はどうすれば?」

「欲しい物を念じれば良い。」

「そうですか。」

「例えば・・・」ひじやな。

バサツ

鞄からドレスが出てきました。

「成る程。」

ドサツ

「何をしているのですか?」

「いやなに・・・手違いじやよ。フォフオフオツ。」  
下着がばら撒かれました。

「本当に・・・変態ですね。」

「爺になると趣味が偏るもんじや。黒姫は全く動搖せんからつまら  
んのじやがな。」

明日には・・・出発です。

野口君は元気に・・・まあ元気でしょ。

焦つても詮無い事です。

目的は、せつめつとしているのですから。

## 第10話（後書き）

第10話読んで頂きありがとうございました。

森の中を進む。

3つの足音が進む。

「どうしてこうなったのでしょうかね・・・。」

「それは、歴史食いに言つのじやな。」

「・・・タイムさん？歴史食いは俗世から離れたのでは？」

「そうじやな。人との関わりを拒絶しておつたのじやがのう・・・。」

「

一人で出発するつもりでした。

タイムさんもそのつもりだったのでしょうか。

これ以上、迷惑をかけるつもりなどなかつたのですがね・・・。

30分前

「・・・南お姉ちゃんと一緒に行く。」「手を握られた。

「・・・ルークちゃん？」

「・・・お姉ちゃんと一緒に行く。

・・・お母さんと同じ。」

タイムさんに目を向ける。

首を振られた。

「ルークちゃん、私はこれから危険な事をする。命の危険もあるはずだね。」

着いてくるとルークちゃんも危ない事に巻き込んでしまつ。「

「・・・一緒に行く。」

「何故だい？私がお母さんと似てこむのかな？」

「……違う。お母さんが死んじゃう前の田と同じ顔をしてる……」

「気がするの。」

「……。」

目を瞑る。

私は、そんなに駄目な顔をしていたのかな。

こんな幼い子にまで……分かるような顔をしていたかな。

「歴史食い。お主は足手まといやが。」

「……危ない所には近づかない。……駄田？お爺ちゃん。」

ため息を1つ。

首振りを2つ。

「黒姫、歴史食いを連れて行つてやつてくれんかのう？本以外でのワガママなど今まで言つた事がなかつたからのう。とりあえずワシも王都までは着いて行くしかないじやろうな。」

「……そつですか、分かりました。では、ルークちゃん一緒に行くとしようか。」

「……うん。」

必要最低限な物を用意して、次の村へと歩いていた。

「歴史食い、お主自分で歩けなくなつたならば、戻ると誓う。」

「……うん。」

「そつでしちゃうね。」

自力で歩けなくなつても一度や二度ならば私やタイムさんで助けてあげられる。ですが……ずっととは無理でしちゃうね。

サクツ

草の葉を踏みしめて歩く。

大きな森ですね。

所々しか日の中が入らない森。

タイムさんのあつた家以外には手が付けられて居ないのでしょう。

ガサツ

遠くの草が揺れた。

「何かいるのでしょうか？」

「モンスターじゃ、黒姫準備をせい。」

「・・・良く分かるのですね。」

「当たり前じやろ？。ここはワシの庭みたいなものじや。」

2匹の・・・鶏？

大きさは2mはありますよ？

「ほお・・・大物じやのう。黒姫、今日の食料じやな。」

「・・・あれを食べるのですか？」

「勿論じやな。昨日も食べたじやろ？。」

「あれば、そうですか・・・。」

食べ物になる前を見たらあまり食べたいとは思わないですね。  
ですが食料節約は大事な事でしょう。

10日分は鞄にいれてありますが、何が起こるかはわかりませんからね。

『きいいいいいいいい！』

「嫌な声ですね・・・。」

甲高い声。

私達は「」飯になる気はないですよ?

「黒姫、1匹は任せたのじゃ。頭を落とすのじゃな。それで十分じや。」

「・・・はい分かりました。」

「・・・」

「炎よ。」

手の平の前に蒼い炎が出る。

手を鶏に向ける。

投げる必要は無い事が分かつた。  
近づく必要も無い事が分かつた。

伸びて下さい。

蒼い炎から1本の糸が鶏に向かつ。  
左に逃げましたね・・・。

「左へ」

1本の糸が鶏を追つ。  
触れる瞬間を狙う。

「ブループラネット」

糸の先が剣先へと変わる。  
首が飛んだ。

「・・・ふう。」

「お主よくそんな芸当が出来るの?・・・。」

”生き物を殺す”というのはきついですね。

「黒姫、歴史食いを少し離しておくのじや。」

「・・・分かりました。」

氣をつかわれてしましましたね。

ルークちゃんは、こちらの世界の人間。殺し、殺される弱肉強食の世界の人間。

この程度ではなんとも思わないのでしょうかね・・・。

「・・・南お姉ちゃんいこ。・・・お爺ちゃんの邪魔しちゃうよ。」

「そうだね。少し水が飲みたいね。」

冷たい水を飲んで頭を冷やしたい所だね。

夜になった。

「黒姫、お主動物を殺した経験は?」

「一度だけ、こちらの世界へ来た時に大きな猪を。ですが、その時は頭も働いていませんでした。それに加えて人が死にそうでした。今のような状況とは違います。」

「そうじやつたか。こちらの世界は日本とは違うのじやぞ?。」

「そうですね。日本は良い国なのだと、異世界で思うとは・・・。動物を殺した事も意識せずお肉が食べられるのですから、そんな事が幸せだとは思いませんでした。」

パチ

パチ

焚き火の火が燃る。

ルークちゃんの頭が私の膝の上にある。  
髪を撫でる。

「・・・う。」

寝苦しいのかな？

話が終わつたら横にしてあげないとね。

「戻りたくならんのか？」

「なりません。」

「即答なのじやな。今なら戻してやらん」ともないのじやが？そのイヤリングを置いてゆけば、あちらの世界ではお主は一般人じや。「これは絆です。野口君との大事な大事な思い出です。もし日本に帰つたとしたら今度は本当に野口君の事を思い出せない」という事でしう？」

「じゃな、こちらの世界の事など忘れて。勇者の事など忘れ。一人の女として生きるのじやな。」

「無理です。絶対に後悔します。」

「思い出せないのじやぞ？」

「それでもです。」

「【お主が勇者を殺す事になるかもしれんぞ?】」

・・・ああここですか。

先日のような問答では無いのですね。  
視線が違います。

本気・・・という事でしうか。

私が・・・本当に殺す可能性があると。

「前も言ったでしょ。私は野口君と一緒にいたい。私が殺してしまふのでしたら、一緒に死ぬだけです。時遣い。・・・ええ。覚悟の上ですよ。」

「お主の覚悟を疑つて悪かつたのう。」

「大丈夫です。私が殺す可能性などどのですから。」

「フォツフォツフォ。妬けてしまうのう。」

「妬くような歳ではないでしょ。」

「男はいつでもいつまでも、少年なのじやよ。」

「・・・そうかもせんね。」

パチ

焚き火だけが森に響く。

## 第11話（後書き）

11話読んで頂き有難いござります。

## 第1-2話

1日と数時間。

やつと森を抜けましたね・・・。

「とりあえず一段落という所でしょうか。」

「そうじゃのづ。」

何度かのモンスター襲撃がありましたが、とりあえずは大丈夫そうですね。

私は慣れてしまうのでしょうか。この生活に慣れてしまつといふことは普通の生活へは戻れないのでは無いでしょうか。

・・・いえ、何を考えているのでしょうか。もう普通では無いこというのよ。

「後数時間も歩けば小さな街に着く。黒姫、今の内に立派なお城へお入りなさい。」

「なんでしょうか?」

「街へ行つたら別行動じや。」

「・・・どういう事でしょうか?」

「ワシはお主を気に入っている。歴史食いもそうじやひづ。じやが・

・・馴れ合いはせんというだけじや。今まではワシ以外に情報を手に入れられない、じやから手を貸してやつていたにすぎん。黒姫、お主はお主の生き様を晒せ。」

「・・・そうですか。タイムさんとルークちゃんはただ着いて来ているだけ。私は私のしたい事を自分の責任で行えというわけですね。」

「

「そうじゃな。ワシ達はお主のやつた事に対しても言わん。じやが手助けもせん。ここからはお主自身で情報なり、金なりは手に入れられるのじやからな。ああ・・・歴史食いが居る分歩みが遅いのは、ワシが道案内をしとる。それで5分5分じやひづ?」

「・・・そうですね。」

「 そういう事は街の中でのお金や、泊まる先、」飯は全て私自身でなんとかしようと。

道中で私に動物を殺させたのは・・・」飯を食べさせてあげる為だつたと。

「 厳しいですね・・・。いや優しいのじょ。私がこの世界で生きていけるよう示してくれている。動かざる物食べるべからず、弱肉強食の世界。

「 今日はその街で宿にワシらは泊まる。ワシらは時間も金もある。お主が出ると決めた日に宿まで来るのじやな。」

「 はい。分かりました。」

「 これも渡しておく。」

「 ・・・通行証ですか。」

お父様達と一緒に見たものですね。

木のカードにミナミ・クサカ。と書かれています。

お父様達のは金色でしたね。あれは貴族という事でじょつか?

「 これが私の唯一の身分証明書と言う所ですか。」

「 それはまだ完成しておらん。」

「 ・・・では街へは入れないのですか?」

それは困りますね・・・。完成させるのも私への仕事といつ事でしょうか?

「 完成させただけじやよ。黒姫、お主の髪の毛を一本齧るのじや。」

「 プチッ。」

「 これで良いですか?これで何を?」

「 まあ、見ておれ。」

髪の毛を近づけて・・・え?

「 吸い込んだ?」

「 そうじや。黒姫、指を近づけるのじや。」

「 プチッ

「 いたつ・・・。どうこう事ですか?」

「血を吸い込んだのじゃ。これで完成じゃな。」

銀色のカードへと変わっていました・・・。

名前の横に”認定”と書いてありますね。

「これがお主の身分証じゃ。この木は一人一つは絶対に渡される。じゃが無くした場合、再度手に入れるには1ゴグル必要となるのじや。普通の者ならば2度と手に入れられん。1ゴグルあるのならば1月は飯に困らんじゃろつからな。この世界ではこの通行証があればある程度なんでも出来るからのう。まあ・・・もし無くして悪用されたのならばお尋ね者となるだけじゃがな。」

「・・・怖いカードですね。」

「運転免許証と大差ないじゃろつ? 無くさねば良いだけの事じや。私はまだ運転免許証を持つていませんよ。」

3時間程歩いたでしうか。

「見えてきたのう。」

「あれですか。」

遠くに石の壁が見えてきました。

「ようこそ。イクルエールへ。討伐者の方々ですか? 商いの方でしたら荷物を一度見せて頂きますが?」

「討伐者じゃのう。」

「そうでしたか。では通行証を見せて頂けますか? ... ハリック・トル。・・・ミナミ・クサカ。ルーク・シユタ・・・シユタイン様! ? 失礼致しました。どうぞお通り下さい。」

「勤めご苦労じゃ。」

「いえ、シユタイン様にお会い出来ただけでも光榮です。」

「これは駄賃じゃ、とつておけ。」

「・・・ありがとうございます。」

「タイムさん貴方の通行証は名前が何故エリックなのですか？」

「適当じやよ。本名なぞ忘れた。」

「もつ一つ良いですか？ルークちゃんの通行証は・・・何故シュタインに？」

確かルークちゃんは妾の子で、シユタイン性を継いで居ないはずでは？

「ワシが使うからじやよ。」

「ああ・・・成る程そうでしたね。」

「黒姫、さあここからお主は別行動じやな。ワシらはこの街で一番でかい宿にある。その金があれば3日は宿に泊まれるじやう。じやが・・・王都までは後3つの街がある。最低でも3シグルは稼ぐのじやな。飯も食つのじやろうから10シグルは必要と考えるべきかのう？」

「そこまで教えて頂けるのですね。」

「死なれても困るからね。」

お金を稼ぐ。アルバイトなどほどこした時が無かつたのですが

ね・・・。

「・・・南お姉ちゃん。・・・また明日ね。」

「ルークちゃんまた明日。」

さて・・・一人になってしまったわけですが。まだ昼過ぎといつた所でしょう。とりあえず泊まる所をなんとかしないといけないですね。

誰でも良いくら話しかけて宿の場所を聞き出すとしまじょが。

「すいません。」

「・・・なんだいあんた?」

ふむ、灰色の髪、蒼い瞳、釣り目で身長が結構高い。 175cm  
といった所かな?

「こちらの街へは初めて来たばかりで、安く泊まれる宿などがあり  
ましたら教えて欲しいのですが?」

「ああ・・・あんた討伐者か?」

「はい。」

討伐者とはなんでしょうか・・・。

「女の討伐者とは・・・あんた強いんだな。」

「それ程でも無いと思いますよ。」

「あの宿が安いな、雑魚寝だがな。」

「・・・申し訳ありません。一応個室の宿が前提でお願いします。  
さすがに男の人達と一緒に寝るのは嫌ですね。」

「じゃあ、中心に近い宿に行くといい。あの噴水の周辺の宿ならば、  
安心して寝る事は出来るだろ?よ。」

「ありがとうございます。」

(INE)

アイエヌエヌ・・・これが宿のマークでしょうかね?  
扉を押し、中へ入る。

「すいません。こちらの宿の値段を聞きたいのですが?」  
受付の女人へ尋ねる。

「3シグルとなります。朝食、夕食をつけるのでしたら1シグルず  
つ追加となります。」

「・・・分かりました、とりあえず夕食をつけていただいて1泊し  
たいのですが部屋は空いていますか?」

「大丈夫ですよ。4シグル確かに預かりしました。では、こちら

ヘビハゲ。」

殺風景だね・・・。  
ベットと机以外に何も無い。  
いや、そんなものでしょ。

「・・・ふう。」

とりあえず休む場所は確保といった所かな。  
「起きれるのかな。自力で起きなければいけない」というのは久々だ  
ね・・・。」

仕事は何をすれば良いのかな。

・・・ふふ。なんだか少し楽しくなつてきたね。

討伐者というのは多分モンスターを狩る職業なのでしき。あまり・・・したくは無い仕事ですが背に腹は変えられません。

多分日雇いの仕事などほぼ無いでしょうからね。それを探すぐら  
いならば討伐者でお金を稼ぐべきでしょう。私にはその力があるの  
ですから。

・・・野口君。

一人は寂しいね。

## 第1-2話（後書き）

第1-2話読んで頂きありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3918y/>

---

野口君観察日記

2011年11月27日11時09分発行